

30-467



101

30-464

凡 例

- 一 本書は利根川沿岸より銚子に出で房總半島を一周したる明治四十年六月の旅行及び箱根舊道を越して伊豆半島を横斷し西海岸を繞り東海岸に出でし同年十一月の旅行記を合せしものにして主とする所は繪畫にあり。
- 二 第壹卷と同じく從來の名所圖會に准じたるものなれども特に地方的風俗に重きを置き其の地を踏み其の景を描くと共に生活の狀態を記して旅せざるものに猶其の境を忍び得可き便を期せり。
- 三 同行者は岡野榮、中澤弘光、山本森之助、跡見泰の四氏及び予にして房總半島に鹿野山、鋸山を逸せるは他日増補するの期ある可し。
- 四 本書挿入の繪畫は悉く同人の手に成り、紀行は予一人の手に成りしもの他の諸氏は更に之に關せざりき。
- 五 予等一行の旅行に内國通運會社が特に多大の便宜を與へられしに就いて社



本名勝寫生紀行

第二卷目次

利根川	四五
箱根舊道	一一九
口伊豆	一三九
奥伊豆	一六三

明治
41 7 25
内交

長吉村甚兵衛氏の厚意を謝す。

明治四十一年七月

小林鍾吉

繪畫目次

表紙外裝圖案……………岡野榮

見返し圖案一……………(彩畫、木版)……………中澤弘光

扉畫……………(彩畫、木版)……………岡野榮

扉畫、利根川……………(彩畫、木版)……………岡野榮

船月の渡……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林鍾吉

將門城趾……………(鉛筆淡彩、木版)……………中澤弘光

取手……………(鉛筆畫、寫真版)……………岡野榮

汽船の中……………(毛筆淡彩、木版)……………中澤弘光

佐原……………(鉛筆畫、寫真版)……………岡野榮

香取神社……………(鉛筆畫、寫真版)……………岡野榮

潮來出島……………(鉛筆畫、寫真版)……………山本森之助

本書
次卷
豫告

△京都
△琵琶湖沿岸

發行所
中西書屋

屏畫、銚子

潮來菖蒲の波 (毛筆淡彩、木版)	中澤弘光
大舟津 (色鉛筆畫、木版)	跡見泰
鹿島社頭 (鉛筆淡彩、木版)	中澤弘光
御手洗の池 (彩畫、木版)	小林鍾吉
祭文語 (毛筆淡彩、木版)	岡野榮
鯨干し (鉛筆淡彩、木版)	岡野榮
銚子供養塔 (鉛筆淡彩、木版)	中澤弘光
川口明神 (鉛筆畫、寫真版)	小林鍾吉
君ヶ濱 (鉛筆畫、寫真版)	中澤弘光
大吹岬松原 (水彩畫、四色版)	中澤弘光
犬若 (鉛筆淡彩、木版)	中澤弘光
漁師 (鉛筆淡彩、木版)	岡野榮

屏畫、房總半島

波切不動 (鉛筆淡彩、木版)	岡野榮
大東海水浴場 (鉛筆畫、寫真版)	中澤弘光
大原石燈籠 (色鉛筆畫、木版)	山本森之助
隧道 (鉛筆畫、寫真版)	岡野榮
小湊誕生寺 (彩畫、木版)	中澤弘光
小湊漁村 (鉛筆畫、寫真版)	小林鍾吉
清澄山登り口 (毛筆淡彩、木版)	岡野榮
清澄旅舎 (ペン畫、寫真版)	小林鍾吉
日蓮上人行の趾 (鉛筆畫、寫真版)	岡野榮
星の井 (鉛筆淡彩、木版)	中澤弘光
朝日の森 (毛筆淡彩、木版)	小林鍾吉
小松原 (鉛筆畫、寫真版)	小林鍾吉

鴨川……………(鉛筆淡彩、木版)……………中澤弘光

地曳綱……………(鉛筆畫、寫真版)……………山本森之助

仁右衛門島……………(鉛筆淡彩、木版)……………小林鍾吉

白濱の耕作……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林鍾吉

白濱……………(鉛筆畫、寫真版)……………中澤弘光

海草採……………(鉛筆淡彩、木版)……………山本森之助

白濱の月……………(油畫、四色版)……………山本森之助

鷹之島沖之島……………(毛筆淡彩、木版)……………中澤弘光

鈍切一之宮……………(毛筆淡彩、木版)……………小林鍾吉

那古寺……………(鉛筆淡彩、木版)……………岡野榮

船形觀音堂……………(鉛筆畫、寫真版)……………山本森之助

勝山海岸……………(鉛筆畫、寫真版)……………山本森之助

扉畫、箱根舊道……………(彩畫、木版)……………岡野榮

關所趾……………(鉛筆淡彩、寫真版)……………中澤弘光

蘆之湖の富士……………(水彩畫、木版)……………小林鍾吉

箱根舊道……………(鉛筆淡彩、木版)……………中澤弘光

扉畫、口伊豆……………(彩畫、木版)……………岡野榮

古奈神社……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林鍾吉

反射爐……………(鉛筆畫、寫真版)……………岡野榮

江川太郎左衛門邸……………(鉛筆畫、寫真二色版)……………岡野榮

獨鈷之湯……………(水彩畫、寫真版)……………中澤弘光

湯ヶ島……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林鍾吉

天城山登り口……………(鉛筆畫、寫真版)……………岡野榮

湯ヶ野溫泉……………(水彩畫、四色版)……………中澤弘光

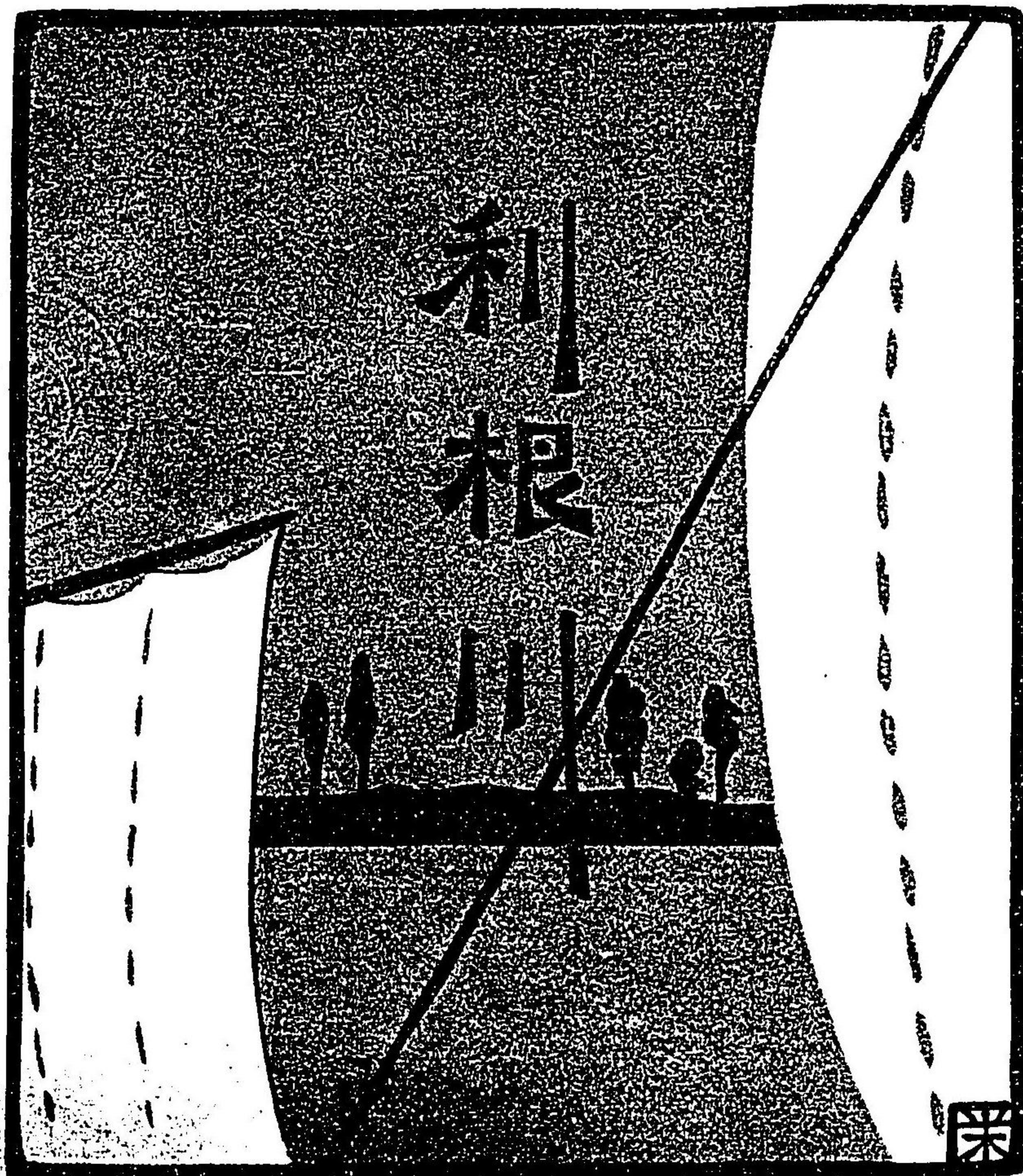
扉畫、奥伊豆……………(彩畫、木版)……………岡野榮

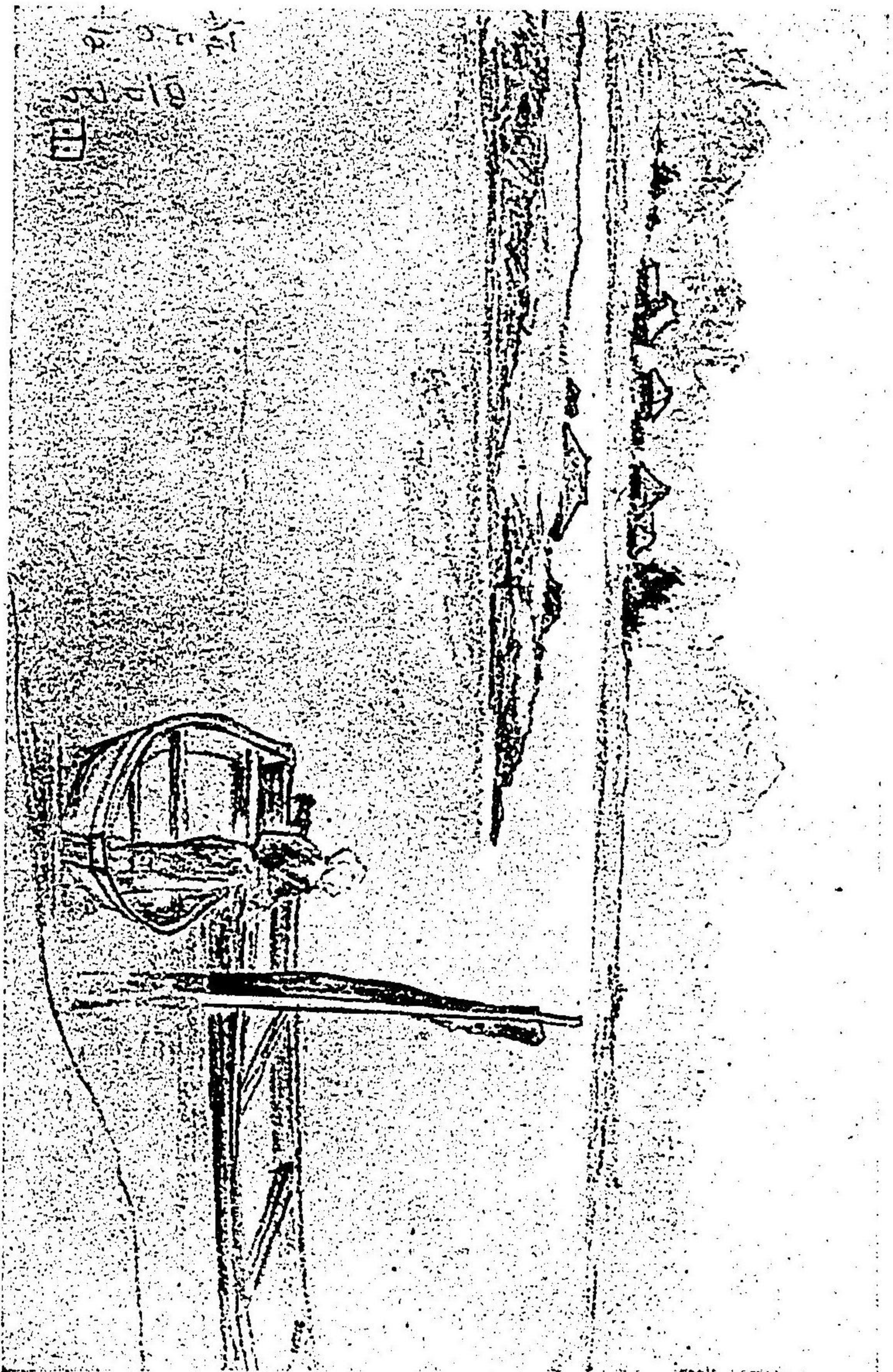
下田港……………(水彩畫、四色版)……………小林鍾吉

加茂温泉……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林 鍾 吉
 長津呂……………(鉛筆畫、寫真版)……………山本 森之助
 石廊岬……………(彩畫、木版)……………中澤 弘 光
 小杉原岬……………(鉛筆淡彩、木版)……………小林 鍾 吉
 松崎海岸……………(水彩畫、四色版)……………中澤 弘 光
 松崎波止場……………(水彩畫、四色版)……………小林 鍾 吉
 雲見岬……………(鉛筆淡彩、木版)……………中澤 弘 光
 堂ヶ島……………(油畫、四色版)……………山本 森之助
 田子灣の富士……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林 鍾 吉
 土肥大湯……………(毛筆淡彩、木版)……………岡 野 榮
 吉奈温泉……………(水彩畫、四色版)……………小林 鍾 吉
 天城山……………(鉛筆畫、寫真版)……………山本 森之助
 狩野川……………(鉛筆畫、寫真版)……………小林 鍾 吉

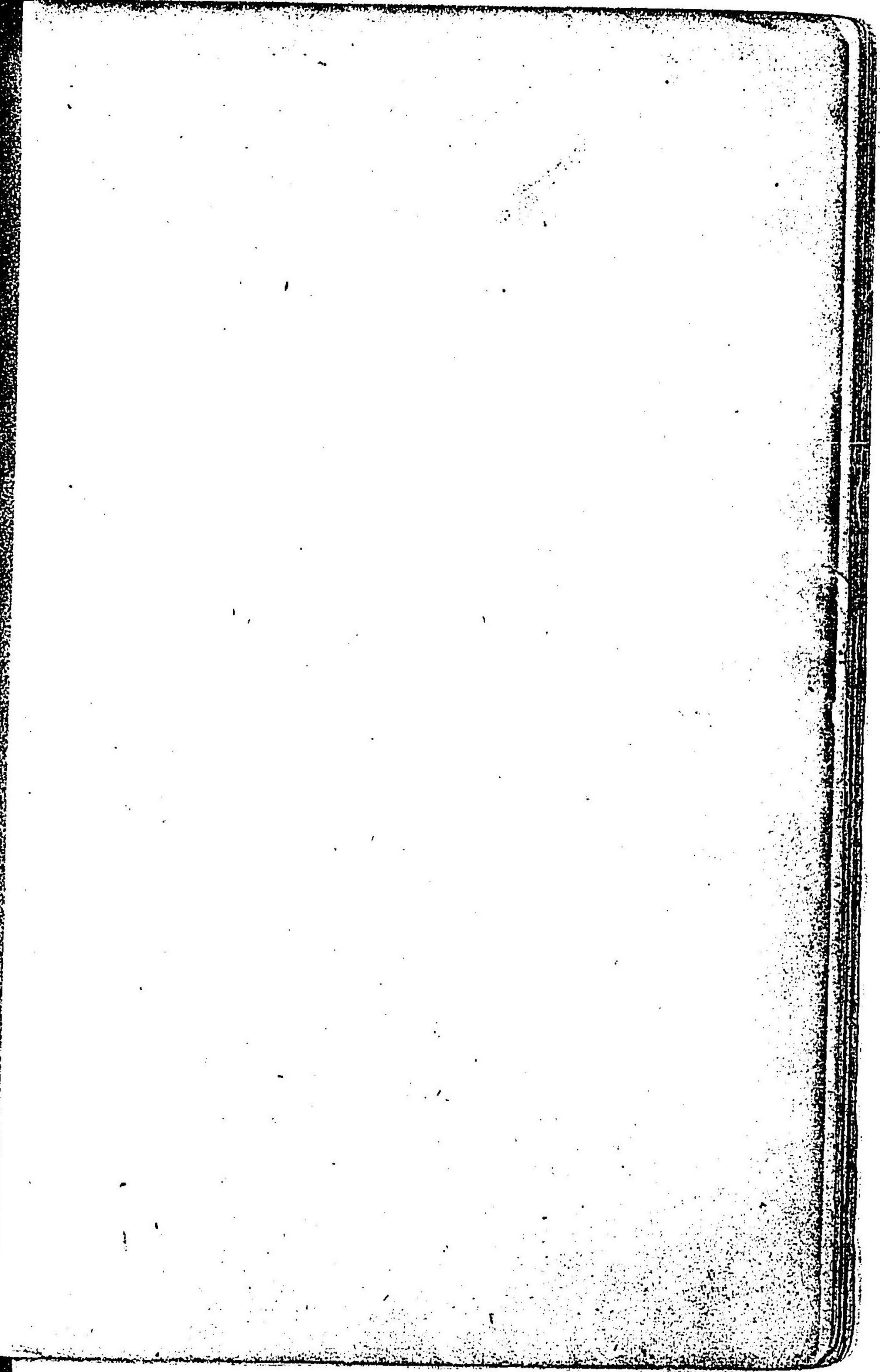
月見ヶ丘……………(鉛筆畫、寫真二色版)……………小林 鍾 吉
 魚見岬……………(鉛筆畫、寫真版)……………岡 野 榮
 初島遠望……………(彩畫、木版)……………山本 森之助
 伊豆山……………(鉛筆淡彩、木版)……………岡 野 榮
 湯河原温泉……………(鉛筆畫、寫真版)……………中澤 弘 光
 見返し圖案二……………(彩畫、木版)……………中澤 弘 光

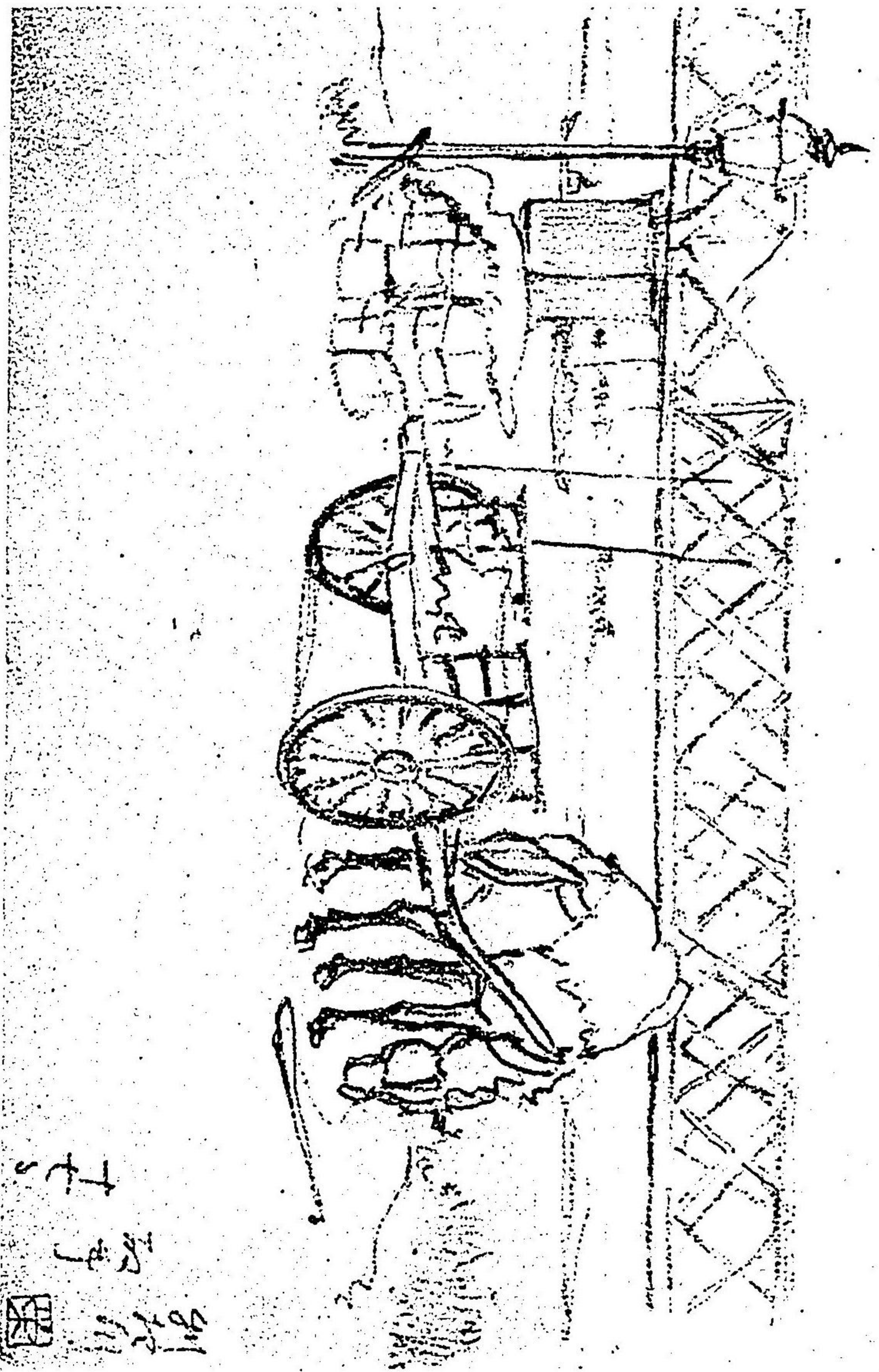
木版彫刻 伊 上 凡 骨
 木版印刷 西 村 熊 吉
 原色及寫真版 田 中 猪 太 郎
 活版印刷 中屋商店活版部
 裝 釘 片 山 吉 次 郎





小 船 林 鐘 戸 の 渡



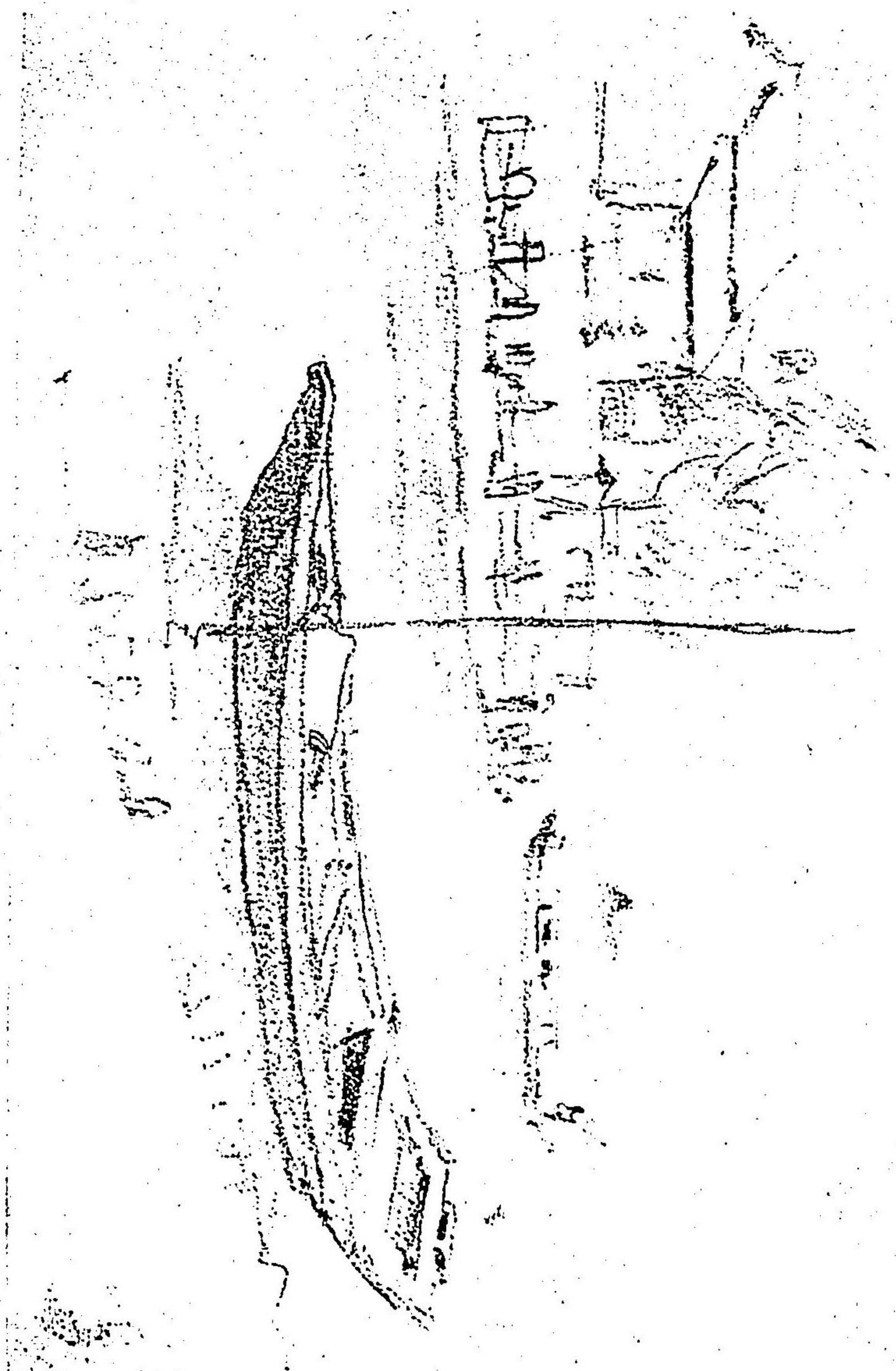


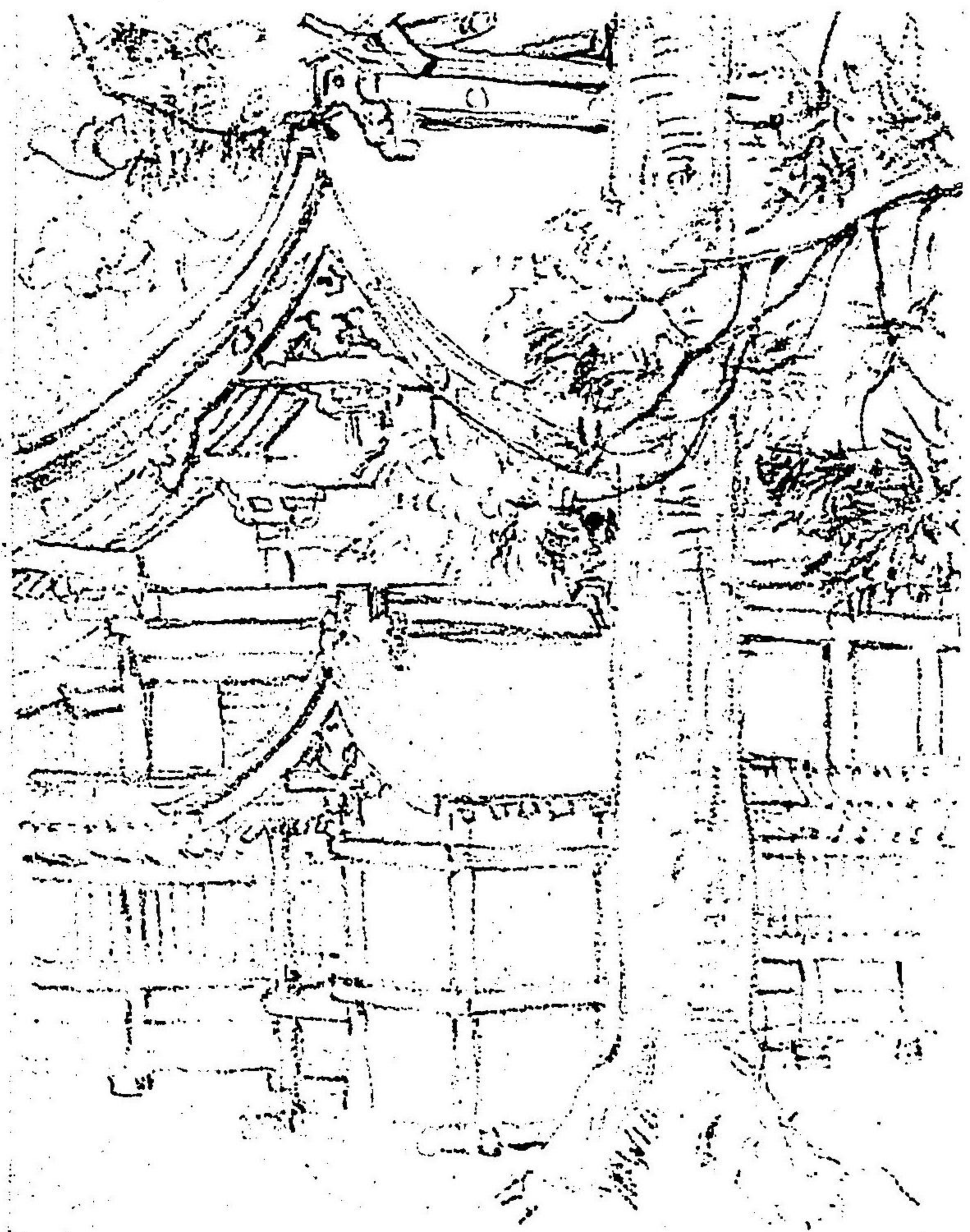
手
 菜
 野
 取
 阿

手
 菜
 野
 取
 阿

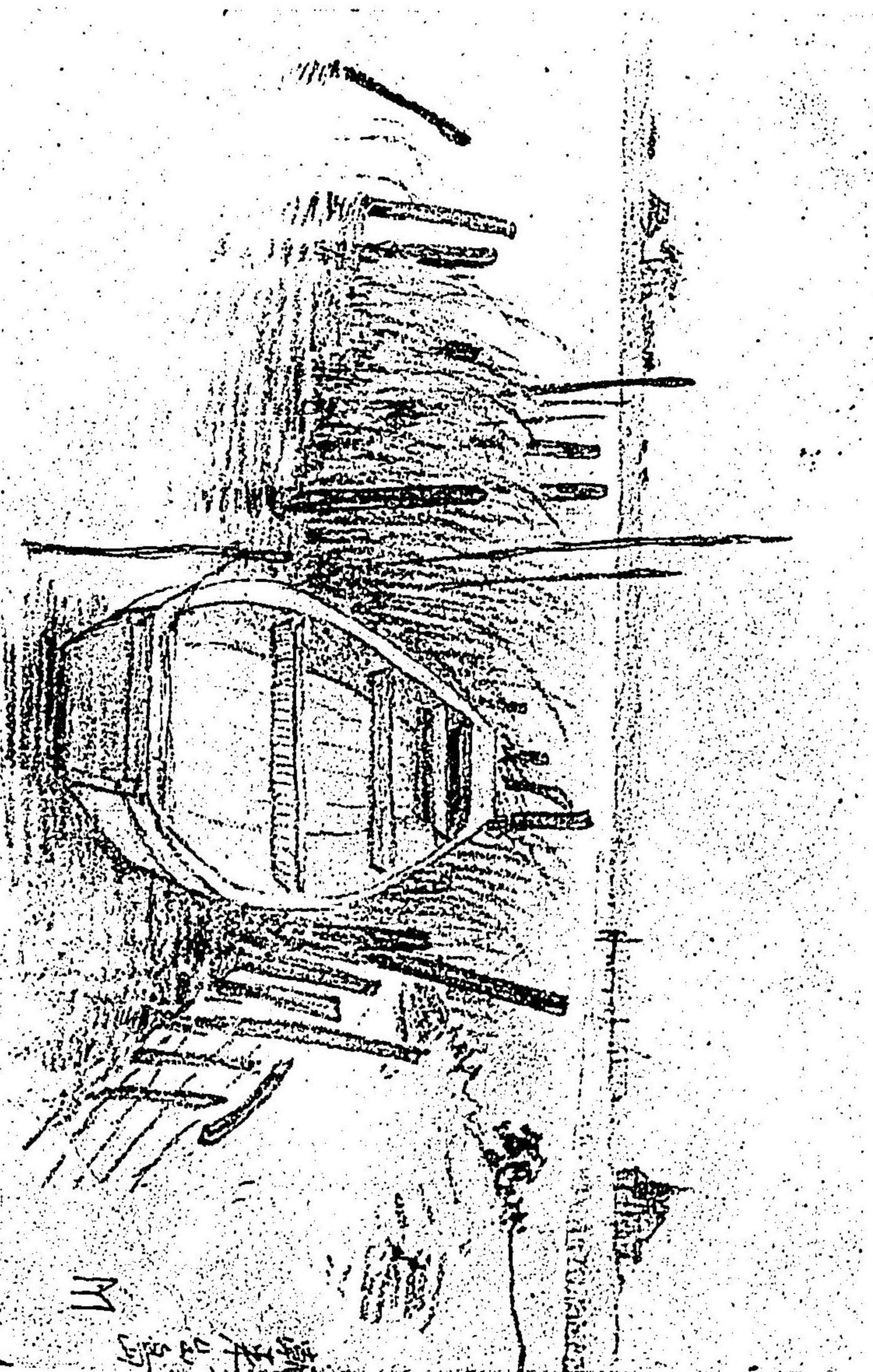


原
榮
野
岡





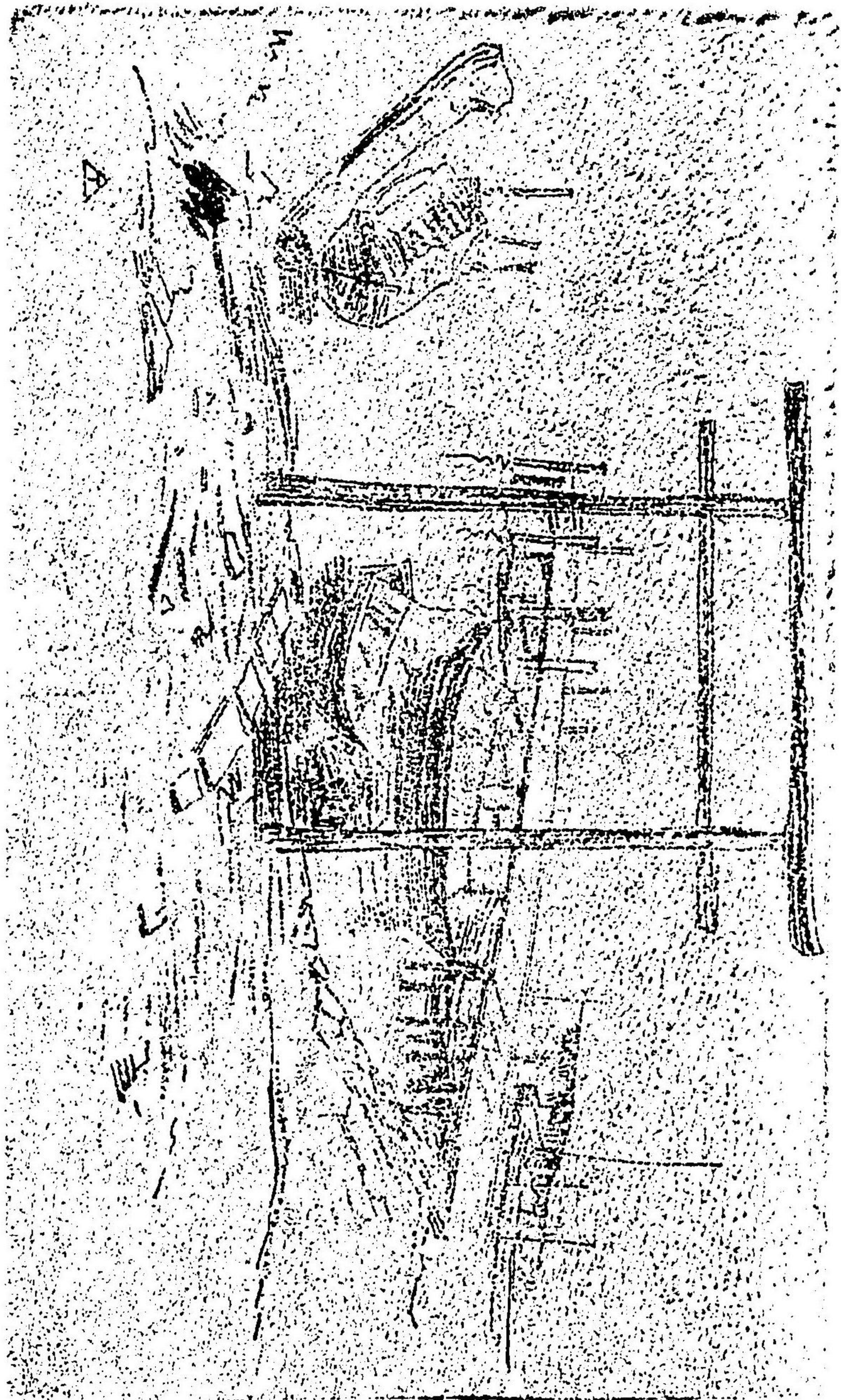
香取神社
野祭

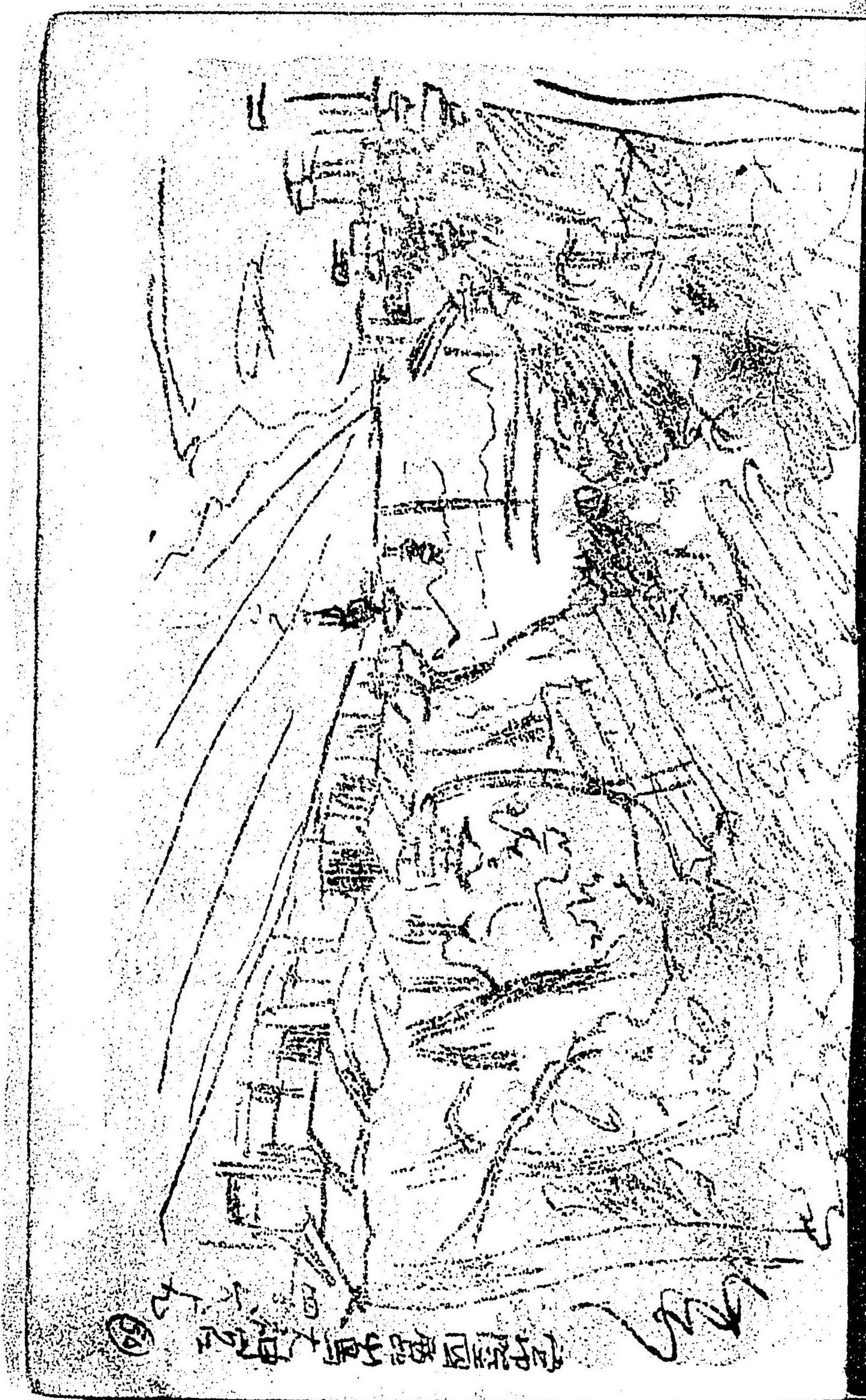


湖本森之助出島



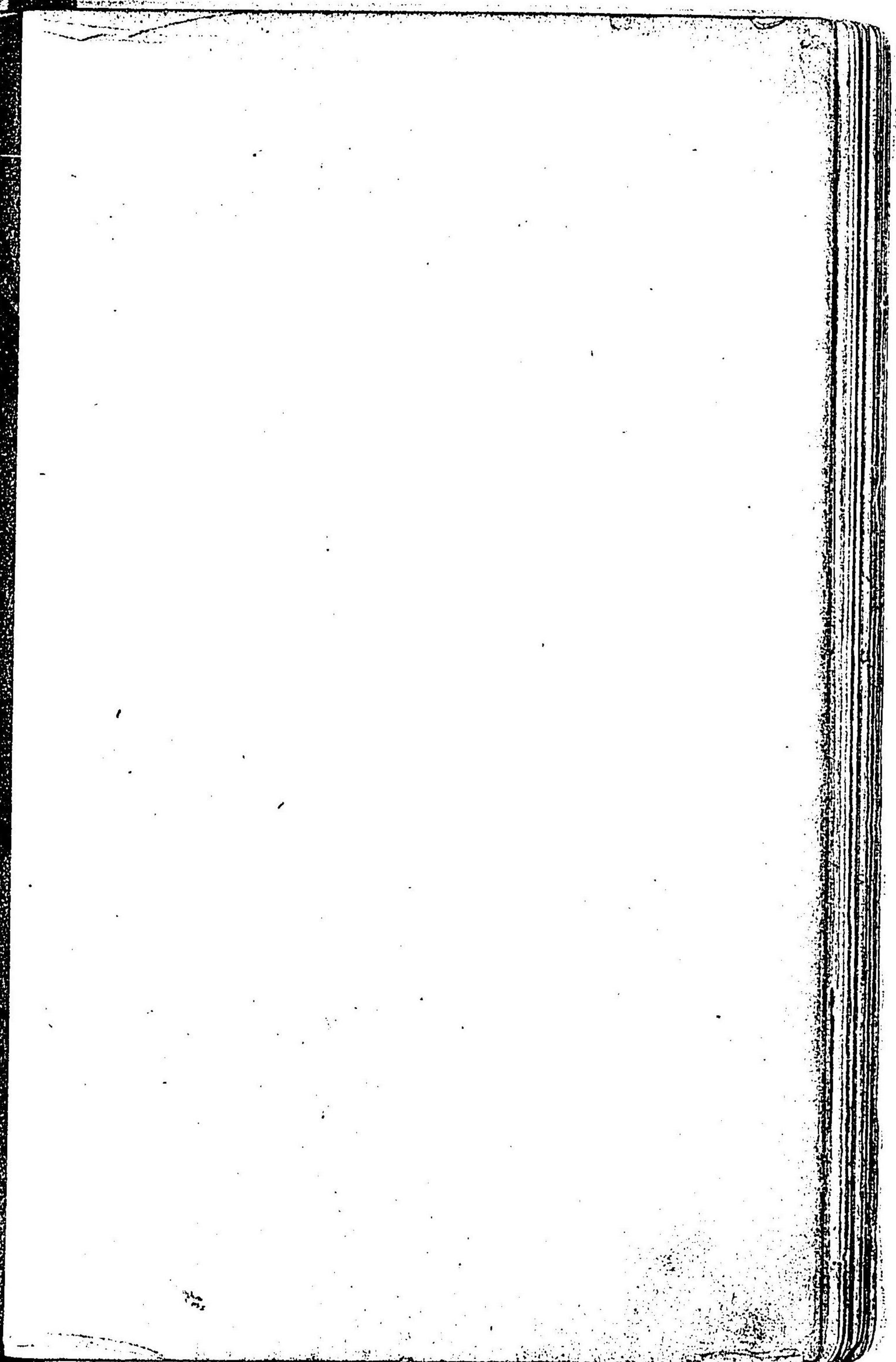
大 34

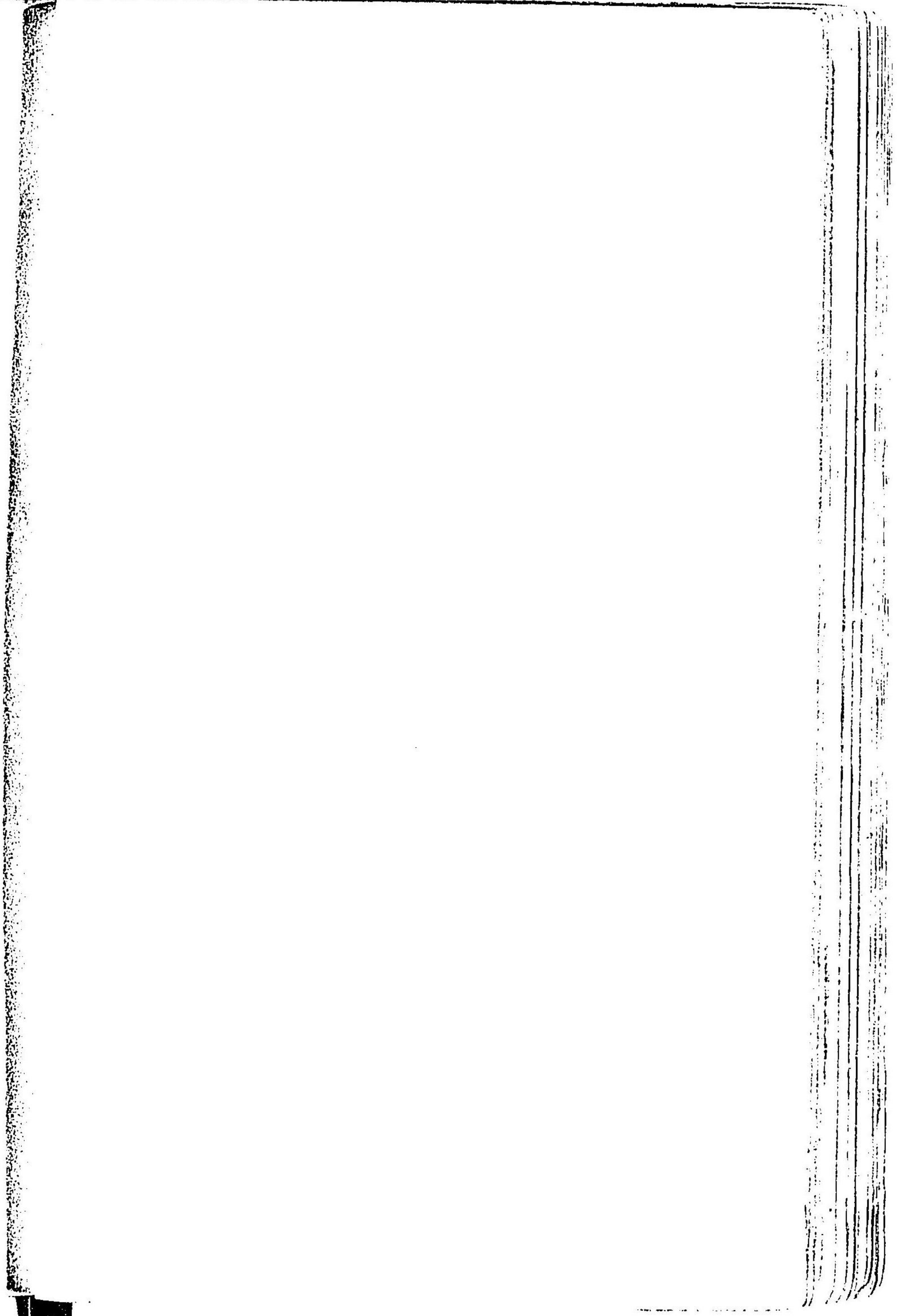




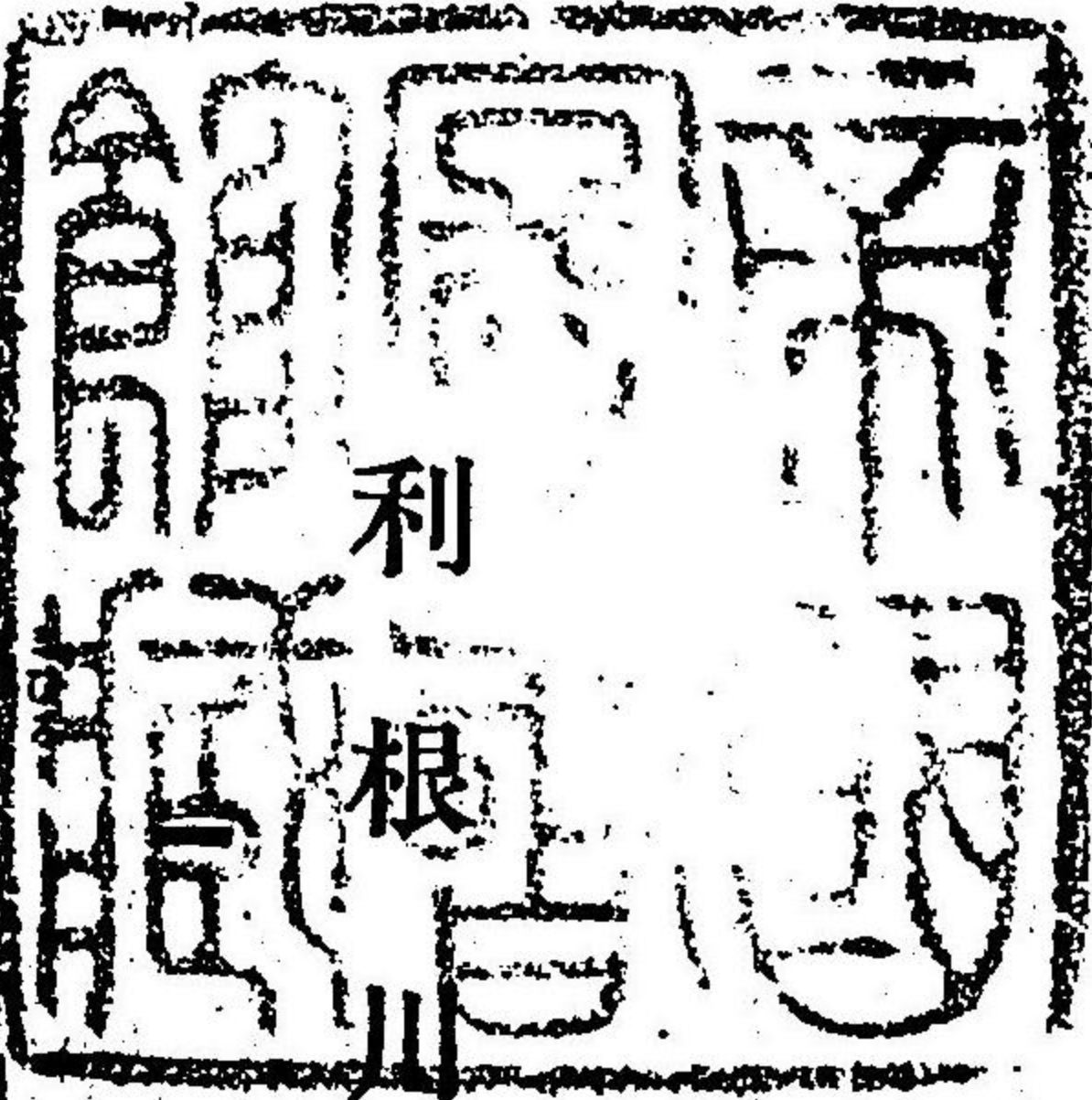
上海大馬路

1922



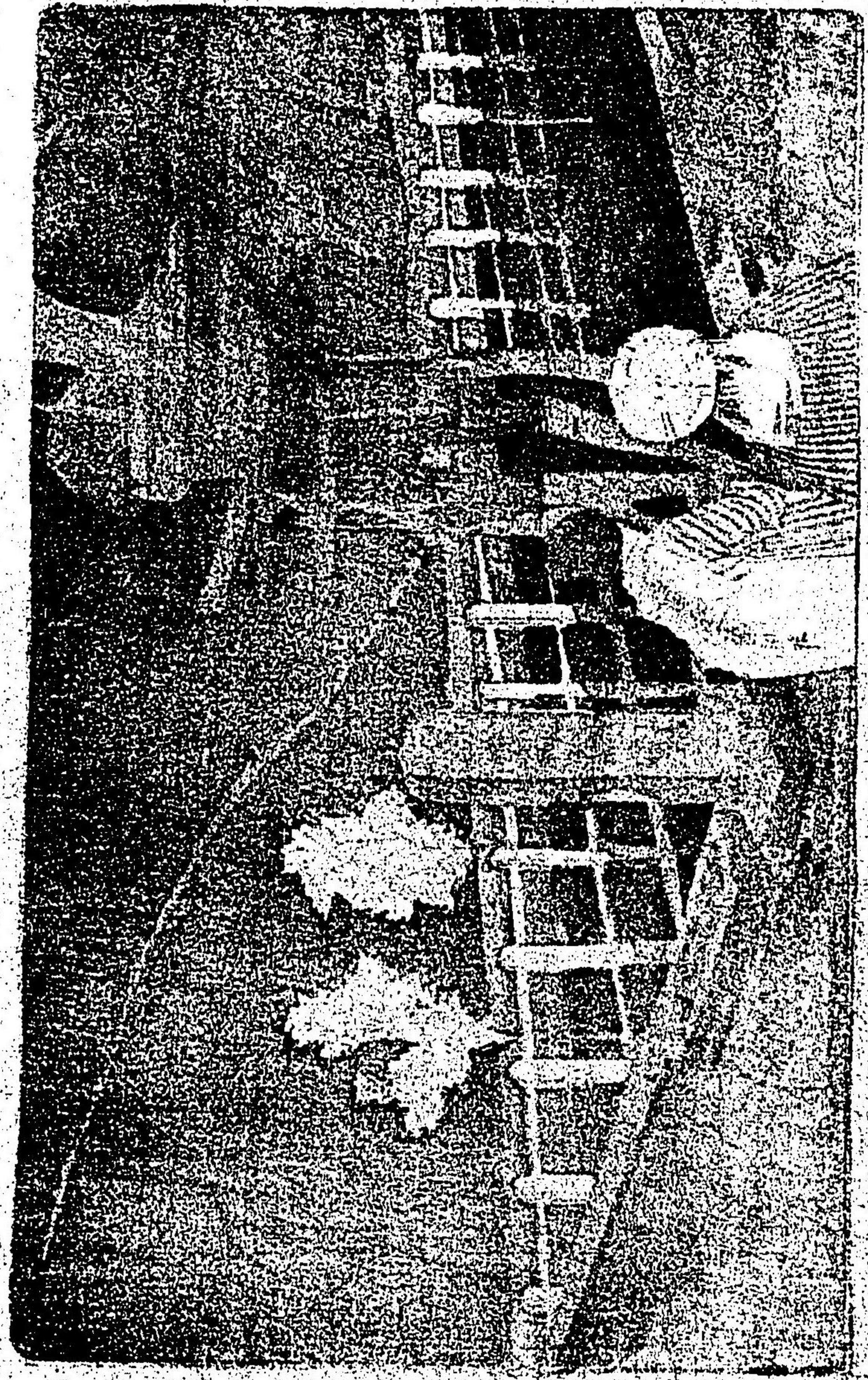


日本建築の歴史



同じ夢ながら白日の夢、同じ花ながら萎める花の寂しき匂ひと、悲しき美く
しさを想ひ見よ。果散なき夢には辛らき現の伴ふあり、移ろひ行く花の香の
盛の春の名残には、盡きぬ恨のなからすやは。我等が旅の思ひ出も過ぎにし
方を願れば、夢の如く僅かに残るまばろしの美しくしき繪巻物眺むる如く、世

岡野 榮
中澤 弘光
山本 森之助
小林 鍾吉
跡見 泰著



を隔てし物語に耳傾くる思ひして、袖に止めし旅日記、とまり／＼の夢を尋ねて忘れ勝なる花の姿を、繪筆に寫す戯れも、果敢なき旅の心ならずや。未だ宵ながら月明りなき川添ひの、ほのめく水に光を落すかゝり舟の燈火は、黄に紅に藍より暗き波に亂れて、六月中旬の夜は將に八時に垂んとせり。青と紅との洋燈かゝげし銚子通ひの汽船通運丸は、既に出帆の用意を調べて、手丸提灯を振りし若き男の、左右に走りつゝ合圖する傍には、貨物を運ぶ人足の聲ふり立て、騒がしきあり、折しもの満潮に音なく動く賣ろ／＼舟の赤き提灯は、舟と舟との間を抜けて、菓子は好しかな夏密柑は好しかなといふ聲、生温かき風を傳ひつゝ中洲の方に隠れ行く。後れて駈せつきし我等一行は、急がはしく浮棧橋を渡りて、舷に移らんとすれば、船は既に岸を離れて二三間の彼方に有り、パイプより吐く白き煙盛に登りて、物寂しく水を渡る汽笛の長吼は、陰々として響き渡りぬ。僅かに引き返せし汽船に乗り移れば、船は白きペンキ塗りの戸を開きて、我等を船室に導かんとす。むつとする機關

室の火氣面を壓して呼吸も止まらん許りに、油臭き香胸悪く迫り來るを駈け抜けて、船長室を過ぐれば、天井より釣せし洋燈の下に七八人の乗客あり、此の時船は全く岸を離れて、靜かに動搖する船体は長蛇の如く夜の水を渡り、外車の水截る音は次第／＼に烈しくなりぬ。僅かに部屋の一隅に一團となつて、窓より外を眺むれば、暮れ残りたる西の空に、水より清き太白星の光り鮮やかに輝やきて、夜色沈々たる川岸は橋を渡る馬車の轟き、幾輛と無く連る俥の提灯の、走馬燈の如く動き行く彼方より聞こゆる、雜然たる大都の響は、陸を離るゝに従つて漸う幽かになり行きぬ。潮満ちたる船路安く大川に出づれば、南より吹く風窓に入りて、河霧こめし岸の燈火いと微かに、夾やかなる初夏の夜の夢の如くに眺むれば、船はいつしか狭き小名木川に入りて、暗黒より暗黒へと進み行きぬ。室内は明き燈に照らされて、晝の如き光線の眞上より落し來る面白き効果を眺むるとも無く打見やれば、我等に接して大なる壁の鏡の前に坐せしは、小學校の教員

らしき三十前後の男、其に近く白き大なる包みに寄りかゝる六十餘りの商人の佐原迄行くとして隣れる人に語り居たり、窓近くには農家の老夫婦、其の傍に酌婦めきたる二十歳前後の獨旅らしきが、窓より外を眺め居たるに、其と並びて三十四五の丸髻のつゝましやかに坐れる外は、我等一行の書籠を持ちし五人のみ。

高橋を過ぎ小名木川を経て長き堤防に添ふて進み行けば、細き川は次第に開けて、芦吹く風の間を小利根川の流れに出づ。水に遡れば船の歩みも遅く、遠く展開されたる兩岸の寂しきばらばら松の平たき堤は、果なき空に連なれり。更け行く夜半の水掻く音のみ耳につきて何所とも定め難き夢をの



せて市川を過ぎ、松戸上りと船僮の叫びし時は並み居る人々多くは横になりて、うつらうつらと睡ることも無き假枕に、子の刻許りの銀河光牙やかに空に満ちて、南より北に貫く銀砂子の晝よりも更に美はしきを眺むれば、夜氣に閉されし兩岸の朧々の木の形森の形の、薄墨の如くほの見えて、川面に飛ぶ煤烟は火の粉の雨を散らし行けり。

流山加村を経て深井の堀割にかゝりし時は、睡りに落ちし室内の空氣は暖かなれど、窓より吹き入る風冷やかに、曉近き大空の、遮るもの無き星の色のみ白く冴えまさりつ。斯くて二時餘り夢現の境を過ぎて、ほのく明るき川面の水の光りに見渡せば、早やくも運河の口に近く、左右に高き草の堤は露ながら明なんとして、僅かに暗き緑を敷きぬ。睡れる一行を呼び覺して此所の發着所に止まるを待てば、高き土手の上より、赤き筋入りし手丸點けたる男の、棧橋近く降り來て荷物を請取るが如くなりき。

船より岸に登りたれど未だ暗ければ、燈火無き夜道に困じ果て、立ち盡すに、

我等を殘せし通運丸は、聽て外車の音高く水を掻きて、細き疏水を北に大利根川の方へと動き行けり。露多き土手を登れば、見渡す限り濛々たる夜霧に包まれて、茫乎たる天と地との境も無きに、提灯持ちし男に道を尋ねれば此の夜道に渡す舟も無し、見苦しけれど我等が家にて休憩はすやといふ情の嬉しくて、大方は茶店の主なる可しと思ひて彼に従ひぬ。

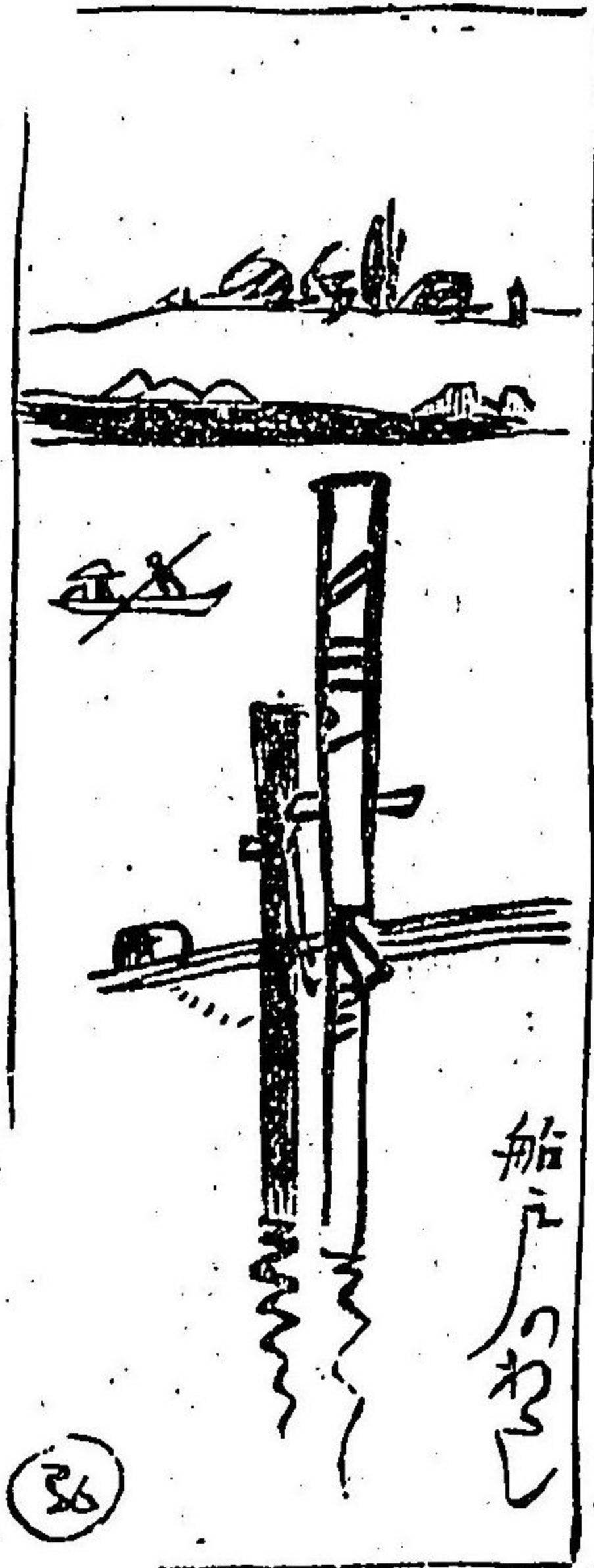
土手を北に三四間行きて左りに草深き道を踏み分けつゝ、桐の並木を過ぐれば立派なる敷臺付きの玄關ありて、主は此所に我等を導きぬ。中よりは聽て洋燈を運び來りて、奥坐敷へと案内するに、靴脱き捨て、進めば部屋は十貳疊許り、襖も床も由緒ありげに思はるゝに何と無く床しくて、暫時は遠慮勝にひかえられたれど一人二人早くも横になればいつしか悉く倒れて覺し時は東雲近き頃なりき。

思はぬ人に救はれてまた寐の夢も結びあへず顔洗はんと戸外に出づれば、横雲はなるゝ東の空はほのかに明るく、家を遠れる桐畠に朝風涼しく吹き越し

て、河原に續く草原には露置きあまる月見草の花美はしく黄に咲きて、朝霧深き平原の十里の外は只濛々とうち霞み所々に立つ暗き森の頂黒く、裾は烟りて見へわかず。隣れる家の格はら樺つるべの上には曉の明星ほの白うかゝりて、稍色づきし大空は紅の色を増し來る。河に下り立ちて、漱くちそげば後れて起き出でし岡野子は早くも船の寫生を初めつ。朝の中に早く守谷の舊趾尋ねばやと出發の用意も調ふたれば、主人に夜來の禮を述べて惜しき別れを告ぐるに、家内の者も既に起き出で、茶を薦めつゝ渡場道を教へ呉るゝに、偶然見れば奥の襖開きて出で來りし二十歳許りの娘、寐亂れ髪搔き上げし手に、菓子あまの盆捧げて主人の蔭に蹲りし美しくさよ。戶外よりの冷たき光り微かに流れ入りて色白き顔を照らせば、古びたる襖を背景に打ち沈みたる色調の幽艶なる趣深く、土地の舊家に人となりし青春の佳人と、阪東太郎の風景と、夏の朝と、旅より旅にさすらひ歩く一隊の畫家と、何とは無しに小説めきし因縁の想ひ起されて、別れ兼ねつゝ、立ち盡しぬ。

斯くて朝露茂き草を分けて堤防傳ひに立ち出づれば、明け放れ行く東の空漸
 う明るくなりまさりて、僅に残る星屑の數も少なに消え去れば、唧々たる虫
 の聲々おちこちに聞こえて、見渡す限り茫々たる草原は果なく遠く連なれり。
 我等は一步／＼に遠ざかり行く家を顧るに、桐島の下に立ちて一行を見送る
 若き娘は、猶此時迄も立ち盡せり。名も問はず名も語らず、僅かに遇ひしも
 束の間にて忽ち別かるゝ奇しき縁の哀なるよ。また遇ふ事のありやなしや
 斯くして永久に別れ去れば、残る形見も思出も無く、只路傍の人と忘れ行く
 人の世の果敢なさを思ひ浮べて、わびしき事限り無かりき。
 行き／＼河原に出づれば、朝霧晴れ行く大利根川の流域、一望の下に集ま
 りて、中流に立ち登る水氣長く靡きて烟の如く這ひ行く岸には、低き屋根所
 々に見えて、名も無き小山の蜿々として烟の如く淡く連れる有り。
 青き草は霜の如く白き露を帯びて、一路かすかに北を指す渡場路は、長くう
 ね／＼と續きたり。日は未だ出でぬ大空の爽やかなる風靜かに渡りて、露な

から咲く夏草の様々に咲き亂れたる上を吹けば、露の玉はらく／＼とこぼれて
 草鞋に散るも清かりき。渡船場はだら／＼下りになりたる砂山の上において、
 岸に繋ぎ捨てたる小舟二艘、遙かに霞む對岸の青き草原續きには、炊煙蒼く
 立ちのぼる泊
 り舟の、露に
 濡れたる白帆
 夢の如く霞み
 て、空を映せ
 る水の色は淡
 紫に透く流る



船のわし

東は朝の雲低く地平線の邊に棚引きぬ。

渡守の家を起して舟を頼めば、眠げなる顔して顯はれし五十餘りの漁師の、
 聽て河原に下り立ちて案内するに舫の網解く間を寫生せんと草に坐りぬ、川



の幅大凡四百間、鯉釣りには面白き所と語る船頭の言葉を聞きて、釣好の岡野子は早やくも様々の問を發して、宿屋の模様を尋ねつゝ、渡の名を聞けば船戸の渡と答ふ。

舟の仕度終りて我等の一行を乗せし小舟は、靜かに漫々たる大江の水に浮び出でぬ、岸を離るゝ儘に舷ふなべりを打つ波は白き糸を引ききて、小さくなり行く渡小屋の水に映れる影は揺らめきつ。川の中流に至れば風冷やかに吹きて、朝靄晴るゝ河面かはらの次第に覺め行く面白さに呆然として眺め入れば、折しも東の空低く雲の色少しく動きて、稍黄ばみし薔薇色の刻々に紅くなり行く地平線に近く、燦めき出づる火光は爛々として漲り渡りぬ。雲より雲に衝き入る幾道の光脈、飛龍に似たる長き横雲の燃ゆが如き閃耀、蒸すが如き遠近をちこちの森を遠める一面の朝靄紅く霞み、溶々たる大利根川の水空を映して、果なく遠く流れ行く。

漸く岸に着きて陸に上れば釣する人の五六人、亂れし杭の間に立ちて糸を垂



るれば、見る／＼中に二三尾の魚の引き上げらるゝ面白さに、暫時行手の事など忘れ果てつ。此所にて平親王將門の舊趾、守谷町の里程を尋ぬるに大凡一里に餘る可しと言ふ。川添の堤防を降れば、古りたる宿の柳の緑濃やかに、煤けし家の七八軒並べる道は平らかに畠の間をうねりて、だら／＼上りに遙かに松山に續きたり。畷路は青々したる水田に狭まりて、稍打ち開けたる邊に來れば、水田は全く沼となりて芦の戦たたかぎも夾やかに、日は有りながら薄く曇れる朝涼の、露に濕れる土を踏みつゝ歩みを運ぶ。

情あり。

行き／＼て松山を越ゆれば、道は右に曲り桑畑の間を過ぎ、更に雑木の林に入れば青葉の匂ひ高く薫りて、高低極り無き赤土道うね／＼長く續きたり。露踏む靴、草鞋の冷々と涼しく、草分くる手に野の花の二片三片つきたるも

床かしく、人も通はねば顔にかゝる蜘蛛の糸幾度か拂ひのけつ、青薄深き中
を行く。守谷の町に着きし時は八時半、荒壁作りの塗込めをめぐらす桐島、物
賣る店は何れも雑貨多く廣き通りの中を白き鶏の悠々として餌を漁る様、か
ゝる寂しき驛ならでは見難き趣なりき、町の中央に河口屋といふ哀れなる飲
食店有りて、奥まりたる部屋の静かなれば一行はごやく、此家に入り込みつ。
古く傾きたる柱は黒光りして、庭に面したる廻り縁の八疊の間に通れば、生
ふるが儘に亂れし萩の一叢を隔て、茶室めきたる離室はなれに行燈の火ほのかに
白みて、化粧薄き若き女の、寐亂れ髪を其の儘に此方の一行を眺むる様なり。
いづれは遠くより賣られて、土臭き片田舎に流れくし身の果と思はるゝに
哀深く、案内の女に朝响の仕度命じて城趾の様など尋ぬる中、いつしか障子
の蔭に消え去りぬ。朝响は魚なく野菜無く、僅かに牛肉の罐詰を開かして
味噌汁に落せしものなれど、朝疾くより歩きし身の殊の外飢えたれば、舌鼓
して喫し終り、應て此家を出て御料理と怪しく書きし店の前を幾つか過きて、

黒塀嚴めしき家の横を曲れば、細き道は草深く茶畑匂ふ間に通ふ。一町許り
にて小高き丘の上に苔蒸したる石碑あり之を蔽へる一株の老松、幾百年の雨
に風に鬱々たる緑蔭暗く、屈曲したる枝は地に垂れて颯々の響梢を渡り遙か
に麥の穂波を動かし行く。天慶の昔時關八州を併呑せんと王を稱して偽都を
築きし所、大手先の舊趾は即ち此の地にして僅かに残る空濠からぼの、水枯れ草茂
り訪ふ人も無き廢墟空しく虫の聲のみなり。猶行く儘に見渡せば雲を出づる
日影ゆたかに射して、茫漠たる麥生の緑遠く連なり、桑摘む少女の手拭白く、
何所を其れとも知り難きに、畑の邊に近づきて城趾の地理を尋ねれば、此所
は昔時の千疊敷、右手に小高き松の木は妙見曲輪の跡、二の廓くわは眞直に行き
て坂を下りし彼方と答ふ。

晴れたる空の蒼き色に夏の光り隈無く輝きて、白く浮かべる雲の色霞むが如
く、少女が指さす儘に麥生の間を進む事二町余り道は少しく坂になりて、谷
を隠せる雑木の林深く、草を分け枝をくゞりて、次第くゞりに降り行けば、黄

に色づきし木苺の實の所厭はず熟し居たるに、思はぬ得物といづれも走り寄りて、草に縋り崖を攀ち、雙の手に余れる許り摘み取りて、互に紅く大なるを誇りつゝ谷を傳ふて進み行く。

木の間漏れ来る日ざしは既に拾時を過ぎ日の照る所は風生温かく吹けど、松杉暗き片岨道に入りては、未だ置き残る白露草の上に有りて、心地好き事言ふ可からず、暫時して右は展開されたる水田、細き小川に沿ふて眞一文字に進む道に蛙の聲長閑に起りて、農家の馬の畦に草食む傍を過れば、田の草取れる村人の我等の様を不審げに見送る有り。斯くして二町許りは坦々たる道、乾きし土の軽く埃を上げて蘆の葉戦がす風青く、松高く茂れる小丘に達すれば古昔は沼なりしといひ傳ふる左手の方に小川幾つと無く縦横に流れ、藻荇舟の動き行く風情も面白く青き空飛ぶ白き鷺の消え去る方を眺めつゝ草を敷きて暫時憩ふ。古き鳥居、苔蒸せる松、祠をまどふ蔦蘿白き野薔薇の花、生ふるが儘に生ひ茂れる雑草、幾百年の星霜に、兵共が夢の跡さへ定かなら

ねど彼方の丘は相馬内裡、此方は桔梗の前の化粧の水と、歴史の跡を思ひ浮ぶれば、遙かに遠き京洛の榮華を夢想しつゝも、天慶の驕兒が阪東太郎の流域に近く、南に大沼の水を引き谷に倚り丘に臨み、將門山の古御所に妖怪變化の宮居を營みし名殘哀れ深く、雲霞の如き官軍の攻め寄する時惡戦苦闘せしは此の二の廓か千疊敷か、東夷の荒くれたる中に一本咲ける白桔梗の、小籠捲き上げし欄干に都を忍ぶ月前の一曲、花やあらぬ春やむかしの姿ながら、東雲近き草の露、落ちて行く身に猶斷ち難き縁の糸は綿々として盡きず、馬塊一片の黄土と化せし長恨歌の古昔に似たる美人の最後は、我等の旅情を誘ふもの多かりき。

元來し道に引き返して大手先なる將門城趾の石碑を後に大路に出で、取手行の馬車に乗らんとして立場茶屋に至る、待つ事三十分、一輛の馬車は喇叭吹き立て、奔り來りぬ、見れば既に乗客車上に満ちて、僅かに一人の空席を剩すに過ぎず、馬車は取手驛迄十八錢、道は三里に余ると言ふ、午前なれば三

時には行き着く可しと日盛りの凹凸道を打興じつゝ發足しぬ。宿を外るれば一面に青める畑遠く伸び、悠々として浮べる雲の、白く輝くを眺めながら、庚申塚の倒れたる邊を過ぎ、山吹咲ける小村を抜けて、急ぐとも無く辿り行く後方より、後れて立ちし乗合馬車の喇叭次第に近づきて、竹藪暗き小川のほとりにて、遂に我等を後になしぬ。

麥生に續く桑の畑、日に照らされて草いきれする草原、道を過りて長き影引く松並木を後に、一筋道の眼に止まるものも無く、汽船の中船戸の渡、利根の朝景色守谷の城趾と、互に物語りつゝ歩を移せば、いつと無く道は松林の間に入りて、梢吹く風物寂しきに、米の井の桔梗塚と道行く人に尋ねれば、此の島を右に曲りて半里の余なりといふ、只五輪の塔の夏草の中に倒れしのみなるも心細くて、再び元の路を進めば、行けどもく青き桑と青き水田幾度か右に折れ左に曲りて、小礫敷きたる所に出づ、照る日まばゆく笠無ければ汗もしとに流れて三里の道の遠きをかこつは我のみにあらず、時に路傍

の大樹の蔭に憩ひ、森の中をあさりて木苺の實に渴を慰する事數度、斯くて金刀比羅神社の前なる一茶店にて、取手迄の里程を問へば半里許りと答ふる嬉しさに、再び道を急ぎ取手驛に着きしは四時に近く、停車場を過ぎて左りに町に入れば、稍曇りたる空の風立ちて、堤防傳ひに通運丸發着所の小屋に達せし時は雨さへ少し加はりぬ。

汽船の出帆は夕の六時過ぎと、朝の七時頃なりといふに、今よりして汽船に乗れば佐原着は十二時にもなる可しといふもの有りて、今日は早くとも取手に泊る事に定めつ。川柳多き砂地を堤防に上れば、正面に見ゆる高き丘の石階數十級、弘法大師が巡錫の地と傳へられて、鬱蒼たる木立に包まれたる山門いと尊とく拜まれたり。斯くて某といふ割烹店に晝喰したゝめての後、周易九星身の上判断の、赤き文字書きたる看板の前を通りて石階を上れば、古りたる山門の下に赤毛布敷ける茶店有りて、夏密柑の黄なるを堆き迄並べたり。只見る遠く退き行く雨雲の、地平線に接する邊、眼下に長く連る取手

町の瓦葺粉壁を隔て、西より東に流る、溶々たる大利根川の水は、漠糊たる遠景の中に溶けて、雲と天と、水と森と、一づ霞に漂ひ行く自然の大観、灰かに浮かぶ白き帆の鳥の如く小さきも風情有りて、暫時鉛筆の寫生をなすつ。本堂に至れば、支那めきたる柱に百花の彫ありて、緑青は白緑に、朱は褪せ果て、雨露に朽ちたる金色の鏽の何とは無しに床しきに、小暗き御佛の壇を透りて、立ち迷ふ薫烟縷々糸の如く、讀經の聲微かに聞こえ來れば、人氣無き室内愈物寂しくて、卒として立出づる前をはたくと舞ひ下る白き鳩、夕日斜めに照り映へながら、またも降り來る五月雨の袖に繁きも心細し。石階を下りて左手に道を行く事三四町、山口屋旅店に着けば曇れる空の愈暗く、町を見下す樓上に案内されて、浴衣着替えし時は、軒の燈火黄に光りて、遙かに遠き利根川に通運丸の汽笛聞こゆる頃なりき。

二

軒の小雨寂しく打煙りて、寺々の鐘の聲朝の枕に音づるゝに、汽船の出帆の六時には僅か三十分を餘すのみなれば、いそがはしく宿を出づ。堤防に登れば、見渡す限り烟雨の中に霞み果てたる阪東太郎の流れ音も無く、草煙り、柳煙り、人かすがなる發着場に、濡れくして立つ馬の嘶き、いと悲しく聞きなざるゝに、川を横ざる虹の如き鐵橋中空に懸りて紅く霞みぬ。昔時は栗橋を立つ三百石の乗合に、月の夜すがら江戸に下る舟と、銚子に下る舟と、有りしと聞きしが、雁鳴き渡る東雲の蘆の葉戦々風に眼覺めで、苦撥ね上げつ眺むる大利根川のむかしは如何に、梵論字に隣れる鹿島の事觸れ、旅商人、潮來出島の眞菰の中に賣られて、水郷の夜を絃歌に更かす悲しき行末の若き娘、此等様々の人に乗せ、様々の運命を乗せて往來せし詩趣多き舟も、過ぎ

にし夢となりて、今は僅かに銚子通ひの汽船に其の面影を忍ぶのみ、我は偶然斯かる冥想に囚はれて、少し後れて堤防を降れば、發着場の小屋には、既に二三乗客の待てる有りて、汽船の姿を今かくと待ち暮らしぬ。空低く飛ぶ灰色の雲は北より南に動き行きて、蘆の青葉に吹く風しめやかに、家の周囲を呱呱として鳴く鶏の、雨に濡れたる姿も哀れ深く、暇なるまゝに鉛筆スケッチなどして、いつしか七時も過ぎつ臙て曇れる空に獸の吼ゆるが如き汽笛の響遠く霞みて、運河を出でたる白き汽船の姿は薄く煤烟を上げつゝ進み來る。

斯くて通運丸船室内の客となりし時は、硝子窓を打つ雨繁くなりて、四面濛々たる中を船は静かに下り行く、スクリーンの音は絶えず耳を聳する許りなれど、馴れては人々の話も聞き好くなりて、洋服着たる老人の利根川の浚渫工事の經營など、聞くとも無しに耳傾けぬ。

雨を衝きて進む船は右に小さき森を後にして、砂土赤く松蒼き絶壁の下を過

ぐ、雨の中ながら鯉漁る舟の苦蔽ひて、流れの儘に釣垂るゝを眺めつゝも、次第く下り行けば、長き一帯の崖は漸々絶えて、更に川柳多き邊に出づ。縁は薄く烟りて見え隠れする草の屋の、二つ三つ並べる彼方には島の如く浮かべる黒き森所々に立ちて、赤き華表の水に影映すも畫の如き風情なりき。木下六間は乗降の客も多く、次第に晴れ行く大空に青き空時々見えて、川下より水を蹴立て、登り來る高瀬舟の風を孕みし白き帆大いなるが窓近く過ぐるを見れば、山の如く積みし薪の上に二つ並べる番傘黄に、其の上に戯るゝ子供の着物紅く眼に残りぬ。名残の波はゆるく糸を引きて遠く離なるゝ帆の影、楫の響、神崎明神の森に近く岸に迫り來る小山の連互は、遙かに松廬なる佐原香取の岡に伸び行けり。

佐原に近づくに従つて、川幅次第に廣く、前と後と高く尖りたる小舟にて、荷を運ぶ女の櫓柄握りて操る姿珍らしく、水國のならひと面白く思はるゝに、ヴェニス風景畫に描かるゝコンドラの形も思ひうかびて、紀念のスケッチ

なしつ。佐原に着きしは午前九時頃、之れより香取の宮に詣でんと、細き小川の柳蔭深き下をたどりつと、雨降らねば自ら氣輕く道もはかどりて、左の小路を曲れば、建ち連ねたる家々の屋根に、一八の葉青く伸びしも田舎めきて風情多く、三四町行きて又左折すれば、客待ちの馬車一輛喇叭吹き立て、居たるが頻りに香取の往復を薦むるに、價を問へば一人六十錢なりといふ。雨は晴れたれど、三里の道を徒らに日に照らされて、見るものも無く苦しまんも本意なければ、馬車屋の言ふ儘に往復の約をなしつ。斯くて右香取道三里何町と赤く記せる石碑を後に、馬車は蹄の音高く空色の布簾を風に翻しつと、坦々たる道を駛る。朽ちたる垣根荒れたる原、白き倉、荒壁の家見る／＼中に後にして、町を東に駛せ抜けつと、漸々行く事七八町、何にか驚きけん馬は高く嘶えて、後退るを、手綱捉りたる若き馭者の、叱々と言ひて鞭策の音高く馬を責むれば、馬は狂ひて走らんとし、車は危く斜めに、疾驅して乗り込み來りしは佐原病院の前、馬は門内に突き入りて車の轅は僅かに右の門

柱に遮られつ。院内の看護婦等は窓より白き服露はして、我等の一行を不審げに見下すなりき。斯くて再び車体を調べ、此所を出發したるは二十分許りの後にして、之よりは砥の如き大道を軽く動搖しつと、麥青き畑、大根洗ふ小川、赤き華表、鎮守の森の楠、水田に並ぶ稻叢を残しつと、雲遠き空の照る日暖かに、項吹く風心地好く、幾度かうねり／＼て一里余りも過ぎぬ。五月雨上りの苗代の水漫々として青く、遠くの森も近くの木々も、一つ緑に更けまされば、夏の匂ひの何所とも無く誘ひ來て、車上より見る道の邊の水のせゝらぎ、水車の音、蟬鳴く枝を覗ふ里の子の無邪氣なる姿も面白く、幾つかの寒村を過ぎて香取の宮に着す。杉の老樹立てる蔭に車を下りて、馬には、小川の水に嗽かしめ草を與へ、應て馭者を案内に徒歩して石の玉垣遶らせる急阪を登る。

社前の茶店わびしく並べる前を通りて、七五三繩張れる大華表をくれば、素木の二層門の風雨に洒らされたる古雅なる彫刻、何と無く尊とく、左右に

華やかなる彩色の随神などは無く、只大なる幣束の立てる有り。
 神寂びたる樹立に蔽はれて、日の光幽かに落ち来る境内は、鳩の羽音時々聞
 こゆる外は風の音も無く、苔蒸せる敷石静かに歩み行けは、千木高く聳ゆる
 神殿の、紫御紋章の幔幕有るか無きかの風に揺らめきて神武天皇の十八年、
 創めて齊き奉りしより、今も昔も暗き中に永久に輝く神鏡の光り、神々しく
 も拜まるゝに、僅かに旅路の幸を祈りて右手に廻れば、弓掛杉、二本杉、斥候
 杉、木母杉の老杉暗き並木の蔭に、星塚、塵塚、笠塚の舊蹟、朱の玉垣物さ
 びたる末社数多並びて、遙かに北を望めば、櫻の馬場に通ずる道長く續きぬ。
 櫻の馬場は今青葉繁りて寂しけれど、大利根川を眼下に伏瞰する丘に位して、
 花咲く春や如何ならん、老樹苔深く雨に霧に、荒れ果つる儘に荒れ果てたる
 草原廣く、暗き杉を背景に、前は鬱々たる樹々に包まれし絶壁深く、遙かに。
 パノラマの如く展開されたる青田の末は、地平線に近き森淡く霞みて、中を
 流るゝ利根の本流白銀の如く輝けり。此所に鯉料理する茶亭有りしが、汽船

の出帆も心に懸ければ七橋、十二井、八阪の勝も尋ね兼て、急がはしく歸途
 につき再び車上の客となりつ。

馬車は鞭の音高く鳴らして、疾驅する事一時間、佐原發着場の棧橋に達せし
 時は、僅かに三十分を除すのみ、汽船はいづれ遅るゝならんといふ茶屋の女
 中の言葉に、さらば其の間に晝食を認めんと、川に臨める宿に入りて少時憩
 ふに、今に〜といふ晝晌の膳は待てども來らず、川面遠く見渡せば、青き
 霞の如く水に浮かべる加藤洲の芦原に接して、寂しき汽笛の響鈍く聞こえ、
 水に遡る汽船の形、近づく儘に次第に大きくなりまさるに、間に合はずば出
 立せんといづれも身繕ひして、椽を下れば僅かに膳を運び來りぬ。熱き飯熱
 き汁に困じ果てつゝ見れば、汽船の棧橋に着きて、降る客は下り乗る者は乗
 り、既に纜を解かんとするにぞ、宿の女は周章しく走り出で、パツスの御
 客様と聲高く呼ぶ。早く〜と言ふ船長の催促に、僅かに箸を捨て、船室に
 入れば、懸て汽船は横に動揺しつゝ、本流を斜めに渡りて、横利根の支流に

入らんとす。空定め無き五月雨晴れの、西に眩く日は照りながら、東の空暗く曇り、地平線をかすめて飛び低き雨雲の、灰色にちぎれくぐりて、加藤洲一帯の青霞を蔽へば、白く烟りて濛々たる雨の脚、次第くくに擴がりて、溶々たる大江の水灰色に曇りぬ。

偶然眺むれば、遙かに遠き牛堀より潮來あたりに懸けて、暗雲漠々たる中空に、夢の如く浮かぶ七



弘根

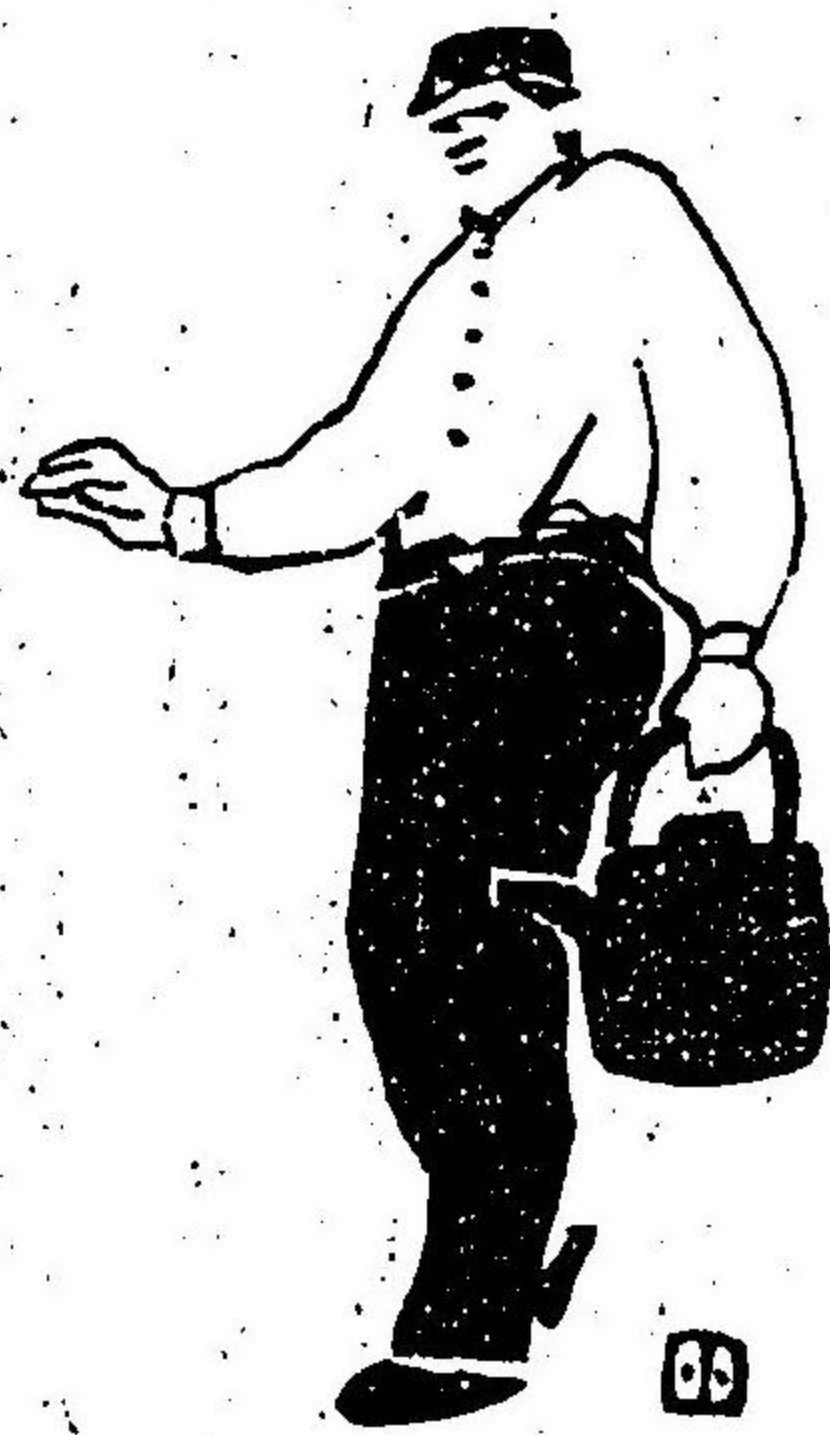
色の虹、青葉高きブリーエーの梢より半圓を描き、天の羽衣風に靡くと見ゆる浮橋鮮やかに、更に其れより低く、雲途絶えたる青空の下に、群る灰色の雲を横切りて、上よりは小さき虹の花環の如く美しくしき有り。實に測り難き自然の奇しき力よ、嘗て眺めし虹は一重なれど、今此所に仰ぐ二重の彩虹は、阪東太郎と廣漠たる平野との上に跨がりて、さらぬだに野趣多き水國の大観は更に一層の美はしさを加へたり。和蘭の風景畫に水郷の趣を盡したるもの多きも、未だ斯がる時の瞬間を捉え得しものあらざりしよと、我のみの寶の如き心地して窓より首伸せる友と共に呆然として眺め入れば、汽船はいつと無く支流に曲りて、濕りし風吹渡る青き洲に沿ひつゝ、進み行く。

斯くて稍高き堤防の緑を眺めつゝも、家鴨浮かぶ棧橋の邊、四つ手網下せる小屋、小さき田舟、赤き華表麥搗く音を後にして西洋銀杏の高く風に靡くを仰げば、今迄鮮やかなりし虹は、裾より次第に色褪せて、靡染なる七色は、夢路の花の散る如く、朦朧として消え失せぬ。之よりは只兩岸の青き中を、



外車の音のみ高く、秋ならば蘆花白く水冷えて、月に浮かべる里の子の楫の音静かに、蘆間を出で、蘆に隠る、舟は次第に遠ざかり、ほのかに聞こゆる潮來節の一曲、水の都ヴェニス埠頭の、コンドラの上に聞く樂の音よりも、更に一種の哀調を帯びし昔時榮えし夢の跡、水より水、舟より舟の戀物語を殘す哀れは、如何に旅情を惹くものあらんと、思ひやりつゝ見る、左手に高さ松一木、野の風川の風に吹かれながら、綠蓋濃やかなる邊を過ぐれば、白き襯衣着て汚れし洋袴穿きたるボレーの、重々しげに大いなる藥罐を携げて入り來りぬ、御茶はよろしといふに圓く集りたる一行は、再び運び來りし菓子幾つか買ふて、僅かに無聊を防がんす。

汽船は動く事約四十分、長き堤防を過ぎて左に霞が浦の穩波を望めば、日を



被りたる空黄に眩ゆく、遙かに浮かぶ金帆二三、水を抜いて立つ漁小屋には、漕ぎ付けたる小舟ありて、日に輝く四つ手網高く引き上る様畫の如く、行く手を見れば横利根の水の窮る所、水に臨める寂しき漁村有りて、雲頻りに飛ぶ蒼き空の下に、長く連なる赤土山のばらばら松。

牛堀くの聲に驚かされつゝ、過ぎし三年の秋の雨に、わびしく暮るゝ帆の影を、日もすがら眺めし事思ひ出して千歳屋樓上に今も緑の糸靡く門の柳を、跡見子と共に眺めつゝ、聽て又出帆の汽笛と共に、更に北利根川に向はんとする汽船に別れて、陸に上れば、晴れ曇る空定めなく、薄寒き風吹きて、砂白き潮來道の、右も左も豆の畑、麥の畠、ばらばら松の舊跡を道行く人に尋ぬれば、二町許り先の松が其ぞといふ。稻叢を過ぎ古りたる寺の門前に來るに、三丈の餘もあらんと思はるゝ松の古木六七本、幅狭き道に並び立てるあり。沖乗る舟の目あての森となりて、仙臺船の水夫楫取が遙かに水路を定めし名殘、今は僅かに標許りとなりて、訪ふ人もなき物寂しさ、此所より潮





來の町へ十餘町時に或は青田に沿ふて歩み、雲や霞と打ち烟る、信太の浮島を遙かに望みて漸く潮來町に入る。昔時般盛を極めし市街の、見る影も無く荒廢して、人住むかと思はる、茅舎幾くつか過ぎ、右に菖蒲橋の畔に至れば、曇れる空の又も雨催して、小川の氷に落つる雨次第に繁く、青き真菰に交りて、紫匂ふ菖蒲の花二面に咲きし風情の、錦繪めきて面白きに見入りつゝ、材木の蔭に暫時の雨宿り、今宵の宿は何處と議するに、角菱がよからんといふ路傍の人の言葉に、遂に引き返して、三層樓の旅館角菱に入る。

樓に上りて潮來全景を瞰れば、青き真菰の中を貫く小川横に縦に、花の朝、月の夕、出船入船に全盛を極めしといふ遊女の、昔時の夢の跡も無く、潮來出島の真菰の中に、菖蒲咲く自然の風光はありし儘ながら、紅樓の名残今僅かに二軒有りて、菖蒲踊の古雅なる手振を止めしのみ、朱堂、十六島、十二橋の名の、床しく聞きなざるも、小川に渡す板橋、青き蘆原、行き遇ふ人



も敗餘の軍の如く、寂びたる風俗の哀れなる様、何と無く眼に泌みて、心細き事言ふ可からず。僅かに學校返りの子供の、いづれも小さき舟を操りつゝ、家路に歸る姿青き蘆間を分けて幾艘と無く續きて、畫の如く美はしきに、少時鉛筆のスケッチをなしぬ。

夜に入りては軒の五月雨音も無く更けて、風呂より上り夕昫の膳に向ひし時は、午後六時に近く、菖蒲踊の話下婢に問へば、化物屋敷の如く荒れし茶屋にて、六十余の老妓の音頭取りて唄ふ潮來節、太鼓の音、障子の破れより月さし入ると、淺ましき語るを聞けば、何と無く興さめて見物もせず。二つ點せし洋燈の蔭に基盤引き寄せ日記し終りて戶外を見れば、小川漕ぎ行く舟の音、ぱつと明るく暗黒に光る燐寸の影に黒き人有りて、水中に立つ燈籠に燈火を點せんとする所なりき。暗き水、赤き火、水に映れる燈籠、半ば光を受けし男の形、水郷の夜ならでは眺め難き畫趣多き光景に、陶然として酔えるが如くなりき。

寂しき雨の徒然なる夜は更けて、寝ながらに聞く楫の音、五位鶯の聲、幽かに遠き風のおとなひ。

三

眠り覺めたる朝の戸に、降り續きし雨の音心細く、鹿島詣での旅衣、濡るゝも辛らしとかこちつゝ角菱を出づ。菖蒲橋を渡りて細き小川に沿ひ、眞菰の青葉吹く風に傘無き身の、帽傘を傳ふて落つる雫も氣味悪く、危く滑る泥濘を踏み締め、越え行けば、小川の窮る所は北利根の流れにして、風に吹かるゝ西洋銀杏高く聳え、岸に並ぶ小さき家二軒、汽船發着場の高き赤旗の下に有り。舟着きの棧橋に立ちて見れば、雨の中なる菖蒲の渡しは、只水量増せる波の音のみ聞こえて何の風情も無く、待つ事約三十分許り、北浦通ひの汽船は、靜かに牛堀の方より近づき來りぬ。

汽船に乗り移りて遙かに顧れば、町をめぐりて松蒼く連る稻荷山雨の中に烟り、進むに従つて次第に露はれ來る長き潮來の町つゞき、柳小村の朝烟り白く靡く彼方には、川に臨める小料理屋ありて、若き女の顔洗ひながら、甲板に立つ船員に言傳て頼む風俗の、昔時ならんには廣重の畫中に、一種の趣を添えしものをと微笑まれぬ。

斯くて一時餘り、狭き川を進みし通運丸は、次第に加はる風威に抗ひつゝ、雨や、霧や、茫々漠々たる浪逆浦を過らんとす、今迄疊の如く靜かなりし北利根を出でしのみなれど、前後に動搖する船体は、吹き寄する怒濤に煽られて、漸く横に傾かんとし、石の如く打つ雨の音、硝子窓破るばかりに叩きて、淋漓たる雫を流せり。空は低く、水は暗く、四顧濛々たる烟雨を衝いて、東に走る事二時間許り、斯くて僅かに大舟津の大華表を、霧の絶え間に望みし時は、舷洗ふ波穏やかになりて、潮來出島一帶の遠景、淡として夢の如し。舟よりして鹿島に詣づるものは、必らず此の棧橋に立つといふ大舟津に着き

て、晝飯頼み置かんと右側の茶屋に入り、床几に腰を下せば、髻長き主人出で來りて、此の降雨にては兎ても車ならでは往復なかひ難しといふ、さらば用意せよと命じ置きて、軒下に佇みつゝ、少時の寫生をなす。岸近き水中に立つ大華表は幾百年の星霜雨や霧の侵すにまかせ、波は日夜に柱を洗ひて、霧藻と苔に蔽はれし姿の何と無く面白く、遙かに烟る十六島、寄せては返す波の音、名所圖會に屢々描かれし景色ながら、又捨て難き趣有りて、名所らしき所よと喜びあひぬ。

晴れたる日の朝、華表の彼方遙かに、北浦に通ふ白帆並びし時はいかにと、語らふ中に車は來りぬ、雨止まず、風強く吹き荒みて、暴風雨にやならん宿の者のつぶやくを後にして、五輛の腕車は直ちに鹿島に向ふ。町は僅か二三町にて盡き、左右に青き水田の間を、横に吹きつくる風雨に惱まされつゝ、進み行けば、道は次第に小高くなりて、危く滑る坂を上り盡せし所に、一帯の松並木あり。

常陸風土記の所謂、童子女松原は即ち之れ、亭々たる松の緑は、雨濃やかに烟りて、颯々の響は神代の風かと疑はるゝに、道の邊の草悉く雨に濡れて、人氣なければ寂しき事いふばかり無し。神代の昔、神の男、神の少女あり、少女は海上安是の少女といひて、若き顔鮮やかに、花の露をそゞぎて香を止め、男を那賀寒田の郎子といひて、月の夜すがら歌ふ聲水の底にも響きぬ。幼き夢の戯れにはあらで、若き春、若き情、互に思ふ心の通ひて、結ぶ契の末永かれといのりしも束の間の、浮名は早く聞こえて、人目を耻ぢし二人は哀れにも二株の松と化しぬ、奈美松、古津松と言ひつぎ語り傳へし神代の戀物語の舊蹟は、此所よと、松の名残りを車夫に尋ねたれど知らずといふ。斯くして殿なせる我が車は、左折して一行の後を追ひ鹿島町に入れば、所々に高き森暗く茂りて、更に右すれば遙かに大華表を望む、車を華表の前に下して、靜かに敷石を歩めば、道は晝猶暗き森の中を通じて、素木の樓門に達す。苔蒸せる石燈籠雨に濡れて、並ぶもの數を知らず、左手の森の中に柵あ

りて、二頭の神鹿寂しげに立てるを眺めつゝ、樓門の下に立てば、古りたる廻廊左右に伸びて、神寂び立てる老杉暗く繁り、淡く濃く立ち迷ふ霧の迫り來て、數歩の間も朦朧として見へわかず、僅かに雨の過ぐるを待てば、何所とも無く吹き渡る風、梢に鳴りて物凄く、神代ながらの神境に立ちつくす身の、暫時呆然として我を忘れぬ。

雨少しく歇みて霧も次第に晴れ行けば、前なる杉の四抱にも餘る太き幹をめぐりて、這ひ上れる藤の蔓梢に達するを認めたり、花さく初夏の頃や如何に、暗き杉の緑を背景に、薄紫の藤の花長く垂れたる風情、奈良のそれにも似たる可しと、中澤氏と語りつゝ樓門を入れば、假殿の年古りたる宮を正面に望む、右手には紫の幔幕めぐらせる神殿、瑞籬の中に建ちて、神々しき様譬ふるにもものなく恭しく拜し終りて、假殿の背後より奥の宮に詣でんと廣き道に出づ。御笠山と稱ふる神宮の森は、此所より更に木深くなりて、蟲々として天を磨す老杉古檜果て無く續き、苔の下道雨に濡れて、危く滑る行潦を幾度か渡りて、二町餘りも行けば、七五三繩張れる老松枝を垂れ葉を重ねて、笹ゆるを何ぞと見れば、之は年々鶴の來りて巢籠る所なりといふ。

奥の宮は森の木立稍透きて、打展けたる笹原の邊にありて鹿島の大神の荒魂納めし跡とて些かの物音をも厭はせ給ふと傳えられし、年古りたる祠の太き門にて閉られたり。此所より右は要石、左すれば御手洗道とあるを左に曲れば、暗く蔽ひたる木々の枝は、風渡る毎に雨の雫を落して頂に冷たく、赤土



りて、二頭の神鹿寂しげに立てるを眺めつゝ、樓門の下に立てば、古りたる廻廊左右に伸びて、神寂び立てる老杉暗く繁り、淡く濃く立ち迷ふ霧の迫り來て、數歩の間も朦朧として見へわかず、僅かに雨の過ぐるを待てば、何所とも無く吹き渡る風、梢に鳴りて物凄く、神代ながらの神境に立ちつくす身の、暫時呆然として我を忘れぬ。

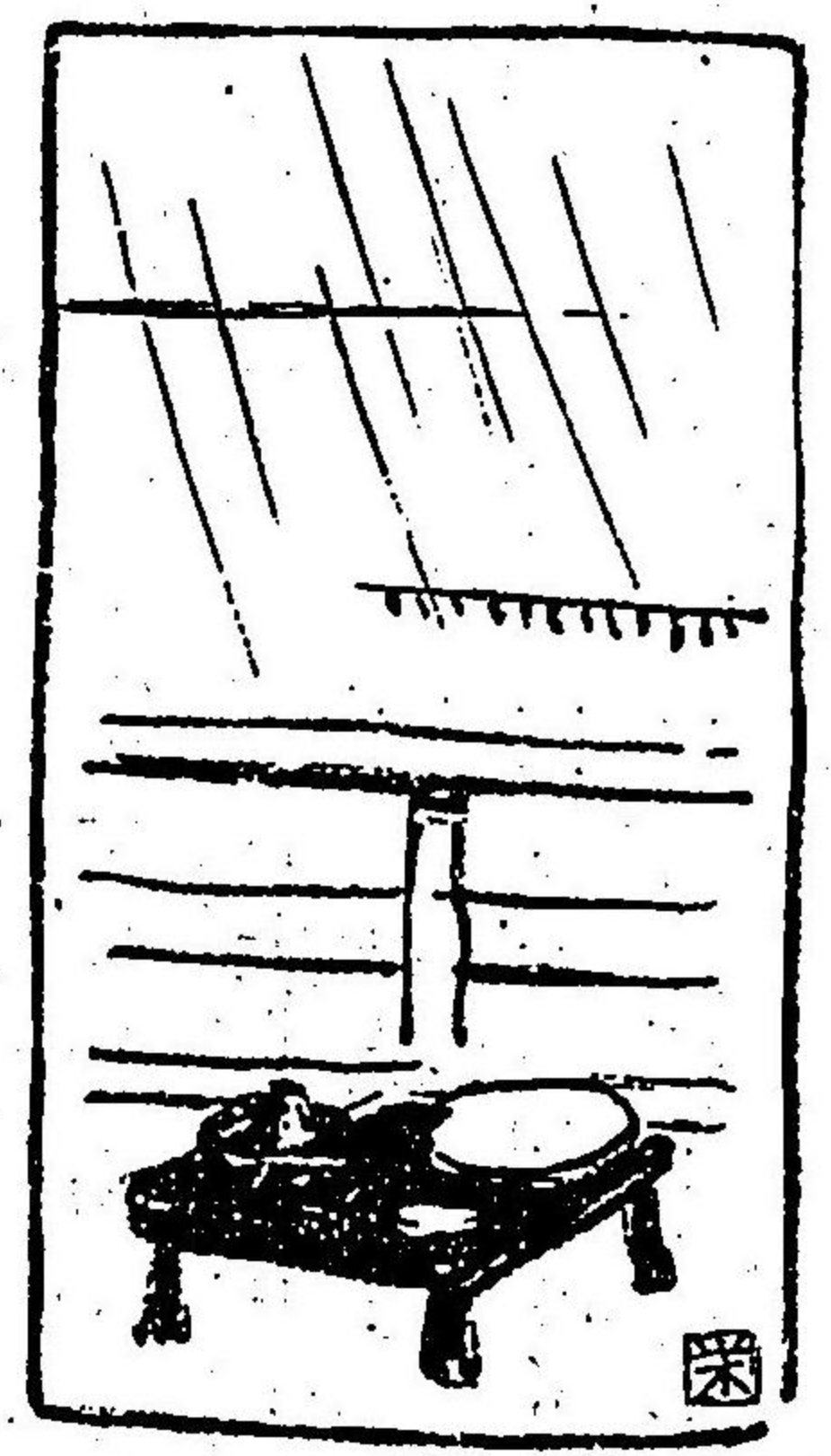
雨少しく歇みて霧も次第に晴れ行けば、前なる杉の四抱にも餘る太き幹をめぐりて、這ひ上れる藤の蔓梢に達するを認めたり、花さく初夏の頃や如何に、暗き杉の緑を背景に、薄紫の藤の花長く垂れたる風情、奈良のそれにも似たる可しと、中澤氏と語りつゝ樓門を入れば、假殿の年古りたる宮を正面に望む、右手には紫の幔幕めぐらせる神殿、瑞籬の中に建ちて、神々しき様譬ふるにもものなく恭しく拜し終りて、假殿の背後より奥の宮に詣でんと廣き道に出づ。御笠山と稱ふる神宮の森は、此所より更に木深くなりて、蟲々として天を磨す老杉古檜果て無く續き、苔の下道雨に濡れて、危く滑る行潦を幾度か渡りて、二町餘りも行けば、七五三繩張れる老松枝を垂れ葉を重ねて、笹ゆるを何ぞと見れば、之は年々鶴の來りて巢籠る所なりといふ。

奥の宮は森の木立稍透きて、打展けたる笹原の邊にありて鹿島の大神の荒魂納めし跡とて些かの物音をも厭はせ給ふと傳えられし、年古りたる祠の太き門にて閉られたり。此所より右は要石、左すれば御手洗道とあるを左に曲れば、暗く蔽ひたる木々の枝は、風渡る毎に雨の雫を落して頂に冷たく、赤土

多き、坂道は、一歩／＼に危く滑りて、倒れんとする事屢々なりき。
 坂を下りて、陰濕の氣肌に迫る谷の如き樹蔭を過ぐる事三四町、雨に濡れし
 小さき茶店の前に出づ人氣なき空家の椽臺のみ空しく並べるに腰を下せば、
 背後は雜草雜木に蔽はれし高き崖縁暗く、四面石にて圍める御手洗の池は、
 水の色藍の如く深く澄み、水中に立つ素木の華表、雨露に朽ちなんとして白
 き斑紋の苔に蔽はれつゝ崖より倒るゝ如く池に臨める老樹を支えて、満山の
 緑を涵せり。近く寄りて手に結べば、水冷やかなる事氷の如く、底の眞砂も
 鮮やかに覗かるゝ涼しさ、比するに物無し。これ昔時、武甕槌大神、天曲と
 いへる弓にて穿ち給ひし蹟と、言ひ傳ふるものにして、鹿島の宮創めし時よ
 り、湧く水今も昔に異ならず、此所に暫時記念のスケッチして要石に向ふ。
 奥の宮より森の中に入り、露茂き草踏み分けつゝ一町許りも行けば、高天原
 に續く木立風に擦れて、木の葉の匂ひ高く、幽禽微かに啼きて靜寂なる森の
 奥の、寂しさ更に加はりぬ、耳に残るは雨の音、木々の雫、晝啼く虫の聲細

々と、小萩の花のこぼるゝ邊を過ぐれば、稍廣き道の中央に、小さき華表あ
 りて、木柵の中には小さき石の、圓徑二尺もあらんと思はるゝが置かれし
 み、鹿島の神の地震ふる神を鎮めし蹟との傳説古く残りて、石の深さ幾丈な
 るを知らずと言ふも、餘りに石の小さきに驚かされつ。
 さらぬだに危き雨催ひの、此の時又も雲低く垂れて蕭々たる雨の音、荒涼窮
 り無き森の下道濡れに濡れて急ぎ行けば、霧に隠るゝ遠樹濛々として、晝か
 夜かの界もわから難く、僅かに樓門を出で、華表前の茶店に至る、此所に鹿
 島名勝の畫葉書など購ひて、再び車上の客となりぬ。斯くして一時間の後、
 大舟津の宿に着せし我等は、晝昫の膳調ふる間に、途中求めし名物鹿羊羹を
 出して食ふ。
 部屋は樓上薄暗き八疊の間、隣も下も夏爾買ひの旅商人、三四人宛集りて圍
 碁の音するに、一行は爲す事無ければ、空しくアゼチン瓦斯燈の、臭き匂
 ひに苦しみつゝ、三十分を過しぬ。徒然なる儘に下婢が持ち來りし茶盆に眼

を止めて、朱塗の高脚つきし盆に、菊の花の干菓子にては晝昫の菜も忍ばるゝと岡野子の獨語を聞きて、いづれも笑ひぬ。晝昫は鮎の煮びたし、玉子の汁、思ひしに違はぬも可笑しく、二三碗を喫して後汽船を待つ事二時間に餘りぬ。偶然聞けば階子の上り口なる三疊の間、障子破れし中に若き女の泣く聲するに、續いて男の慰むる様、何と無く芝居



て、物寂しき宿の更に厭はしき心地して汽船の見ゆるを今か〜と待ち暮しぬ。北浦を出でし汽船は懸て白き烟を吐きつゝ、我等の棧橋に近づきぬ、荷物を

めきしを、いづれは宿の女の、客に別れを惜しむよと思はれて哀れ深く、其の日〜に移ひ行く行末の忍ばれ

携げて船室に移れば、汽船は忽ち岸を離れて水を截る音凄まじく、薄暗き雨の中を衝いて南へと進む。都を出でし六月十六日より舟路の旅は、今霄銚子にて果てんとするも、何と無く心残りとなりて、風に靡く煤烟を遙かに見送れば、水を抜いて立つ大舟津の華表、既に小さくなりて、息栖の濱も雨に烟りて見えわかず。雲や波、波や雲渺茫たる湖はいつ果つ可しとも思はれぬに、良の風強く吹きて、左舷を越ゆる波の飛沫は、窓硝子を曇らしつ。舟に弱き中澤子の、些か心地悪げなりしがいつと無く津の宮近く、大利根の本流に入りてよりは、波穏やかに静まりて、岸に連る松山の、蜿蜒たる頂を掠めて、飛ぶ雲の早き事奔るが如し。

汽船の小見川に來りし頃雨少しく止みぬ。大舟津より同船せし十八歳許りの娘、鄙びたる風俗にもあらで美しくしが、小見川上りとおぼしく、獨り心細げに解の來るを待つ。發着場は遙か蘆原の中にありて、天氣豫報の赤玉高く懸り、掛聲勇ましく波に向つて漕ぎ付くる解は、簑笠の船頭二人、幾度か風

に煽られつゝ、次第く〜に近づきぬ。斯くて娘は舢に乗り移りて、我等の汽船と離るれば、木の葉の如く翻る小さき舟の、濁れる波に流されつゝ、一瞬く〜に遠ざかりて、見るく〜中に小さくなり行くも心寂しく、いつしか蘆に隔たりて、烟

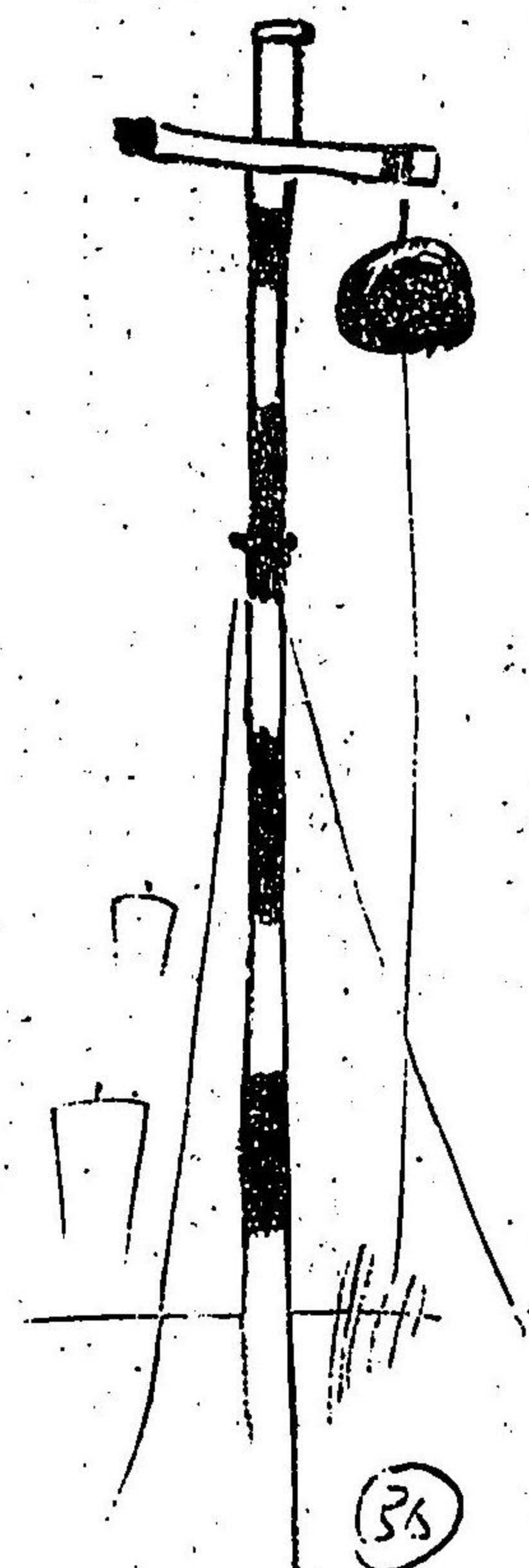
雨の中に消え

去れば、後は

亂るゝ空の

雲、甲板を洗

ふ雨の音。



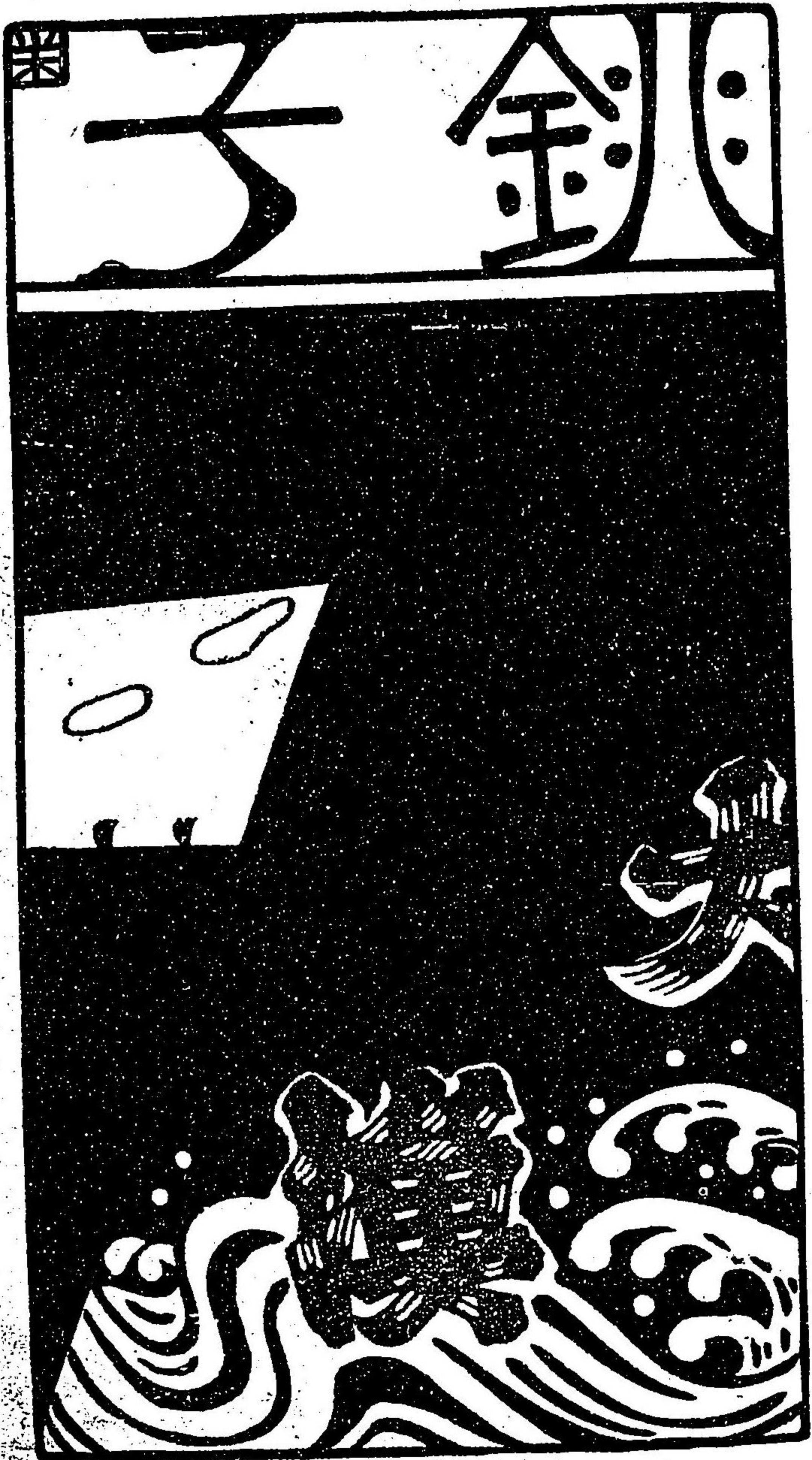
(38)

松岸は波高く、舢通はねば留まらず、左右上下に震動する船体は、恰ら鞠の如く、空暗く水暗き夕闇を、東へ東へと航しつゝ、川を下る事一時間許り船室は天井より釣せし洋燈を、八方より糸に繋ぎて、僅かに落ちんとするを支えたり。戸外は暗く見れども見えす、顔見合しつゝ、爲す事も無く、窓を背に

して銚子に着くを待てば、懸て響く汽笛の長吼、舟の動搖、船員の聲に驚きて、窓より見れば點々星の如き銚子の燈火、夜泊の舟の紅緑燈、雨はいつしか晴れて、亂雲頻りに飛ぶ大空に月さへ昇りて、烟波渺茫たる銚子川の水を照らせば、光りは恰ら白銀の如く流れて、遠く寄せ来る海の音、遠雷の響に似たり。汽船は猶も荒ぶる波に漂ひつゝ、次第く〜に埠頭に近づき来るに、乗客は早くも身繕ひして、我れ勝に立たんとしては踏躑よちきつ、斯くて碇泊せる親船の間を過ぎ、

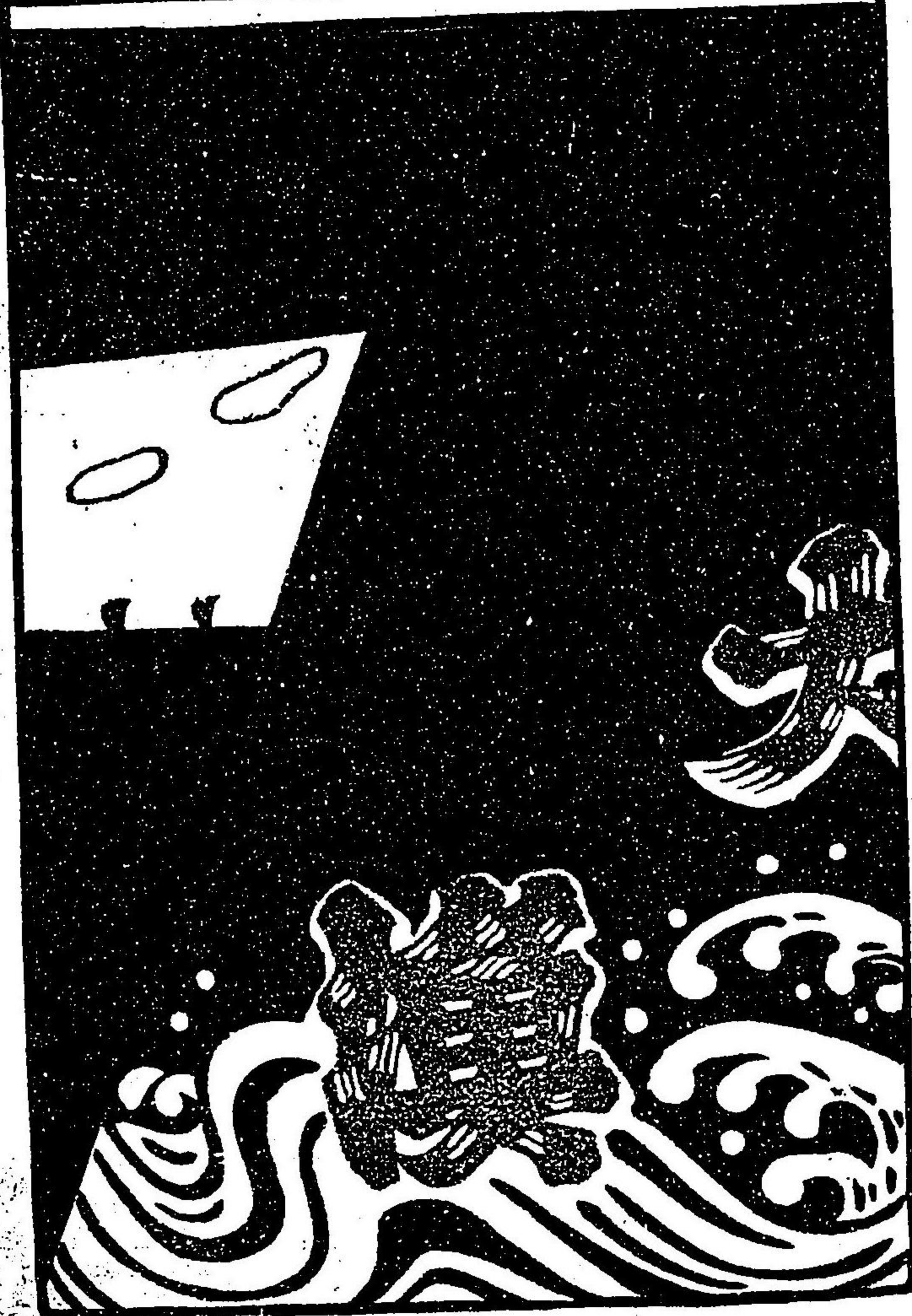


棧橋に着きし時は午後八時に近く、船室を出で、大空を仰げば、皓々たる月の光り隈なく渡りて、長江十里の水と陸と一つ霞に連なりて、高く聳ゆる帆前船の帆柱、波に揺らるゝ音寂しく、雨に濡れたる道を陸績として町へと急ぐ、旅客の一團又一團、折しも響く飯沼観音の鐘の聲、海風遠く吹き渡りて、白き貝殻屋根の漁村、早くも初夜の夢濃やかなりき。
斯くて大新樓上温かき風呂に浴し酒を呼びて、夢や現に聞く波の響、水郷の夜は月に更けて、三絃の音、歌妓の聲、濁みたる男の聲高く、酔ふて歌ふや
手拍子勇ましき大漁歌。



子金

子釧

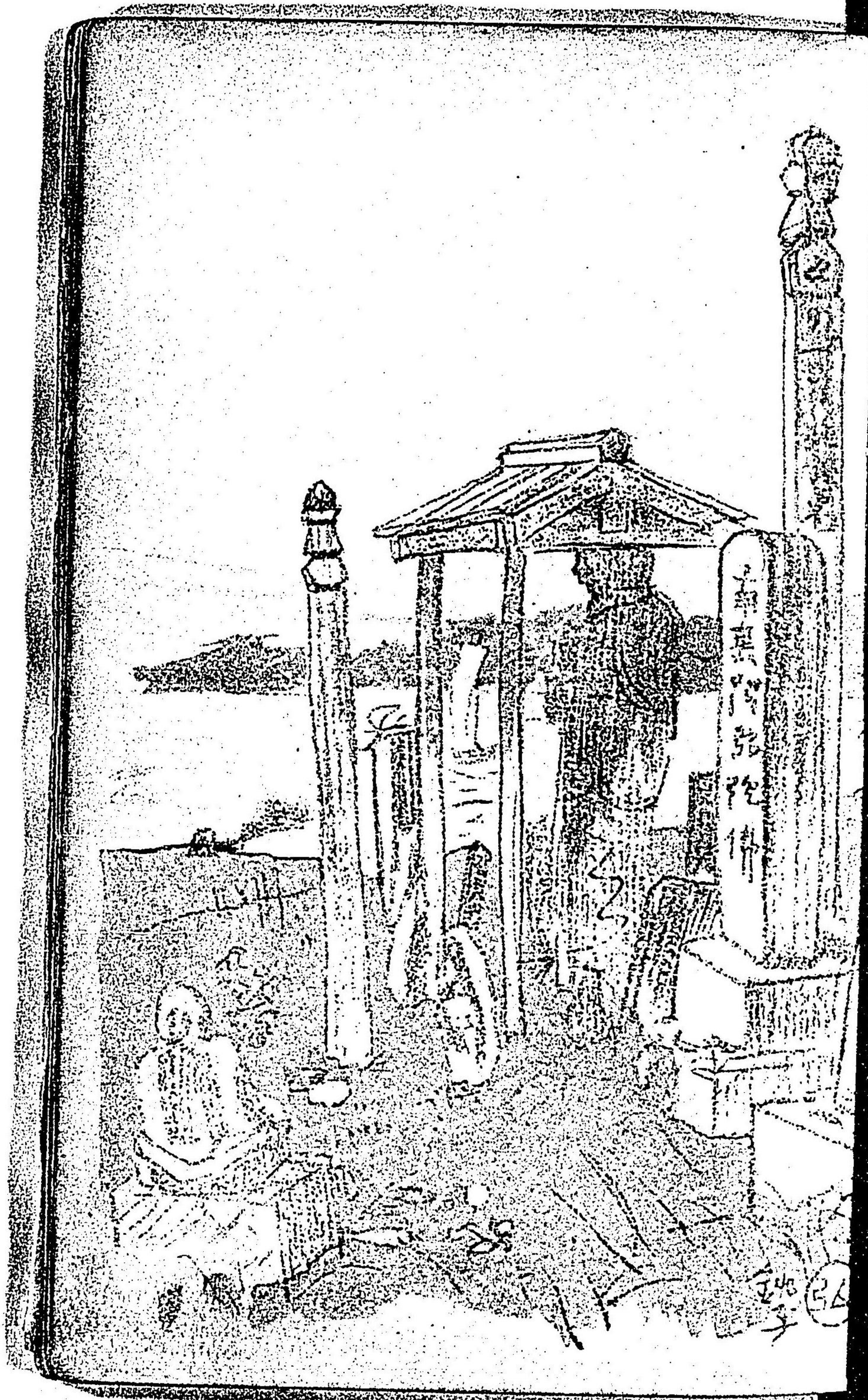


棧橋に着きし時は午後八時に近く、船室を出で、大空を仰げば、皓々たる月の光り隈なく渡りて、長江十里の水と陸と一つ霞に連なりて、高く聳ゆる帆前船の帆柱、波に揺らるゝ音寂しく、雨に濡れたる道を陸續として町へと急ぐ、旅客の一團又一團、折しも響く飯沼観音の鐘の聲、海風遠く吹き渡りて、白き貝殻屋根の漁村、早くも初夜の夢濃やかなりき。

斯くて大新楼上温かき風呂に浴し酒を呼びて、夢や現に聞く波の響、水郷の夜は月に更けて、三絃の音、歌妓の聲、濁みたる男の聲高く、酔ふて歌ふや手拍子勇ましき大漁歌。

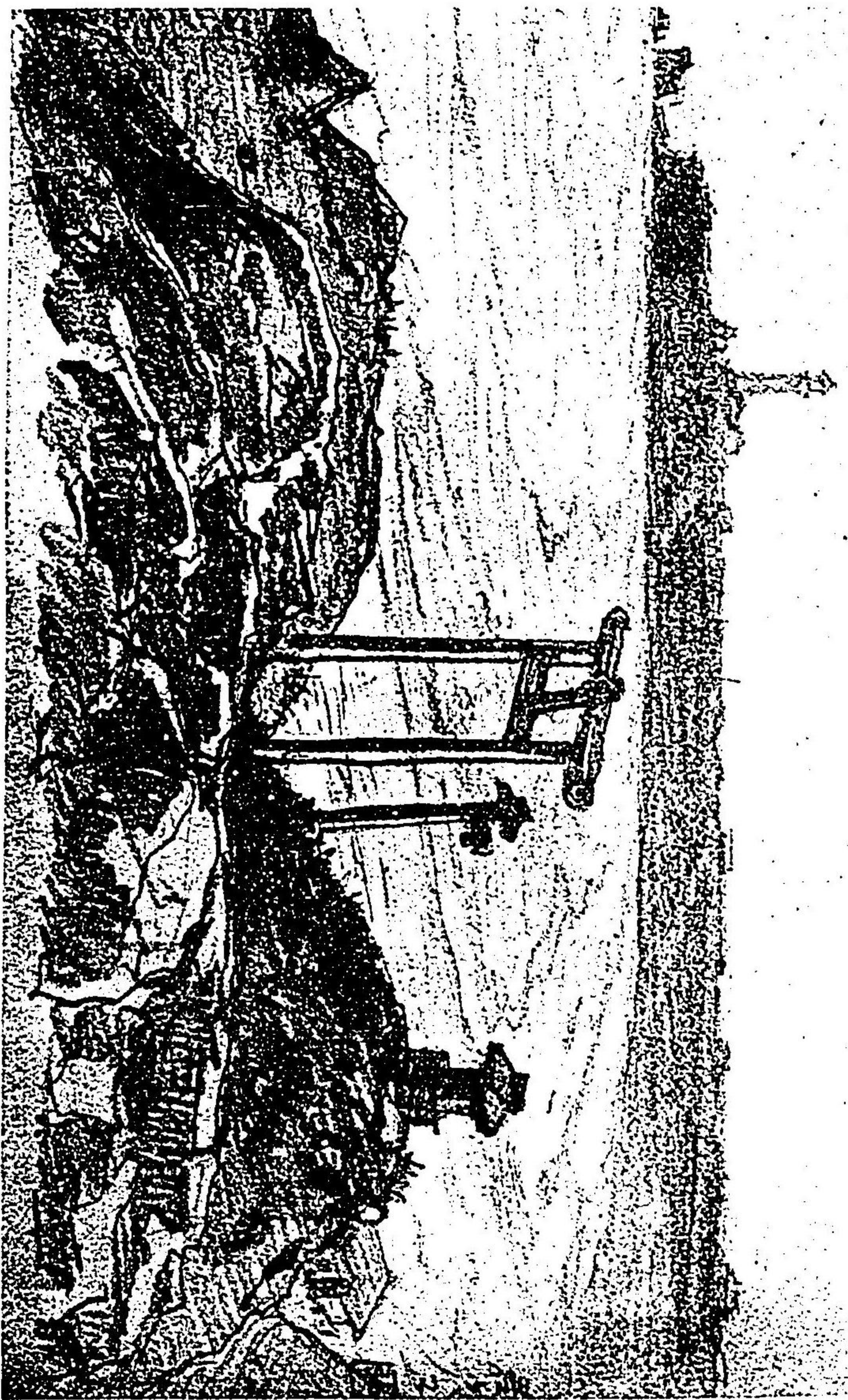






上
下
無
窮
之
道

240 (24)



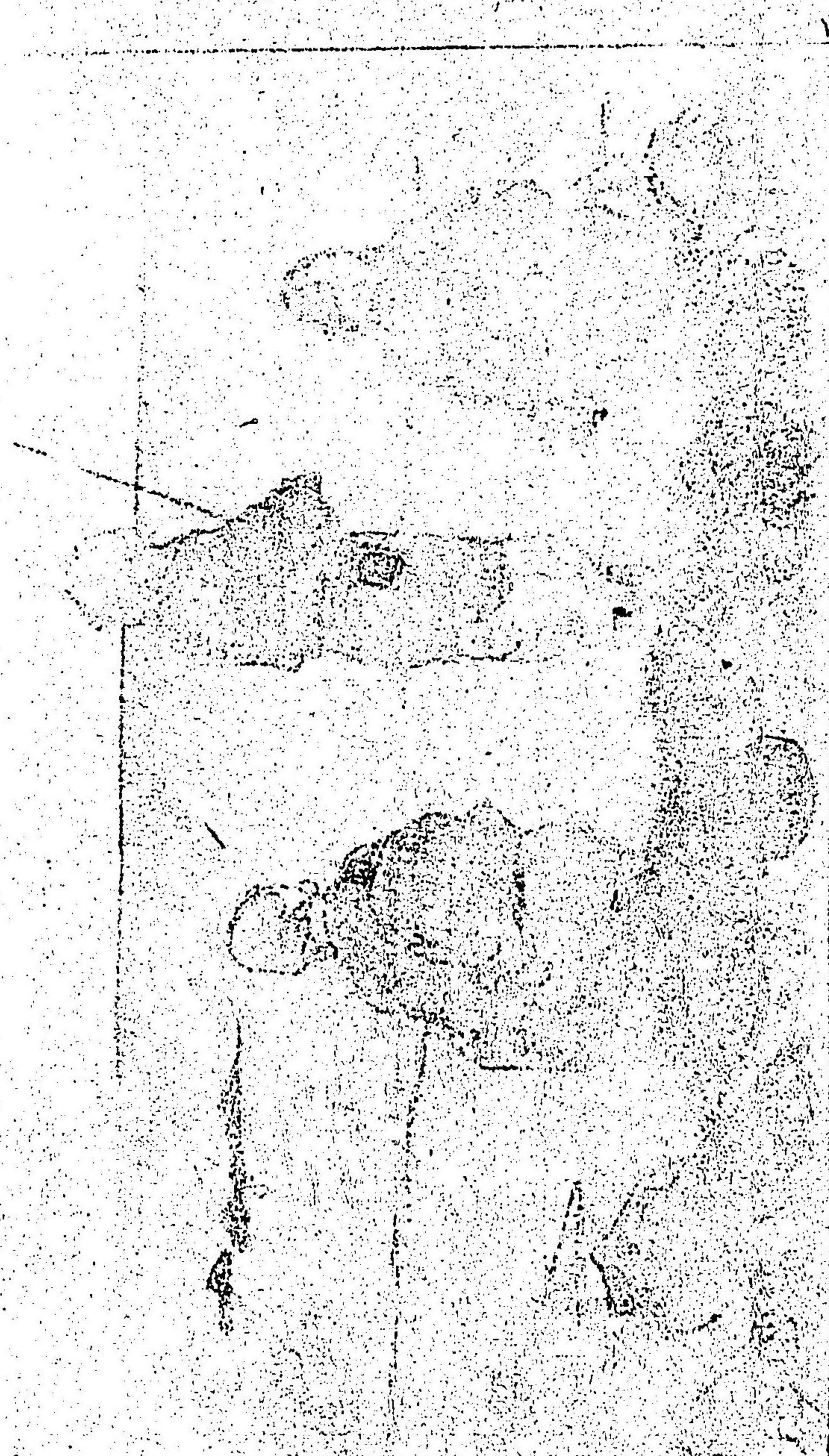
中 銚子弘光 濱





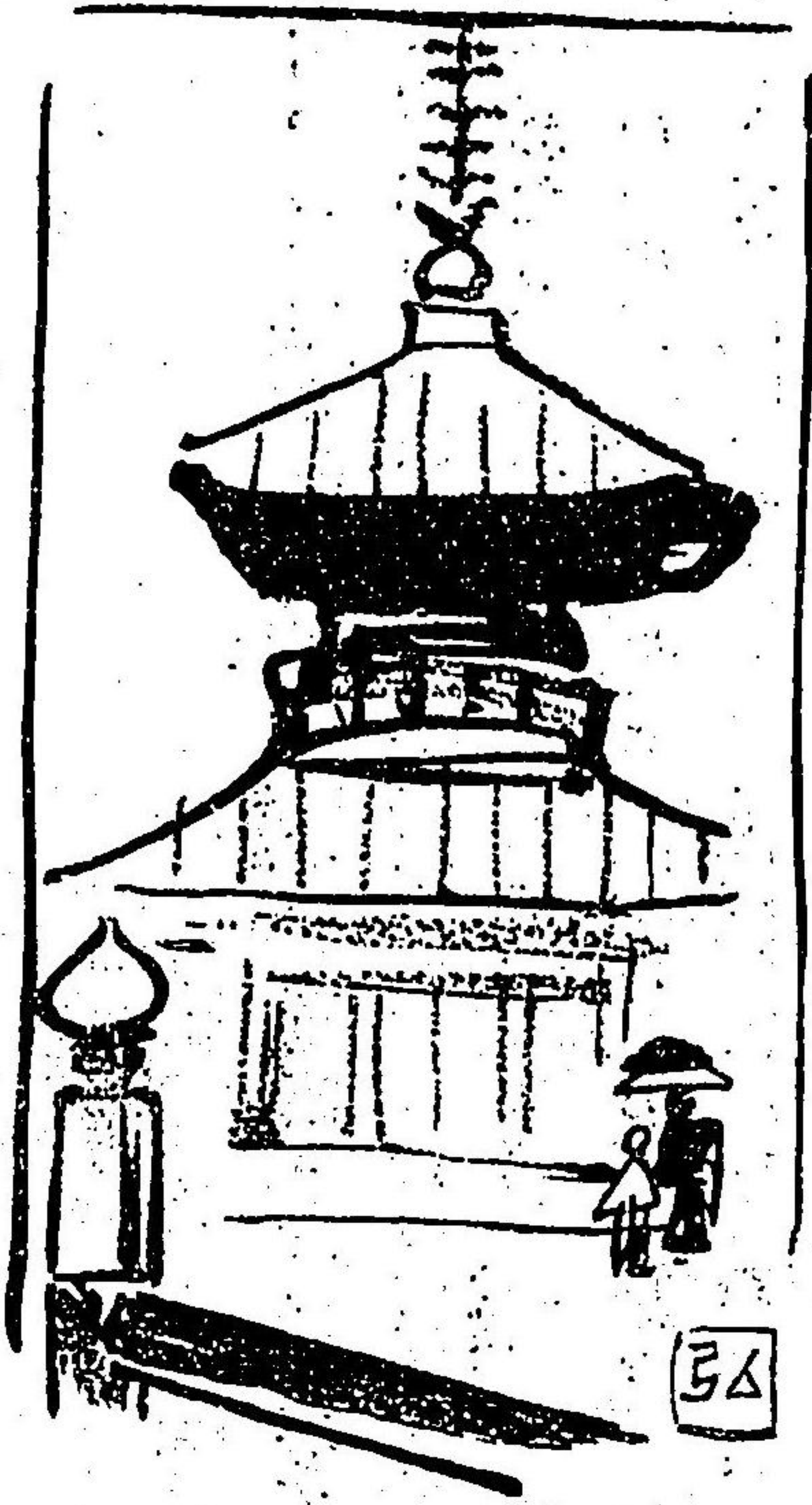
銚子

ほの／＼と水より白む曉の、夏露深き大利根川、よなうた欸乃の聲に眠り覺めて障子
開けば、白き帆、黄なる帆、夢の如く浮かびて、岸近く泊れる舟の朝烟り、
蒼く立ち昇る彼方には、晴れたる空の星屑微かに残りて、横雲低き南みなみに高
く聳ゆる観音堂、川口明神の松の緑、吹く風いと、夾やかなる朝なりき。
七時少し過ぎし頃、朝响終りて犬吠岬に向ふ。町に出づれば廣からぬ道に、
醤油倉多ければ異様の匂ひ高く、僅かに走り抜けて観音前より仁王門に入る
に、昨夜の風に吹き散らされし、銀杏の青葉一面に擴がりて、右手に高さ多
寶塔、正面の堂の階級を昇れば、飯沼観音と記せし金色の額有りて、其の上



に並ぶ白き鳩の、一度にはつと舞ひ下る様書の如く、人馴れたれば逃んともせず。堂内暗き内陣には、勤行の僧を照らす蠟燭黄に光りて、色様々の納手拭部に數多懸るも面白く、魚河岸の大提灯赤く、頭上に揺めく下を過ぎ廻廊に出づれば、貝殻屋根白き漁村を隔て、溶々として流る、利根川一望の中に集りぬ。動くとも無く下

り來る組筏の上に、藁^{ひら}蓆にて作れる小屋ありて、蒼き烟細く靡き、古き草双紙に某太郎など稱ふる盜賊の張本、筏の小屋より月を眺むる圖ありしを思ひ



出して、少時呆然として欄に倚る。

堂を後方に繞れば、小屋掛したる見世物數多ありて、勇美團一座の女翺舞、犬芝居の隣は活動寫眞、其等様々の小屋の賑やかなる人聲、樂隊、喇叭、笛、太鼓の響は、耳を聳する許り騒がしく、蟻の如く動く群集は、本堂の前の寂しきに似ず。我等は此の群集の中を縫ふて、女翺舞の繪看板の上に高き仕度部屋にて、舞臺に出んとする若き女の肥りたるが、諸肌惜しげ無く脱ぎて、乳も露はに化粧するを横に見ながら、稍廣き所に至れば、此所には左衛門語りが鏗たる聲を張り上げ大漁衣着たる漁師の群を前にひかえて、岩見武勇傳を講ずるあり。斯くて此の前世紀の如き風俗を、寫生し終りて濱邊に下れば、高く昇りたる日は此の時漸々、晴れかゝるの靄



中より輝き初めて、網干す砂地、漁師町、鯨獵にて臭き小路を吹き渡る潮風磯の香高く、次第く川口の方に近づくまゝに、赤味を帯びし白砂の丘は高く低く連りて、今を盛の月見草の花、果無く遠く咲き亂れつ、丘を下れば廣き砂原日に蒸されて、陽炎燃ゆる許りに、所々に擴がれる芝美はしく續きし上に、干したる網繕ふ老船頭、白き手拭に頭を包みて、日に焼けし肌半ば脱ぎし逞しさ、強き日光、焼くが如き砂、赤銅の如き船頭描かば如何に面白かる可きにと打語らひつゝ、右に高き川口明神の石の華表を見て、鯨屑日に干す邊を過ぐ。作業の多くは漁師の妻、若き娘にて、熊手の如きものに幾度と無く擴げし屑を打ち返すなり。此所より川口の夫婦岩まで十四五町、日夜東に流れく、海に入る大利根川を左に、右は渺茫たる太平洋、蹈めば踵を没する砂ざくざくと、漸々小さき丘の上に立てば、氣象臺の旗高く建つ傍に、石の地藏尊有りて、法界萬靈施餓鬼の大卒塔婆七八本、雨露に晒されしまゝ並びたり勝魚漁の舟は、日毎に何艘と無く遙けき沖に出で、近き

ものは六七里、遠くは伊豆の鼻迄も行くに、銚子河口の波荒く岩多ければ、年々に此所の藻屑となるもの百人に余ると傳へ聞きしが、今此の新しき卒塔婆に對し、漫々たる海波を望みて、寂しさと哀れなる事、雜然として胸に迫りぬ。

南に三四町砂原を進めば、夫婦岩は即ち眼前に有り。無線電信發信所の小丘、長く海水に突き出でたる所、芝青き絶壁に接して、巨象の如き黒き岩の中央にある洞門に、打ち寄する波濤の一陣又一陣、雪山忽ち崩れて飛び散る飛沫は烟の如く、霧の如く、日に輝く美はしさ。銚子名所に數へらるれど、離れて、見んには何の風情も無く、近く寄りて眺むれば、寄せては返す波の變化、岩窟の凄まじさ、波に揺らるゝ海草の青き紅き、畫にす可きもの尠なからず。斯くて砂原續き、月見草の花黄なるだらく上りの丘を登れば、熱き事眞夏の如く、額の汗拭きつゝ、一町行き二町行き、漸うにして川口明神の社頭に達す。天氣豫報の赤玉高く懸る下を過ぎて、松の樹蔭に至れば、明神の石華表

直ぐ前に有りて、銚子町全景を遙かに瞰下す一帯の高地、蒼き空遠く伸びて悠々として浮かぶ白き雲、ふわ／＼と大河の上に動き行くを、眺むるとも無く見入りつゝ、暫時休ちふ草の枕に、松原吹き越す潮風涼しく通ひて、眠りを誘ふ許りなりき。

過ぎし往昔、安倍晴明、東路の旅に疲れて此の所を過ぎし時、四日市場が長者が女延命姫、年若かりしかど無鹽の容貌類ひ無く、人目を耻る醜さに、花も月も憂ひの種となりて、空しき春を果敢なく過せしが、都の陰陽師晴明が下りしと聞きて呼び迎へつ、延命姫は薄き縁の程を尋ねんと、晴明を坐に請せしも、哀れや鄙に生ひ立ちし姫は、都めきたる晴明の姿に忽ち思ひを焦して、尋ぬる事も忘れ果てつ、其よりは日毎夜毎、悲しき戀に悶えつゝ、遂に胸の思を語りて郎が情を願ひし事數度、晴明今は詮方無く、さらば今宵の露に咲く、月見草の野に待ち合さんと契り置きつも、小濱の磯に履捨て、水に溺れしが如く装ひぬ。

夏の夜の青松白砂、月に照らされたる小濱の磯に、虫垂衣深く被りて露に濡れつゝ、虫の音繁き草野原を背景に、月見草の花黄に咲ける中に立ち盡せる姫の姿を思ひ見よ、遠く寄せ来る波の音は、颯々たる松の聲に和して、静かなる夜は愈々静かに、契りし人の影を尋ねて、蓬生の露にそぼぬれつゝ、百花一時に開くが如く、夢に夢見る戀の香に憧れし眼をあげて、今か／＼と待ち暮らせど、月は愈々照りまさり、音なふものは松吹く嵐、波の響、此所に我身の影を踏みつゝ、磯邊近く下りし姫は、晴明が捨てし履を見て、夢の中ばに覺めしが如く、愕然としておのゝきぬ、斯くて戀しき人の後を追ひ、逆巻く波に跳り入りし傳説残る、明神松原は今我等の憩ふ所、川口明神は姫が靈魂を祭りし趾と傳え聞きぬ。

日は熱けれど風少しく強く、松原越して瓜の畑に出づるに、見渡す限りは青々としたる畑より畑、鍬の刃の光りきら／＼しく、彼方此方に散れる農夫の姿小さく見ゆるを後にじて、芋畑の間を過ぎ、南を指して進み行けば一里許

りにて、黒生の磯を眼下に瞰下す、小松山の頂に出づ。

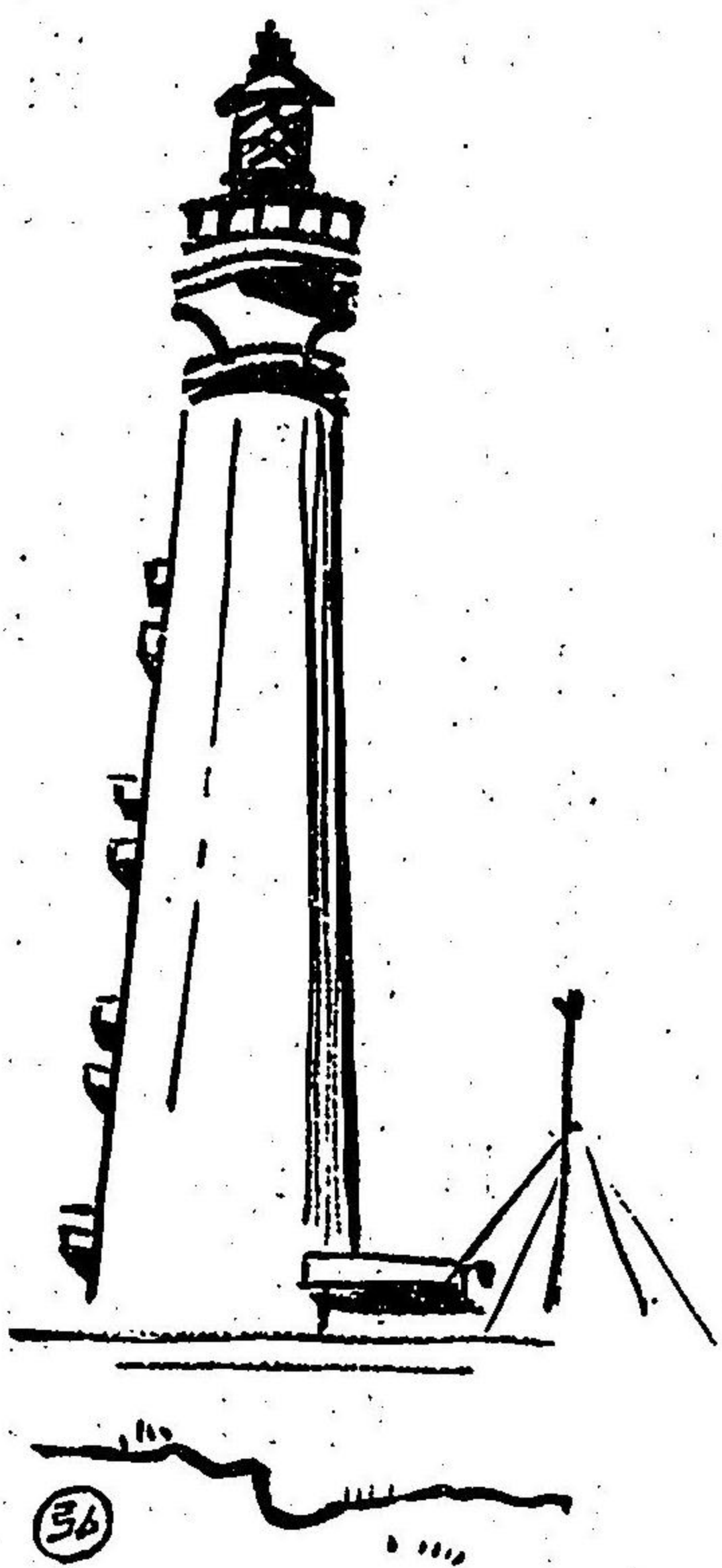
此所より雑木の森を過ぎ、雑草多き灌木の林を幾つかくぐりて、赤松高き邊に來りぬ、行きくへて海に臨める絶壁の上に立てば、君ヶ濱一帯の海岸眼下に敷きて、岩に寄せ來る白き波美はしく、小山の頂に立つ小さき華表、小さき祠、名所圖繪めきし面白き景色に少時鉛筆を走らしつ。

此所を下れば漁師の家二三、ラム子の瓶並らべる茶店など有りて、右にうねりつゝ砂山を越ゆれば、長く連る砂原一里に近く、左に海上三四十間を隔て海鹿島有り、古昔は冬季五六十匹も、絶えず群をなせしが今は少なしと、茶店の老婆が語るを聞き流し、燦くが如き砂原を一步くへに踏み締めて、右に連る松原の中に入れば、樹々の縁日を遮りて、吹く風俄かに肌に涼しく、蟬の聲長閑に聞え來る彼方の茂みには、松葉掻きの女四五人、盆踊の歌唄ひ居たり。一里に近き松原は、雲の往來に日を遮られて、時に暗き影砂を這ひ、草に移り幹に移りて後方の丘に消えて行く。遙かに犬吠の鼻を望めば、絶壁

の上に聳立する白き燈明臺、日に輝きて美はしく霞み、君ヶ濱一帯の砂を洗ふ太平洋の怒濤は、白き波頭を立て、絶間無き響を送り來る。

松原を出外れし所
は一面の砂山、濱
茄子の花、白き茅
花、砂の上を這ふ
て咲ける中を踏み
分けて、御風館前
の阪を下れば、道

は海に接して起伏する岩、寄せ來る波、糸の如く長く突き出したる長崎の漁村を眺めつゝ、兼て知れる旅館快哉樓に入りて、晝晌の仕度を頼みぬ。



試に波の響を聞け、遠つ往昔より日夜に絶えず岸を洗ひて、歴史の跡を止むる事二千何百年、太平洋の一角、我が秋津洲の東の端に位して、遙かに流るゝ、黒潮は、海を隔てゝ水平線の彼方に通ふ波の跡。

我等は今犬吠岬燈臺の下に、柔かき草を敷き花に枕して、空飛ぶ雲の悠々たるを眺めつゝ、深き思ひに耽りぬ。空は光充ち満ちて卵子色に、海は藍に紫に、近づく儘に緑を加へて、小山の如きうねりをなしつゝ、崩れ寄る怒濤に崖下起伏する巨岩に碎かれ、紛々として烟と散り、霧と散じて、高く飛ぶ事五六丈、犬岩俎岩の間は、絶えず流れ落つる水と、寄する潮と混乱して、白き泡沫湧くが如く、其の中を亂れ飛ぶ千鳥の聲、有るか無きかに幽かに聞えて、哀なる事限り無し。寝ながら見れば、青き草と廣き空と、藍色なせる

海のみ見えて、ドラ、ソーンの中に描かれたる英國の海岸と、極めて好く似通ひし景色なるを思ひ出して、若く美しくしき姉妹が沖に浮かべる白帆を眺めつゝ、水彩の筆動かす一節の、今も猶、眼前にある心地しつ。

細き道は絶壁の岩と岩との間をうねりて、遙かに下に續きたり。我等は草に絶り岩を手頼りて、一步／＼に下り行くに、岩は橙黄色に輝きて、日に焼かれし熱さ烈しく、漸うにして濱邊に達すれば、前後左右は悉く累々たる巨岩怪石、澎湃たる波又波、碎けて散るや烟の如く霧の如く、濕氣を含みし風絶えず吹きて、岩間を洗ふ白き泡沫、雪の山の動くが如く、轟々たる響は波にこたえ、山に木響して、凄まじ事比するに物なし。犬岩と稱ふるあり、形犬に似たり。昔時源九郎義經、落魄して此所に隠れし時、従ひ來りし犬の果敢なくなりし蹟と傳へられて、義經、辨慶が隠れしといふ、胎内くゞりの岩窟も有り、洞門の高さ二丈許り、波荒き時は飛沫高く散りて洞門に達すと聞きぬ、偶然見れば右手の海に突き出したる岩の端に、赤裸々の男長き竿を振り

て、打ち寄する荒波の中に釣を投ず、斯くして竿を振る事兩三度、竿は弓の如く撓み、尺余の魚きらりと日に光りて釣り上げられぬ、水の色は緑に泡沫は白く、赤銅の如き裸体、青みを帯びし巨岩、其の色彩の面白さは、夏ならでは見られぬ強烈なるものなりき。

岩を飛び岩を傳ふて、洞門の下に至れば、日蔭になりし岩の肌は、清水冷やかに滴り、苔の如き草一面に生へて、上より被さる如く突出したる巨岩の下は、稍暗く細き道だら／＼に上りて、崖の彼方に通ず、此所には年古る蛇の二丈余なるもの住みて夏は草の上に出で、燈臺見物の者を驚かす事屢々なり、然れど村にては之を殺さんともせず、既に旅廻りの野師に賣り渡せしにて、何年かの後迄放ち置きて、猶太くなるを待つものなりと。

洞門を抜けし所は燈臺の北、君ヶ濱一帯の白砂青松を眺めつゝ石切場の前に出づ、深く掘りたる穴は、四面鋭き岩に圍まれて、周圍約十町許り、細き一條の道は岩壁に沿ふて下に降り、塵に汚れし葦蓆の屋根したる休息所の傍に

は、赭黒き腕に鐵鎚振り上げし男七八人、照り付くる日に背を晒して、歌唄ひつゝ石切る様書の如く、黄ばめる岩、青き草、底に湛えし藍の如き水、水汲み上る桔槔、石負ふて登り来る若き女、其れ等様々の形と色とに眺め入る事少時なりき。鮑屋の前に出づれば、兼ねて知れる主人の老船頭は、一行の顔を見て止むる事頻なり、此所にて床几に腰を下し、茶を飲みながら、舊式なる望遠鏡にて、四邊の景色



眺むる田舎の客の形面白きを寫生して、再び快哉樓に歸り來りぬ。時は既に二時に近く、燦くが如き眞晝の日光熱砂の山に輝きて、草も木も燃ゆる許り

に、道行く人もあらざれど歸るに心急がれて發足しぬ。
 曉鷄館前を過ぎ左に絶えず海を眺め、砂山を越え、砂濱を歩み、或時は波に追はれて、遠く脱かれ、或時は退き行く泡沫を追ふて、濡れたる砂に跡踏みつくる磯傳ひ、いつしか長崎の濱に至る、四五十軒の漁村は婦女子供の聲のみして、恵比壽神を祭れる丘より見れば、南の沖に少さく浮かぶ白き帆鳥の群れたる如く、磯に上げたる舟の蔭には、網繕ふ老漁夫圓く座りて、聲高く語りぬ、此所より犬若迄一里許りといふに心勇みて、草茂く小松生ひたる小山に登り、海より吹く風に背を晒しつゝ、芋畑の間をうねり、唐蜀黍の葉擦れを聞きつゝ、次第くに進めば、道は更に左折して、松林に沿ふて行く事二三町、外川の町を眼下に見て、又右すれば松の風、波の響、薄曇の日は斜めに影を地に曳きて、夕蟬の聲寂しくなりぬ。
 松の林の樹の間を抜けて、月見草の原を真下りに下れば、白き野薔薇の花砂の上に咲きて、うねく續く砂山の彼方、波打際に聳ゆる黒き岩、青き草山、

小さき家、犬若は其と思はるゝに、左に僅か陸を離れて、鳥の如き岩の聳ゆるあり。斯くて眼に見えながら、長き砂地を歩む事二十分許り、漸々草山の裾に至りぬ、日は曇りて光無く、波靜かなる浦々の、夕に近き風音無く吹きて、海の色淡く霞みたるに、前に聳ゆる仙ヶ岩暗く波の上に立ち、影織る波はゆたりくと長くうねりぬ、昔時何某の戦に打ち敗けたる軍兵千余人、此の窟に脱れし跡なりとて、今も岩の中央に残る穴空に透けて、潮干たる時陸續きに通ふて貝拾ふも興多しと、寫生する傍に立ちて得意げに語る村人に別れ、屏風の如く立つ巨岩に接して、草山を這ひ上れば、打ち寄する波、岩と岩との間を渦巻き流れて、淡綠色に崩るゝ色美はしく透き通り、其の邊に立ちて大漁衣着たる漁師の二三人、釣するも面白かりき。此所より遙かに見ゆる飯岡海岸は、紫ばみたる赤き絶壁、雲間より射す日光に溶けて柔かく霞み、黄金の如く黄なる帆、靜かに走る海の面は、今しも濃き藍色に變り初めつ。
 一行は暫時休みし後此所を立ちて、再び暗き松山を越し、山畑續きに進み行

けば、高神たかのみに通ずる道長く屈曲して、次第に暮る、潮風寂しく吹き渡り、谷の如く狭き崖下の闇を辿つ、後になり前になり、暗き森を過ぎて右に曲れば、軒傾きて家根破れ、壁落ちたる一つ家の中に、薄白き提灯ぶらりと動きて、石佛五つ六つ、或は傾き或は倒れ、床の下より生えし薄尾花の風に靡く様物凄く、人氣無ければ寂しき事言ふ可からず、急がはしく此所を過ぎて、一二町行けば、既に燈火點けし小店ありて、人聲華やかに聞こゆるに、銚子道を尋ぬる序に、一つ家は何ぞと問へば、湯灌場の小屋なりといふ。町に出でしは夜も八時に近く、疲れし足を引きて再び大新に歸り着けば、宿の女の早くも荷物携げて、部屋に案内するも心嬉しく、斯くて風呂に浴し夕响の膳に向へば、川より吹き入る、風清く、電燈明く輝く十五疊の一室、潮來に菖蒲踊見ざりしかはりに、銚子に名高き大漁踊眺めんと、土地の歌妓うたひめを聘よばしめぬ。

月未だ出での欄干に立てば、花の香頻りに袖に香りて、何の花ぞと顔さし出

せば其ぞと思ふ枝も無く、遙かに暗き大利根川、音なく流る、遠近の、船の燈火逆しまに映りて、霄闇照らす星の光りは、燦として水の上に落ちぬ。歌妓の一人年若く美はしきは、土地の漁師の娘にて、撥さばきも鮮やかに、聽て、艶なる聲高く大漁歌の一節唄ひ出せば、四人は立ちて手拍子面白く、盆踊の如く身を開きて舞ふ、指す手、引く手の軽く動きて、漁場の踊の豪爽なる様思ひやられぬ。

此の踊、昔時は銚子町の大漁に、漁師は先づ身を清め大漁衣着て、何十人と無く打ち揃ひ、川口明神に禮参りして後、町の歌妓悉く招きて、主客の別無く踊りしものなりしも、今は町に携まげ重ちゆうと稱ふる酌婦多くなりて、大漁踊も寂しくなりぬといふ、歌妓の述懐も哀れに聞えて、次第に荒廢し行く古き風俗、名所圖會に残る趣の日に、移るひ行く淺ましさを思ひぬ。

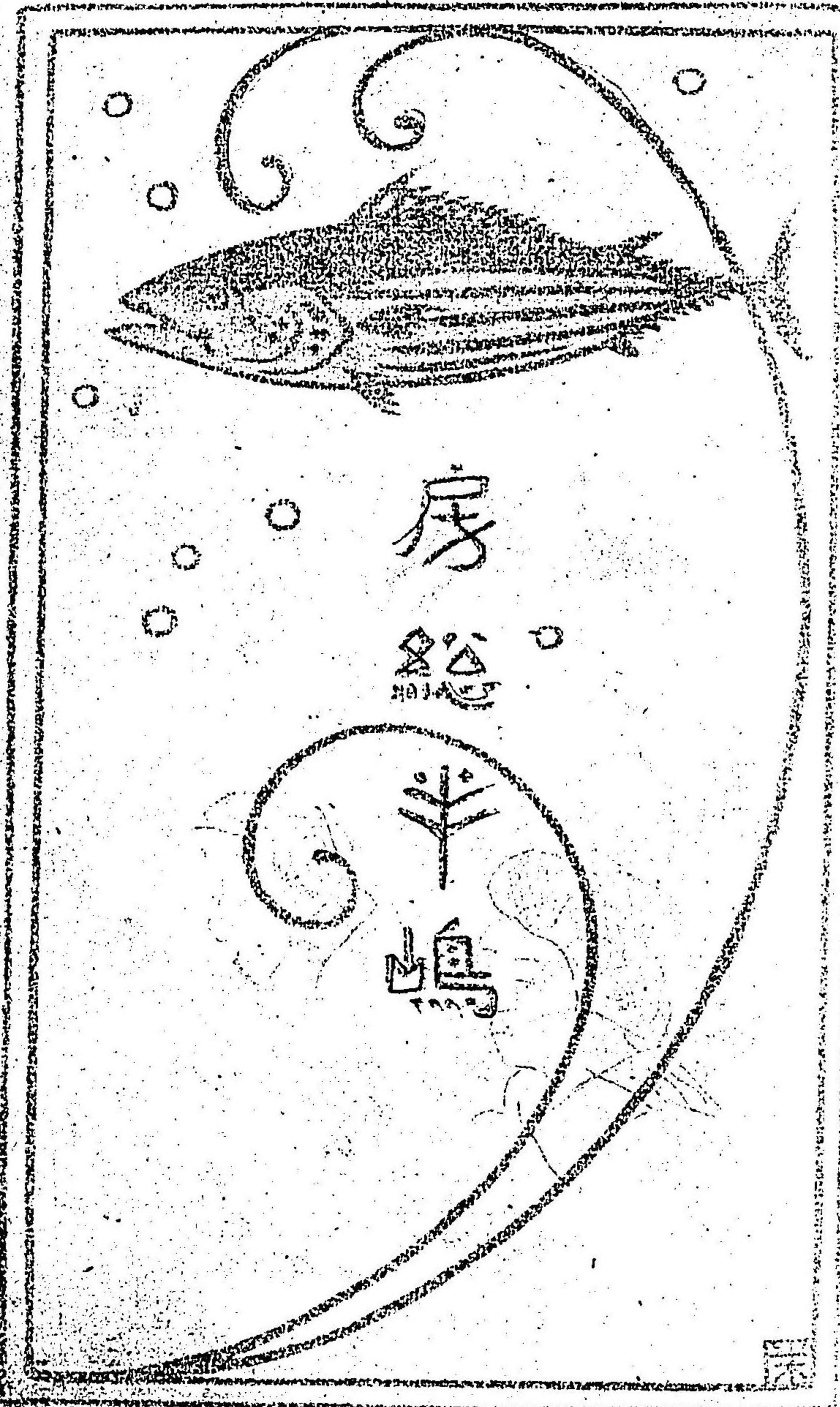
大漁歌

一つさせ、一番井筒に積み立てい、
 川口押し込む大矢聲、此の大漁舟
 二つさせ、二葉の沖から外川まで、
 續いて入り込む大鯛、此の大漁舟
 三つさせ、皆一同に招をあげ、
 通はせ舟の賑やかさ、此の大漁舟
 四つさせ、夜晝燃いても燃き餘る、
 三杯一丁の大鯛、此の大漁舟
 五つさせ、何時來て見ても干魚を、
 まも空まも更にない、此の大漁舟
 六つさせ、六つから六つまで津割りは、
 大わり小わり手に餘る、此の大漁舟
 七つさせ、名高き利根川高瀬舟、
 津や脂を積み送る、此の大漁舟
 八つさせ、八田の沖から若い衆が、
 大漁衣揃へて宮参り、此の大漁舟
 九つさせ、此の浦護る川口の、
 明神御利益顯はせる、此の大漁舟



十をさせ、十を重ねて、百となる、
 千を飛び越す萬兩年、此の御目出度や

舟の結婚





房
総
半島



大漁歌

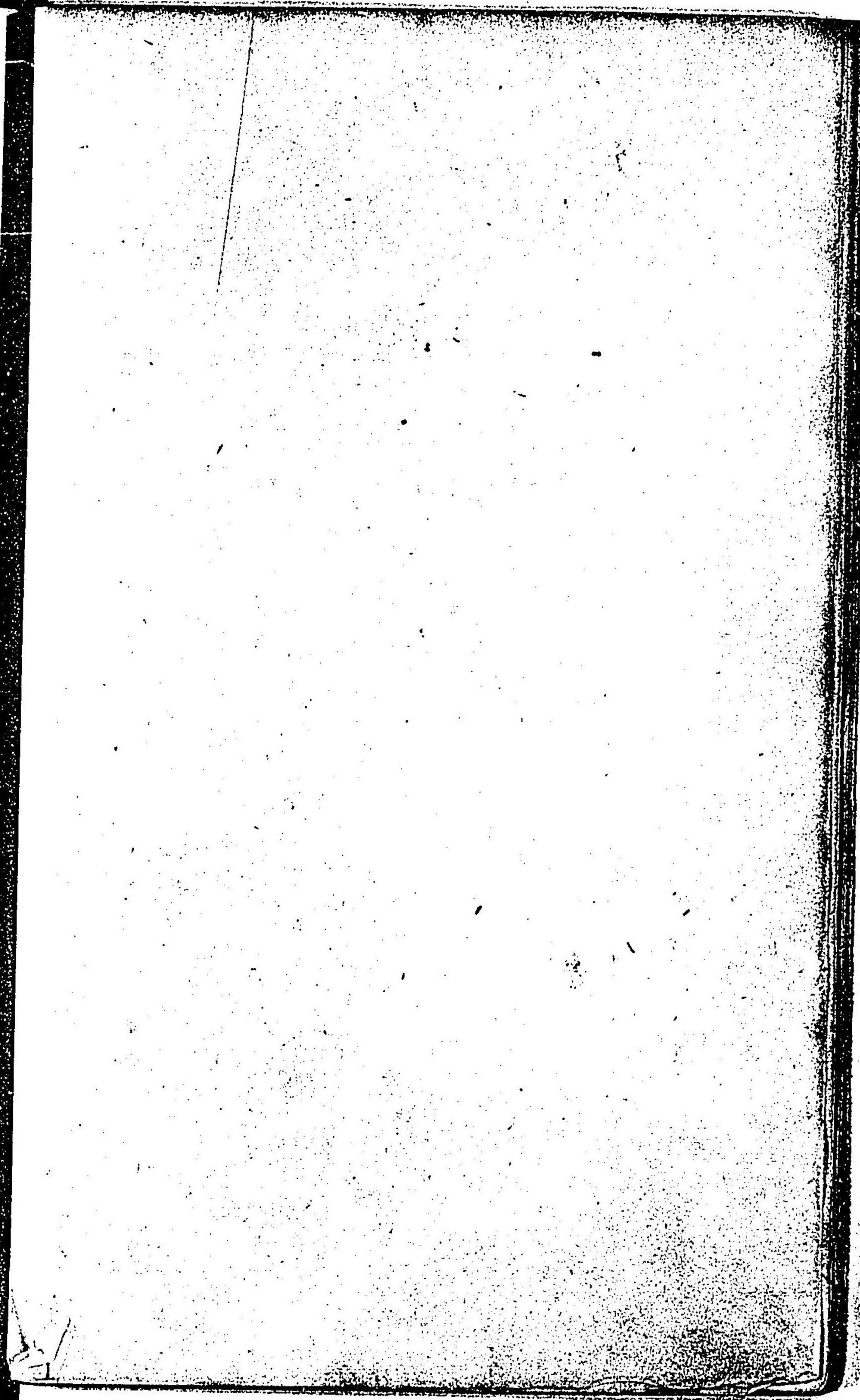
一つとせ、一番舟に積み立て、川口押し込む大矢聲、此の大漁舟
 二つとせ、二葉の沖から外川まで、續いて入り込む大鱈、此の大漁舟
 三つとせ、皆一同に招をあげ、道はせ舟の賑やかさ、此の大漁舟
 四つとせ、夜露燦いても燃き餘る、三杯一丁の大鱈、此の大漁舟
 五つとせ、何時來て見ても干魚か、まき空まも更にい、此の大漁舟
 六つとせ、六つとせ、六つとせ、洋割りは、大わら小わら手を振る、此の大漁舟
 七つとせ、名高き刺身屋、此の大漁舟
 八つとせ、八田の沖から若い衆が、大漁衣揃へて宮参り、此の大漁舟
 九つとせ、此の浦を渡る川口の、明神御利益顯はせる、此の大漁舟

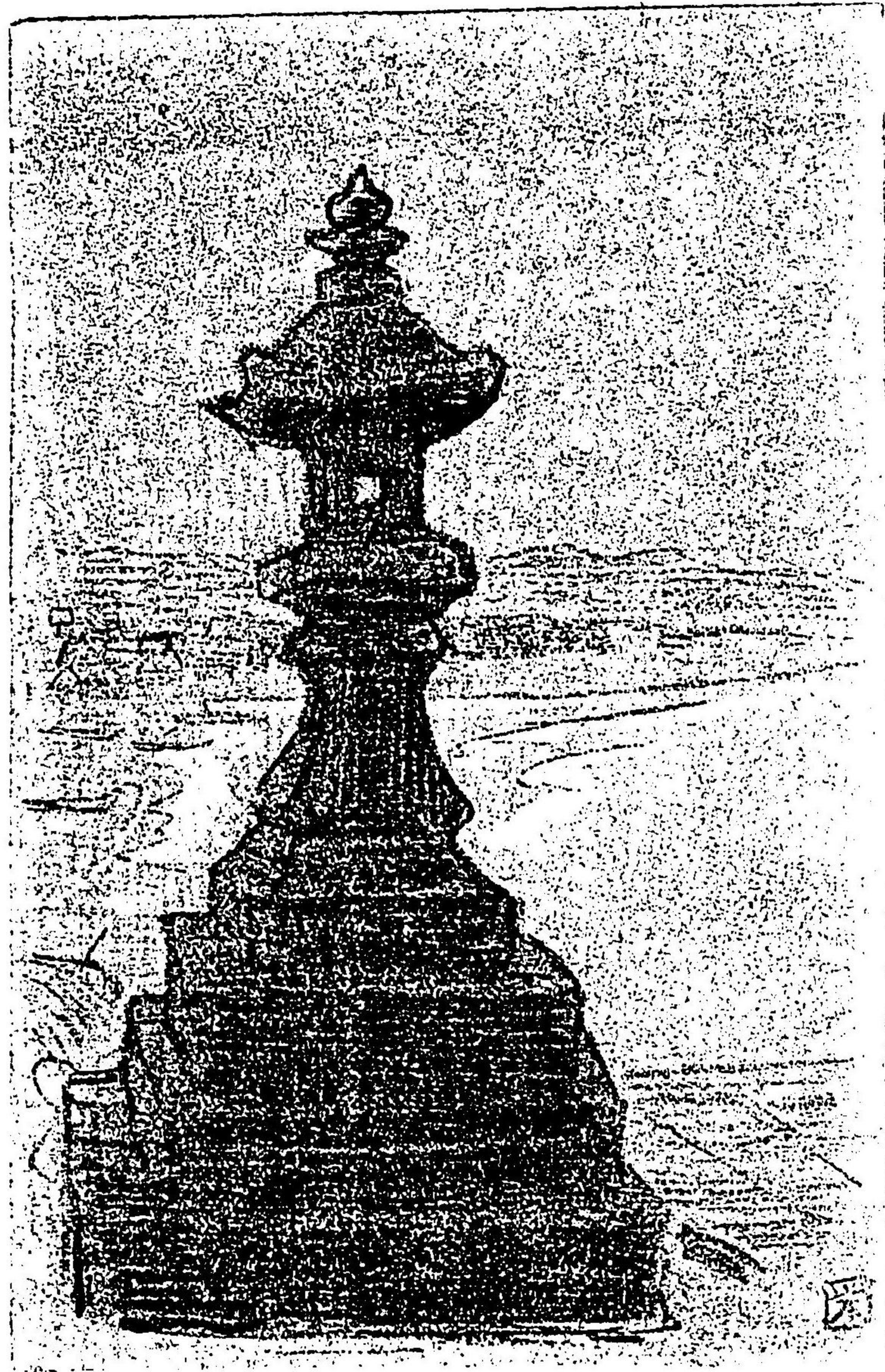


十とせ、十を獲れた、歌なる、手を飛び越す萬兩年、此の大漁舟



大東海之水助
山本之助水浴



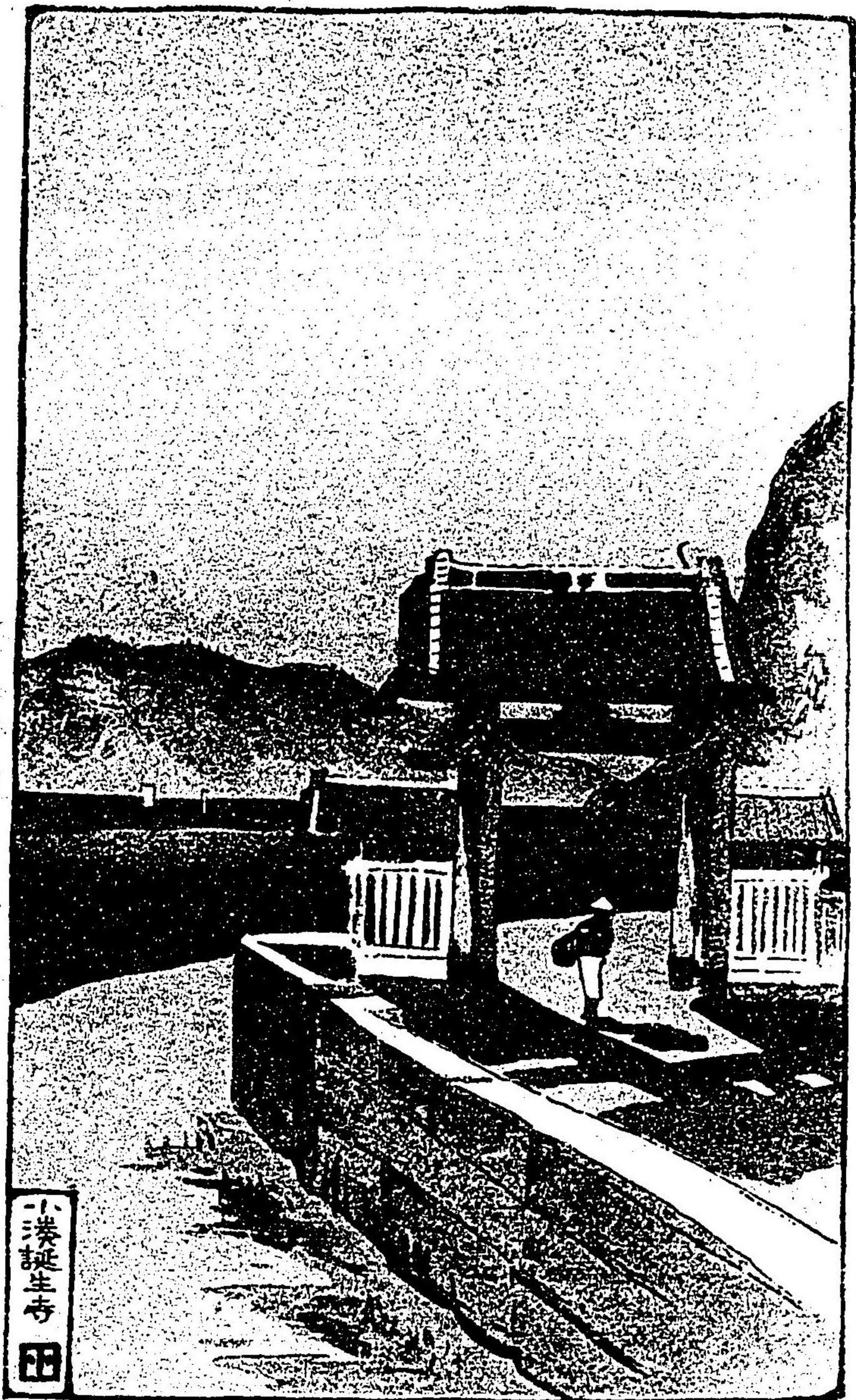




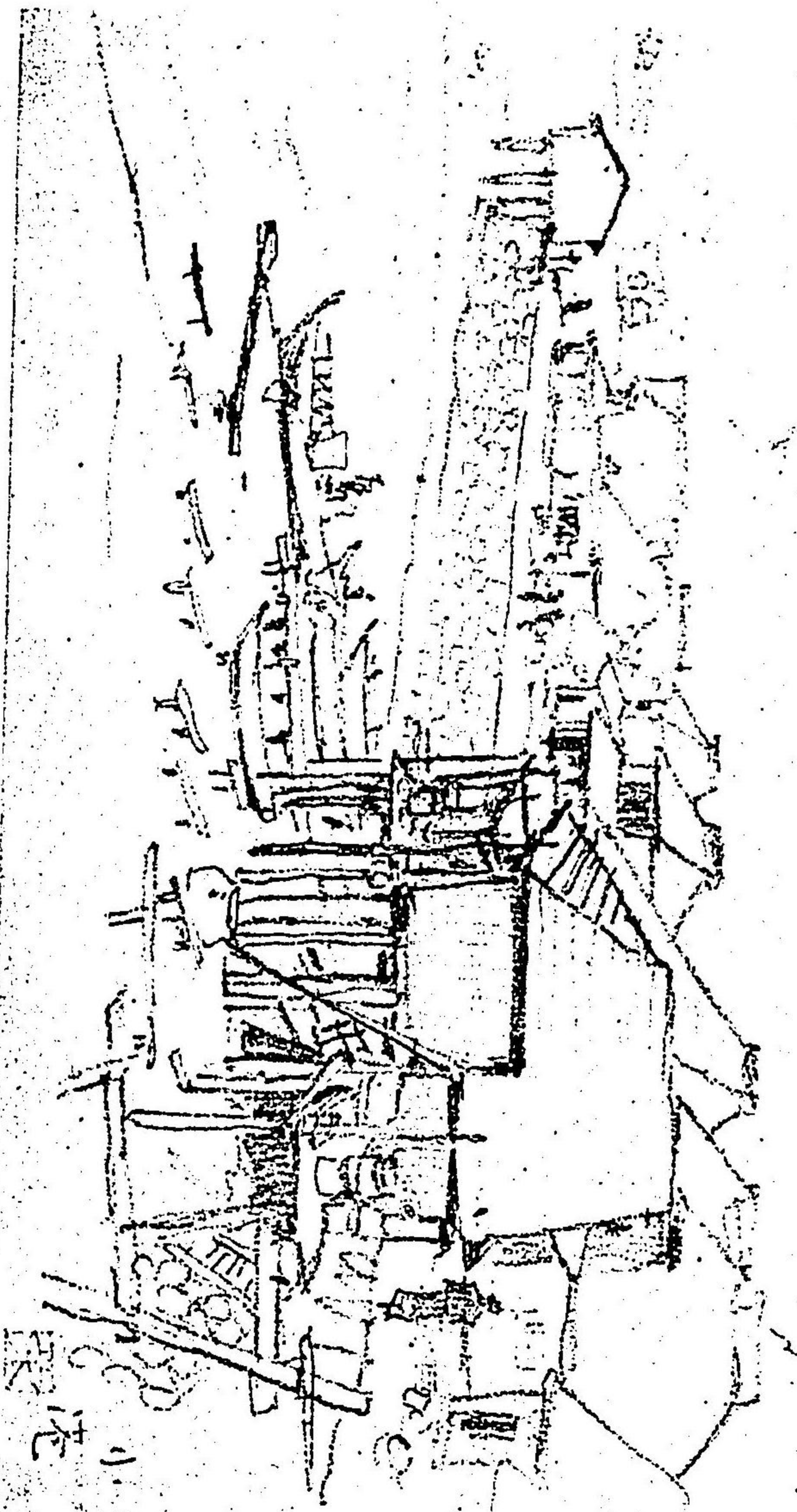
房州の隧
澤弘光



房州の隧
中澤弘光



小湊誕生寺
田



港
小
野
岡

小
野
岡



清澄山
石



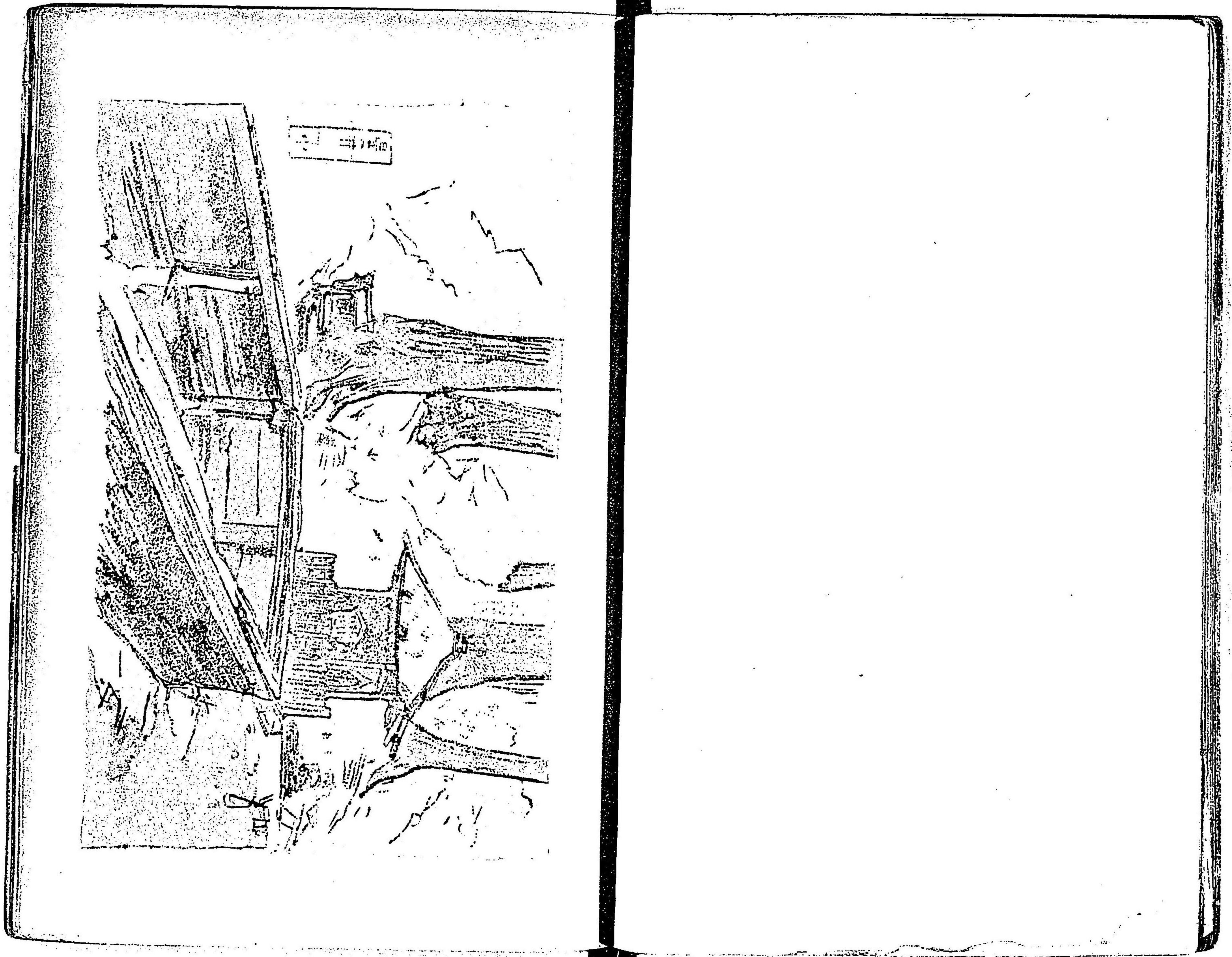


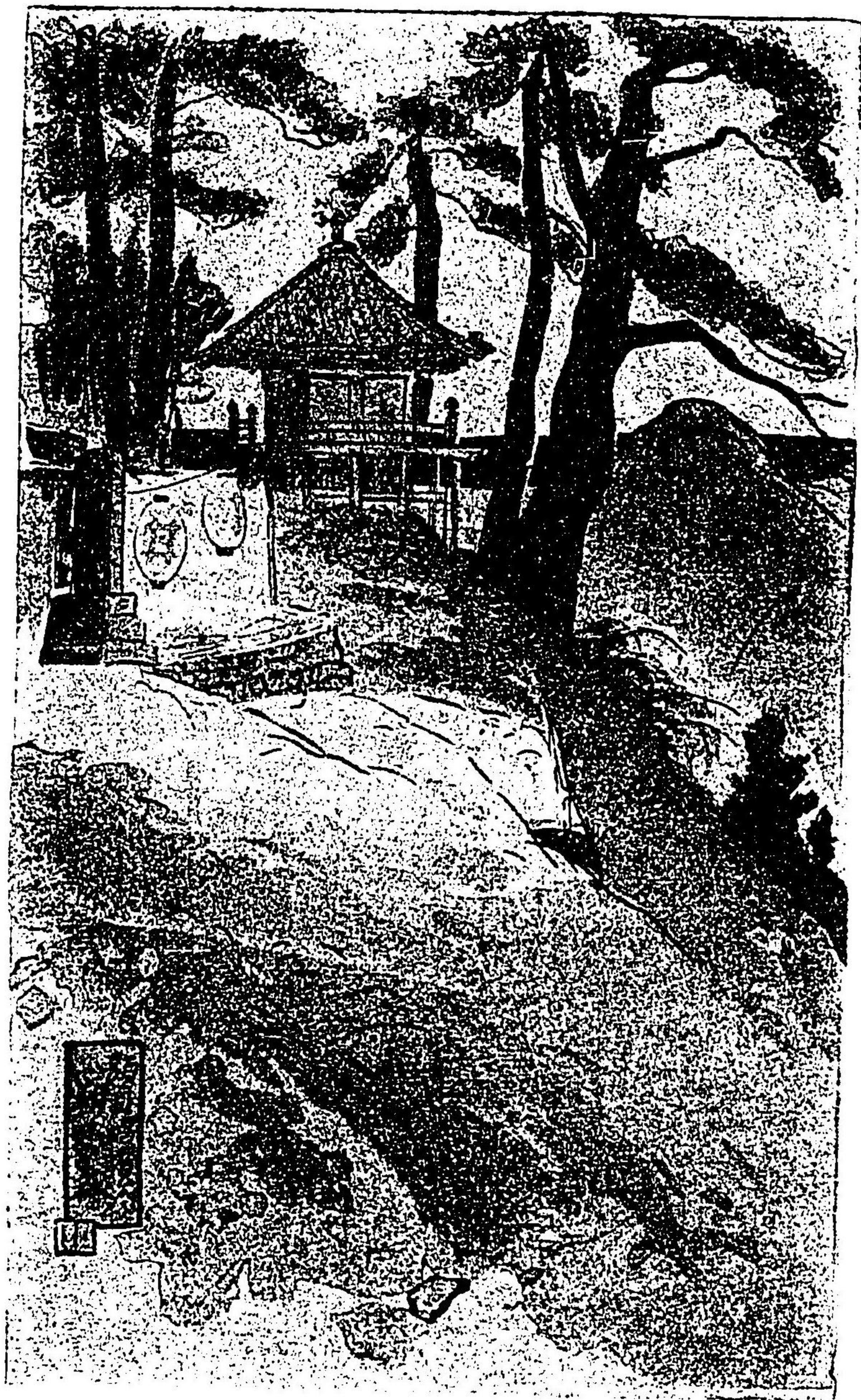
清澄の旅舎
岡野榮



日蓮上人の跡
36

日蓮上人の跡
光弘澤



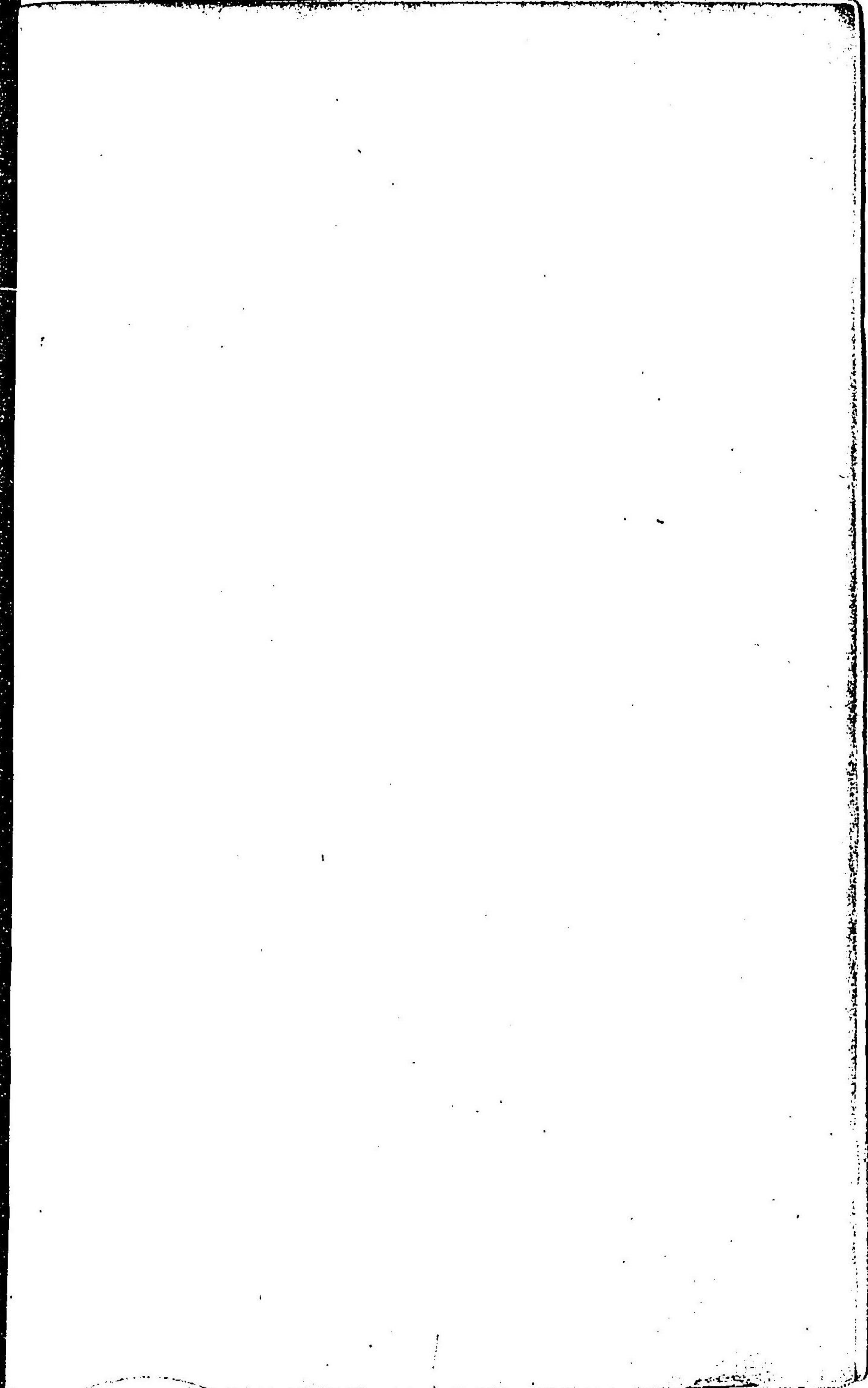
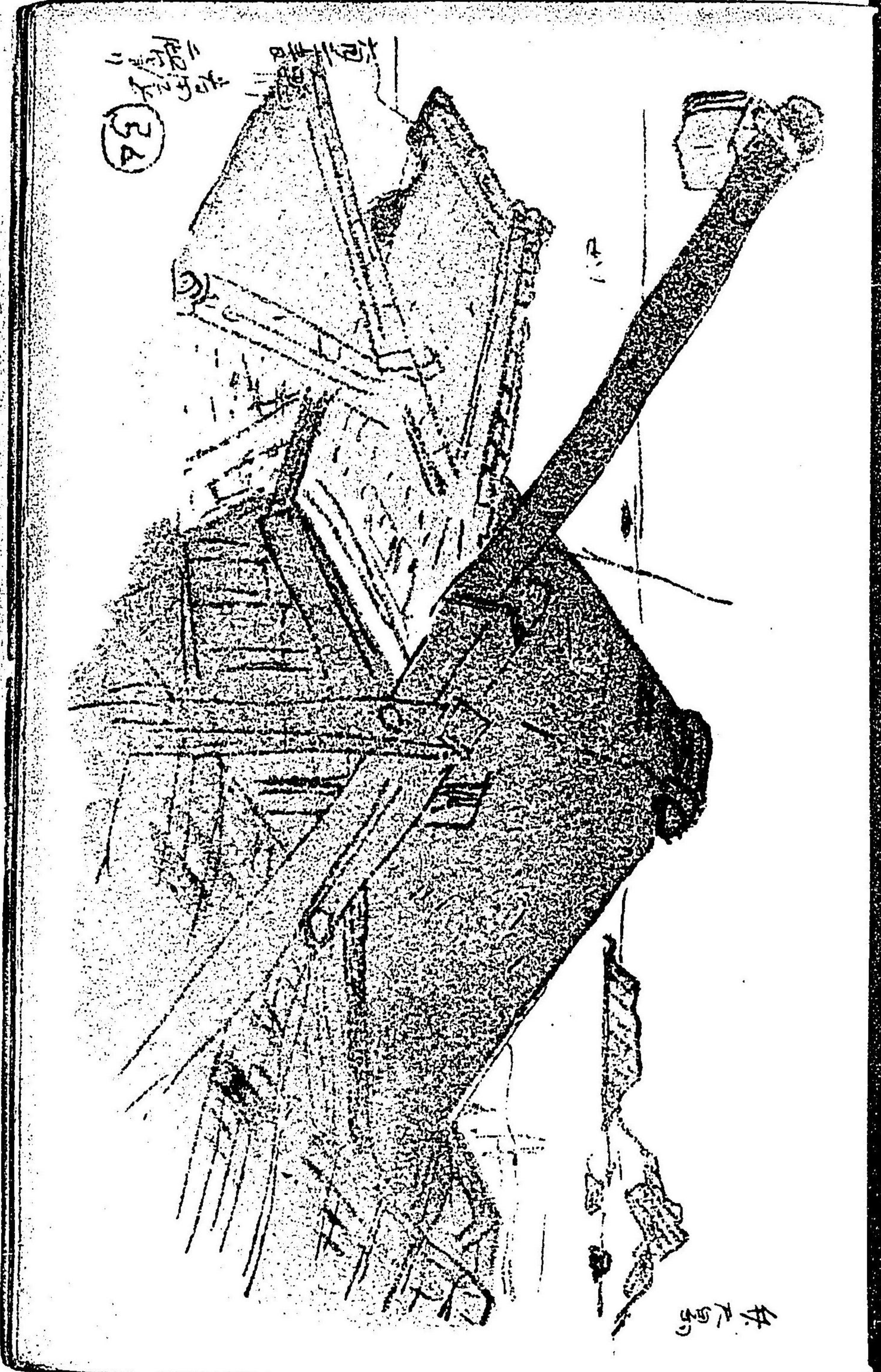


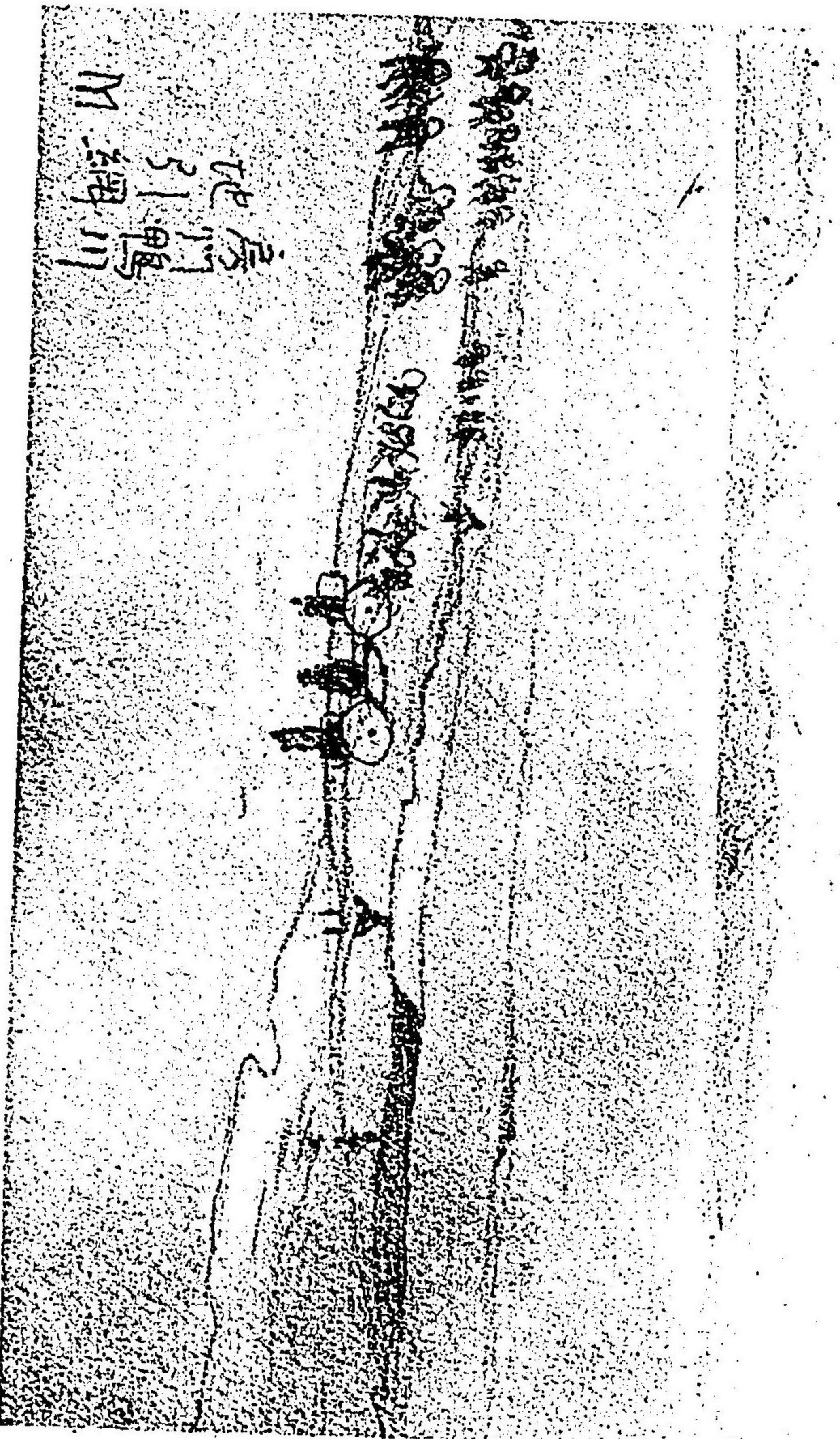


M

浦田
日守
守房
小松系

原 松 小
助之森木山





地門
引船
M 緬川

緬甸地川鴨
助之森木山





白 澤 中
弘 光

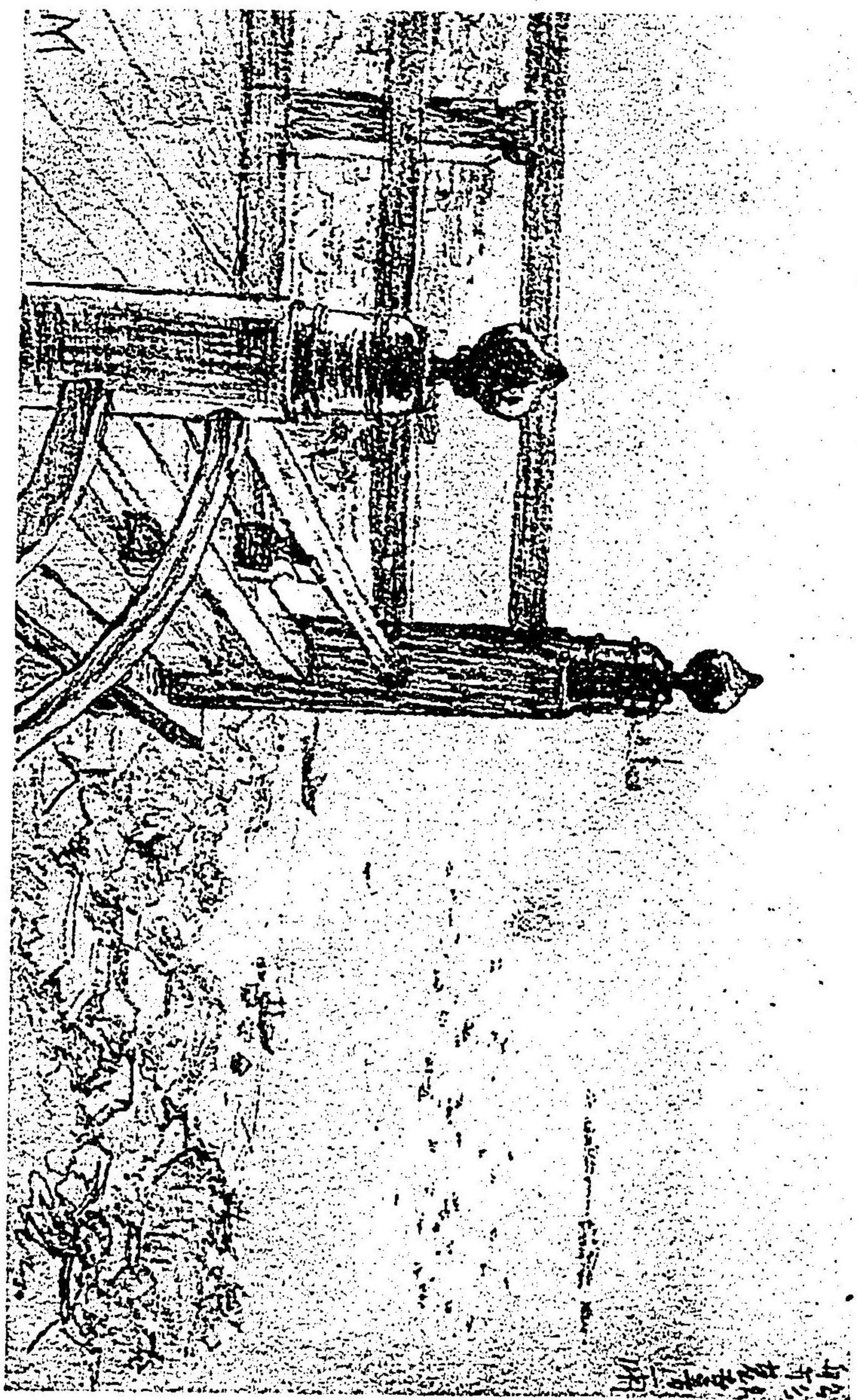
弘光











音 觀 形 船
助 之 森 本 山

房總半島

日影華やかに射して、白き花咲く草山續きの青嵐。列車の窓吹き通す朝涼の虫の聲々、断えては續き續きては絶え、送り迎ふる暗き森、小川の嘯き、古りたる祠、松林、遙かに利根の流れを青き畑の上に眺めつゝ、西へくゞと駛る總武線の汽車に投じたる我等一行は、斯くして銚子を後に松岸を過ぎ、猿田の隧道を抜けて、風に戦く青田を下瞰みおろしながら寂しき小驛を過ぐる事數度、八日市場の蓮まだ早けれど、花咲く朝や如何にと思ひつゝ、一時間許りにして成東に着きぬ。停車場を出れば、東金行の馬車喇叭吹き立て、客を誘ふに、我等は菖蒲咲きたる小さき茶店に入りて暫時憩ふ。成東鑛泉の旗は、波

切不動の朱の御堂の下に立ちて、鬱々^{こんもり}したる松山連りたる下は一面の苗代、水浅く緑映り、菅笠戴ける里の乙女の田の草採れる風情優しきに、家の中は暗く踏む人も無き唐臼^{からうす}、薄く光る光線の面白ければ、いづれも鉛筆の寫生を試みつ。

此所を出で、二町許り歩みしに、東金行の馬車屋頻りに尾し來りて薦むるに、遂に一行は車上の客となりぬ、乾きたる道は馬蹄に煽られて、軽く舞ひ上る塵埃烟の如く、右に揺られ左に動きつゝ、駛り行けば、黒く焦げたる町の焼跡、見るも哀れに二三町續きて、僅かに波切不動の麓にて止まれり。之より左に折れて田甫道に出づれば、眼も遙かなる苗代小田の淺緑り、茫々として果なく連り、雲靜かに動く空に、亂れ飛ぶ燕の影早く消えて、鶏犬の聲新たに起りぬ。斯くして野の花薫る小川の畔、蟬鳴く森の茂みを過ぎて、馬蹄の響、鞭の音、喇叭高く吹きつゝ、東金の町に入れば、道往く人顧みて何事ならんと不審りつ、大原行の發車は九時三十分、此所にて房總案内を購め、暫時雑談に

時を移すに、輕便鐵道に似たる小さき列車は、聽て地響きして進み來りぬ。東金を後に黒き烟を靡かしつゝ、渦の如く卷く青田の中を駛り去れば、遠くの森は次第く形を變へて、飛ぶが如くに消ゆる小川のせゝらぎ、柳の一叢^{むら}、小さき板橋、雜木林、見るく中に小さくなり行く人の影、日は斜めに窓に射して、此等移り行く背景を後にしたる田舎娘の、半面を透かせる頬の色、紅く美はしきに眺め入れば、大綱くと呼ぶ聲窓より窓を飛び行きぬ、此所にて大原行の列車に乗替んと、プラットホームに降れば、次の發車迄に優に一時間を余せり、爲す事も無く空屋^{あきや}の如き寂しき停車場に待つも辛ければ、棚の外に出でんと驛員に語れば、乗替の客は凡て構内に待つ規則なればと、頑として聽かず、我等と同じ客の學生らしきは、奮然として進み出でつゝ、食ふに物無く、商買人も無き此の寂しき所に、如何にして待つぞ、茶は何所に有る、酒は何所ぞ、と争ひつゝ、突如柵外に跳り出しぬ。他に殘れる二三の者も前後して出づれば、驛員は空しく其の後姿を眺むるのみ、我等も遂

に停車場の外に出で、煤けたる茶店に腰を下し、煎餅と茶に餓を凌ぎつゝ、池の渚に咲く菖蒲の花の、紫に、白に、絞りに入り亂れたる美はしさを喜び、雑談に時を移せば、いつしか發車の時は近づきぬ。斯くて再び汽車の客となりて、大なる沼に白き雲逆しまに映る畔を走り、青き田甫、禿げたる丘、雑木林の中を抜けて茂原を過ぐれば、一之宮の海水浴場に近く、遙かに松原の間より九十九里の蒼波を望みつゝ、小高き山に沿ふて進む事、二里許り、大東停車場に下車せし時は午前十時三十分。

海水浴場に九十九里の波の色見んものと、一行は打連れ立ちて青田の畦を進み行く。風柔らかに吹きて、長閑なる片田舎の、人に逢ふ事も稀なれば、蟬の聲する森の蔭を打興じつゝ、辿りて、村役場の前より左にうねくしたる道を何所迄もと行けば、狭き細徑は水草茂けき沼の傍に通じて、雑草深く露多しく、放し飼せる駒は、道の中央に草を食みつゝ、悠々として遊べる様、荒れ果てし四邊の景色に對照して、自然の趣を盡したるに、暫時鉛筆のスケッチ

をなしたつ。

斯くて、柳緑りに草の花咲く野塘の水に影映しつゝ、海老魚すくふ兒等の傍を過ぎ、潮風に撓みたる森の下蔭涼しげなる田家の前に至れば、樹蔭になりたる廣き庭に、新しき蕙を敷

きて、杵振り上げし年若き娘に接し、米俵運び來る若き男、女は單衣の肌脱ぎて、釣合好く肥りし胸より肩露はに、乳の上を僅かに白き手拭にて隠したるが、優しき女の風情ありて、艶々したる肉色の、何

とも言ひ難く美しくしきに、外光に晒されたれば、青き木の葉の反射と、空の光り薄く射りて、活々したる色彩面白く、いづれも暫時立止りぬ。此所より



網干したる漁家二三軒過ぐれば、所謂大東の海水浴、松赤く枯れたる草山の
間僅かに展きて、砂濱白き渚に打ち寄する波高く崩れては又退いて行く蒼き
海、沖乗る舟あるか無きかに小さく、水平線のあたり漸く頭を上げし入道雲、
むくくとして白く光りぬ。

岸に近く左手に高さ絶壁聳えたる下は、鐵柵長く續きし岩有りて、浴する人
は此所に柱に凭りて、潮の寄するを待つと聞きぬ。旅舎は僅かに大東館とい
へるが有るのみにして、今は宿泊の客も無く、人氣無き磯の、淋しき事限り
無かりき。我等は十二時發の汽車に間に合はせんと寫生終るや、直ちに元來
し道を引き返して、停車場に至れば猶三十分を余しぬ。朝早かりしかば空腹
を感じる事甚しく、とある茶店に入りて、晝食の間も無ければ、有合せし壽
司と汁粉を頼みて、漸う食ひ終りし頃、大原行の列車は黒き烟を吐きつゝ山
と山との間を出で、青田の中を近づき來るに、急がはしく停車場に走りぬ。
之より沿道の風物只青く、斷續する小山、清水の音、地層を露出したる絶壁

の下を過ぎりて、房州砂作る小屋の邊を走り、三十分許りにして大原に着す。
驛は房總線の止まる所、房州東海岸に通ふ要路に當れば、停車場前の旅店も
流石に賑はしく、勝浦行の馬車は、吐かれしが如く崩れ出づる旅客を取巻き
て、薦むる事頻なり。試に勝浦の里程を問へば五里余にして、馬車は一人六
十錢宛、日暮れぬ中に沿岸の名所古蹟を見物しつゝ行くを得可しといふに、
明くれば立ち、暮るれば泊る旅ながら、田畑の間に見るもの無く、足を勞す
るも恐に近ければと、遂に車上の客と爲りぬ。

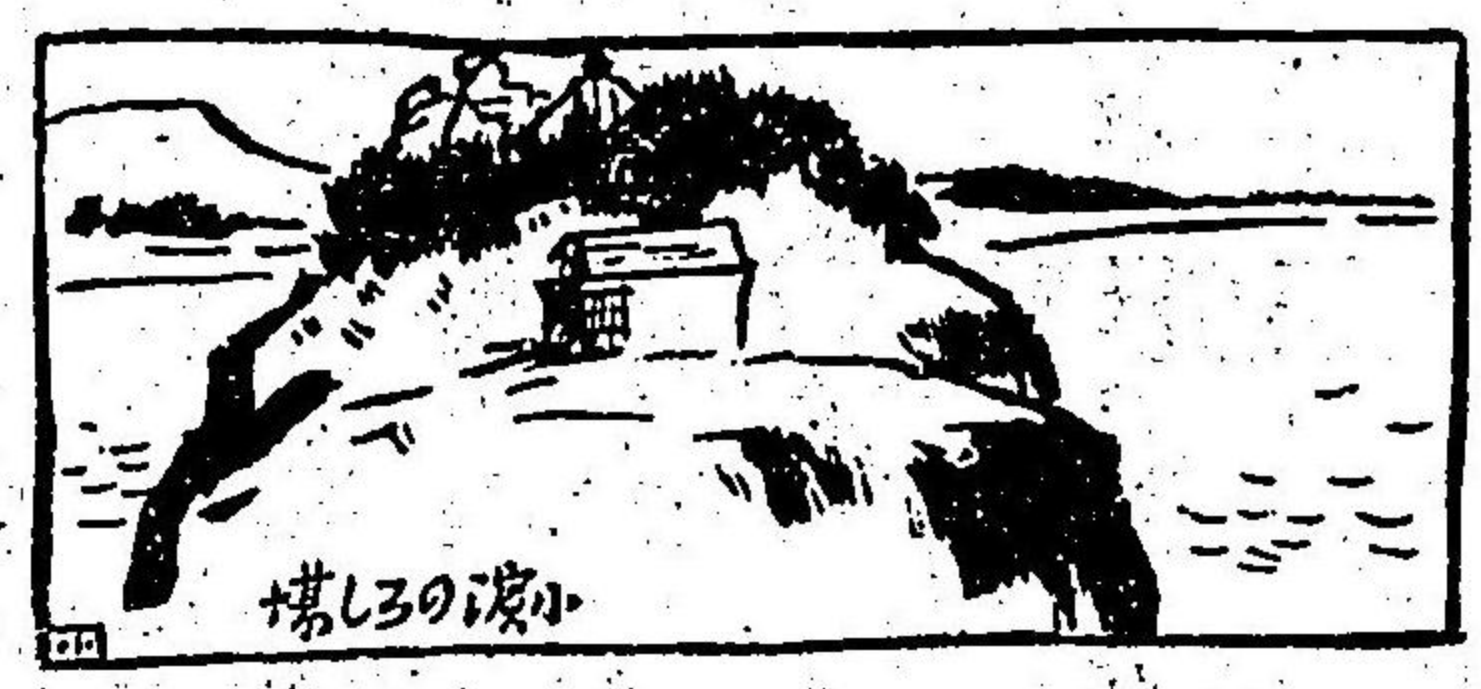
六月下旬の日の光街頭を照らして、乾きし道白く影紫に、靜かに駛る馬車の
中は、風涼しく吹きて、揺られくつゝ移り行く町を眺むる面白さ、馬の手
綱捉る男は肥えて腕節強く、口笛吹きつゝ馬を勞はり、四五町許りも來りし
時、左に細き道を曲りて、小濱の八幡に行くと言ふ。道は高低定り無き垣と
垣との間、狭き小路をうねりくつゝ、二町余りも行けば、漁師町の臭き匂ひ
襲ひ來りて、眼腐れたる女の、素肌に赤子負ひし儘炎天に立ちて、聲高にわ

めき行く様何と無く凄まじきに、馬車の後追ふ子供七八人、何か呉んろくと、何所迄もと慕ひ来る。

八幡岬は馬車の止まりし漁師町の外れに當りて、怪しき小料理屋並べる前を過ぎ、青き石階を登る事七八十級、草柔かく亂れて敷石を隠す荊棘の花白く、空に聳ゆる石華表の前に立てば、遙かに眼下に展開されたる小濱の漁村、大原の海水浴、削りなしたる絶壁に寄する白き波遠く廣がり、真砂を洗ふて走り行く果は、描ける如き松原青く、右は漫々たる太平洋、我等一行が瀛車に揺られて運ばれし、大東一の宮は彼れかと許り打ち霞み、海の風海の匂ひ、静心なく通ひ来る心地好きに、暫時描く事も忘れ果てつ。馭者は右手に持ちし鞭を上げ、草を叩きつゝ案内して、石燈籠の前より更に右すれば小さき社あり、絶えず吹き来る潮風に、丸くなりし古木鬱々茂りて洞窟の如く、雨露にさらされし木連川格子に懸る赤木綿の布、何と無く眼に残りたるを何ぞと聞けば、眼病の願掛なりと無造作に答へぬ。

道は左に岩の間を通じて社の背後に出づ、青き草絨繡の如く短く生ひて、三方海に面したる絶壁の上を、這ふ如くして繞り行けば、稍廣き平地の中央に小さき番小屋有りて、板戸の中に積み重ねし松薪、何本といふ數を知らず。之は風強く吹く暗黒の夜に、沖なる舟に合圖の烽火上ぐる所にして、薪は即ち其の料なりと。

斯くて馬車に歸りし後は、再び漁村の中を縫ふて静かに馬を歩ませつゝ、俵菜賣賣る茶店に立寄りて二袋購ひつ粒の大き一寸許り、口に入るれば忽ち溶けて泡の如く消え、味ひ甘く酸く車上の徒然を慰むる事多かりき。坦として砥の如き一筋道は、暫く畑の間を駛りて、或は降り或は上り、水田に沿ふて右に左に迫り来る草山を眺めつゝ、庚申塚の邊を過ぐ、之より道は兩山の間に入りて、藪陰暗き



小波のしほ

所危き土橋、水車小屋、人無き境を疾驅する事空飛ぶが如く、茅舎村屋、蕭條たる寒村を経て山路に入れば、風吹き渡る尾上の草青く靡き、今を盛りの紫陽花、紅に紫に咲き崩れて、晝ながら啼く時鳥の聲頻りなるも凄まじく、行手に暗き隧道長く續ける中に、靜かに馬車を乗り入るれば、馬蹄の響轍の音、四面の岩に反響しつゝ次第く暗くなれば、陰々たる風俄かに起りて、黄泉路吹くかと疑はるゝに、巖を漏るゝ清水の点滴静けき中に聞こえて、心細き事言ふ可からず。僅かにして隧道の口に近く、互の顔も次第に明るくなれば、馬車は忽ち走り出で、再び日盛りの街道を行く。

御宿は海に近く遙かに蒼き空遠く伸びて蜿蜒たる草山續きの磯傳ひ、蘆青く砂白き道を一鞭加へて疾走すれば、兩側の家は見る／＼中に消え去りて、長く續きたる村の葬禮と並行しつゝ進む、行列は初めに青龍の幡、銅鑼鳴らすもの、被衣着たる女など數十人古風なる風俗面白ければ車上ながらにスケッチして南を望んで走りつゝ、小さき峠一つ越ゆれば松の並木暗く茂りたる峽間の

風冷やかに、薄暮に近き山のけはひ、溪流の音、遠く響ける波の音、夕の烟淡く棚引く茶店の前に暫時息を休めんと馬を止む、馭者はやをら車を降りて茶店の中に入り、年若き女房の出せしコップ酒二三杯傾けて、再び車上に鞭を振ひぬ、其の間我等は或は車上に或は道芝に、太き松と石の華表と砂濱に寄する白き波、近き漁村、青き草山、筆に任して描きしが靜かに登る阪路にて所の名を問へば部原と答へぬ。

之より道は全く海を左にし山を右にし、黄土色なる砂岩の絶壁、今や崩れんとする岩を頭上に戴きつゝ走り去れば、夕の風肌かみに寒く、脚下の岩石十數丈蒼き波瑠璃の如く透きて、海底の藻屑も明らかに、遙かに水平線に近く浮かべる濃藍色は、空の薄紅に接して一層美はしく、漸う紅くなり行く雲の峯海波に映じて水の色も變りぬ、斯くて勝浦に入りて廣き町を走り抜け、勝浦館に着きしは午後六時に近く、芝生の綠濃やかなる庭を前にしたる二階に登れば勝浦町の白茅屋指呼の中にありて、烟波渺茫たる太平洋の夕風靜かに暮れて行く、此

夜風呂より出で、夕餉済して後、宿の主人に房總の名所舊蹟尋ねつゝ、折しも流し來りし義太夫語りを招きて三勝半七酒屋の段の一節を聞く、燈火暗き欄干に立ちて浴衣の袖吹く潮風に弄られつゝも、老ひたる盲目の昨日は東今日は西旅より旅を漂泊ひて人の爲に弾く絃の音も悲しき人の物語、あはれ淋しき人の語るに友無き老の獨旅に、只慰むるものは三絃の糸、其れさへいつか切るゝの時あらんと思ひ遣りて、火影に映る影法師のやつれし姿一層哀れに感じたるに、宿の婢



はいづれも障子の外に踞して、一句の戀も忘れじと聞きぬる風情、かゝる海邊の夏ならでは見難き艶なる姿なりき。

二

一夜明くれば薄日射したる海の朝、濕りを帯びし風徐ろに吹き渡り、遙かに浮かぶ勝魚舟點々星の如く、輝く波、輝く空、榮ある初夏の光充ちて、夾なる日の午前七時、昨夜約せし馬車屋は早くも馬車を運び來りて、我等の出發を促しぬ、宿の主人は一行の新聞社に關係あると見るや、一封の飛書を馭者に與へて、懇ろに東海岸の勝を説き、磯の海草採る様を見物せよと、婢をして案内の役をなさしむ。町を出で、左りに漁小屋の間より、砂齧き濱邊に下れば、廣濶なる平砂遠く連りて、灣をなしたる浦々の、怠れる波濼く寄せて、ヨチューム作る料にと引き上げたる海草、山の如き傍に、若き女の二三十

人、隊をなして集まれる有り。海草は昆布に似て太く丸く、四五本を一荷として、差し荷さしなひにせる二人の女は、入れ替りく、熱く燻かけたる砂原に運び來りて、蕙の上に擴げ行く。

我等は此所に風俗の寫生を終りて、前なる小川を越えんと談らふ折柄、案内の婢は聲高く彼方の女隊を呼ぶに、若き女三四人、忽ち川を渡り來りて、男選みはせぬものぞ、妾めかけの殿御の輕き事よと、互に戯に打笑ひつゝ、我等を背にして彼方の岸に着きぬ。街道の馬車は既に町外れに有りて、喇叭吹き立て、來るを遅しと待つが如きに此所に宿の婢に別れて、砂原を歩み草山を越し、再び車上の客となりつ。

濱邊傳ひの路すがら、がたりくと動搖する車上遙かに眺むれば、一灣の煙霞に閉されし山々の綠濃く連なりて、渚の波は白銀の流るゝ如く、うらゝかなる日偏く照らす十里の長汀曲浦、馬の嘶き勇ましく、次第く山路にかゝれば、嵐氣搖曳せる深綠、樹々の梢に蟬の聲淋しく聞こえて、草叢渡る風

の音、露を含める千草の花亂れし中に、大なる山百合の花白く咲き誇りて、馬車とすれく倒れかゝり、手を出せば觸れん許りに、甘き香高く薫り來りて、夢路を歩むが如くなるに、一行は暫時行手の事も忘れ果てつ。馬車を止めて手折りし山百合の花を窓に挿し、房總街道を南に向つて疾驅する事一時間、花より薫る朝の風、絶えず面を掠めて、快き事言ふ可からず。草は木々の綠に映じ、木は草よりも綠暗く、或時は森々たる林の中、或時は屏風の如く削りなしたる懸崖の上を走りて、搖られく進む程に、鵜原守谷はいつか後に、岩黄に波蒼き興津の漁村に至る。此の間房總の堺なる雀島の勝を過ぐ。嘗て此の地に在りて精勤の聞え高き一警官、小湊の磯近き舟の中にて、一六勝負に餘念なき土地の博徒三四人を認めしかば、身を跳らして舟に入りしに、彼等は最早や脱るゝ道なく、得物くを携げて立向ひつ、警官は遂に彼等の爲めに縛せられて、帆柱の根につながれしが漕き出す舟は蓮華あはせ漕をめぐりて、濱づたひに此の雀島に來り、岩の上に捨てし儘、舟は再び眞帆引き

上げて、舟路遙かに八幡岬に向つて逃げ去りぬ。島は松茂りて波の音絶えず響き、陸より見れば人の形も定かならねば、四五日の間は知る人も無くて捨てられしが、僅かに漁船に助けられて、今は其人北條の方にありと物語る、取者の言葉に尠ならず興に入りて、此の邊博徒の多き所かと尋ねれば、得意氣に微笑みて上總の東金は昔時よりの名所、小濱の磯には今猶奴の小萬と名乗る女俠客ありて、其の子分は三四十人に餘る可し、且つや至る所盛るは只漁場なれば、人氣の荒きは言ふに及ばず、其等を相手に入り込む酌婦は、年々五百に餘ると語りつゝ、木の下暗き切通しにかゝれば、馬は靜かに歩みて、青葉の風もいと涼しく、次第／＼に下りし所は、即ち誕生寺の裏門にして、苔蒸したる老樹の蔭深く、石垣に沿ふて右に曲れば、内浦灣の水碧に、影を涵せる山々青く連りて、夢より淡き銀帆二三。

馬車は靜かに誕生寺の門前を、海に沿ひつゝ進みて、清海樓に至る、家は南に海に臨み、誕生寺、鯛の浦、漁る舟の數も見えて、月明き夜の漁火如何ば

かり美はしからんと語りつゝ、暫時疲れを休めて、晝餉の仕度する間を誕生寺に詣づ。元來し道を引返して、漁船並ぶ海岸傳ひに門を入れば、左手に日蓮上人誕生水といへるあり、堂は一間四方にて柳をめぐらし、上人出生の時、湧出せし水は今猶盡さず、長き敷石の止まる所、青松風を含んで枝を交へ、素木の山門高く聳ゆるあたり、幾百年の歴史を彫む勾欄、朝には豊さかのぼる朝日子の光を仰へ、夕には半輪の月の影を止む、正面は即ち阿彌陀堂にして、西方淨土に向つて建てり。法華立花の紋付きし白き幔幕堂を繞りて、雨露に朽ちなんとする濱椽に、群れ飛ぶ小禽の聲美はしく、香篆の烟、梵唄の聲、恍として法界に逍遙して、微妙の天樂を花降りしきる雲中に聞くが如く、法の燈明滅する堂内の阿彌陀如來、金



色に輝く傍には、十界の諸菩薩端然としておはします。堂を降り遙かに鐘樓を隔て、西を望めば、一碧瑠璃の如き海水鏡をのべ、白鷗遠き空に入る静寂なる光景、恰も描くが如くなりき。

我等は之より門を出で、上人の父母を納めしといふ寺に詣で、清海樓に歸れば、晝食の膳既に並びて、給仕の者も待ちしといふに、急はしく箸を上ぐ。婢は我等に鯛の浦の勝を語る、舟にて小湊の鼻を廻れば、即ち鯛の浦にして、舷を叩きつゝ、鯛を投ずれば、三尺四尺の大鯛、海底より浮かび来て、蒼き潮も忽ち紅に、悠々として泳ぐといふ、古昔上人此の地に在るや、村人に諭して、殺生禁断の制を立てしより、子々孫々堅く守りて、今猶此所に網を投せず。四隣の魚介皆安樂浄土の思ひして、之に聚るもの其數を知らずと、されど我等は此の日清澄山に登りて、上人出家の蹟を尋ねんと思ひしかば、殘る思を惜しみつゝ、新に宿の主人が雇ひ呉れし馬車に乗替で、馴染を重ねし大原よりの馬と馭者とに別れ、又來ん夏を契りつゝ、宿を離るれば、主人は我等

と並んで、腕車を走らせつゝ、天津に向つて出發す。

清澄山は天津の町を北に去る事一里二十四町、坦々砥の如き街道を走り盡して、三十分許りにて別れ路に來れば、此所に主人と別れて、馬車は右に荒れに荒れたる山路に入り、微かに薄るゝ日を仰ぎつゝ、古川の橋を渡り、草深き山間の畑を過り、うね／＼上る阪路を揺られながら、次第／＼に上れば、嵐氣漸く迫り來て、炭負ひし男、板を荷ひし女に行逢ふ事數度、房州は女の働く所と、馭者が笑ひながら語るも面白く、斯くしてとある山麓の茶店に至る。馬は此所より進まねば宿にて待つといふに、一行は荷物を頼み置きて、之より羊腸たる山路に入る。

夏ながら日影曇れる山々の、峯吹き渡る風冷やかに、九十九折なす細き道は、右に木深き谷を望みつゝ、一步／＼に登りて、濼々たる溪河の音何所とも無く木響にひやく物淋しさ、幽かに白き百合の花暗き緑を抜きて、葛の葉まどふ草叢に早くも起る虫の聲、松杉鬱々たる梢には、蟬の聲僅かに殘るも、山

路の風情ありて面白く、岩を攀ち崖を上る事七八町、清澄舊道は茲に新道と合して、一むら高き老松の邊に至る。山高く緑を敷ける尾上の夏霞、夕に近き梢にかゝり谷を隔て、對へる山に淡く昇れる晝の月、茫乎として眠るが如く、幽禽微かに啼きわたりて、溪を飛び行く果ては影も見えず、之より一軒茶屋の前を過ぎ松山を越え、うねりくへて朝日の森の麓を繞り、朱の御堂松の木の間にはの見ゆるを、石階の上より眺めつゝ、漸々頂上の古驛に達す。

見よ、荒廢せる山中の古驛、淋しく暮んとする夏の日は、午後五時の斜陽を此の山村に投げて、煤けし家、破れし窓、一新講社の看板、納手拭、此等過ぎにし夢の蹟を語る、古き錦繪の如き光景轉た淋しく、老ひたる人の杖に縋りて、背に背負子をつけしが、よろばひつゝ降り來る姿の哀れなるに、石階の上に二三並べる旅舎は人住むとも思はれず、笥の水枯れて、草茫茫たる家の周圍、野の花一面に咲き崩れて、唧々たる虫の聲茂く、斯くては暮るゝに

間もあるまじと、急がはしく仁王門を入れれば、境内廣く三方山を繞らせる樹立物凄く聳えて、鐘磬の響先づ耳に入りぬ。

其の昔時、天富之命、鎮座ましましたる靈跡にして、人皇の初、命の告に依て祠を八尾千光の頂に建てし所、山上の池、水清く、五月雨つゞく夏の日も、玲瓏として玉を磨き、渚の柏、葉を重ね枝を交へて、年を経る事一千年、夜なく千光熾に耀きしより、千光山と呼び、清澄山と稱へしも、移り變る世と共に、祠破れ祭斷えて、人跡を絶つ事久しかりき。一日名も無き法師宿願の筋ありて、山に登り、草を分け荆棘を展きて、祠の趾を尋ねれども、一鳥啼かす虫歌はず、閑雲靜かに麓を繞りて、山上の池只千古の碧を湛へしのみ、折しも薪樵る老翁、山より降り來て、此の柏を伐りて、虚空藏尊を彫めと告げし儘影も見えず、即ち伽藍を建て、像を安んじ、千光山清澄寺と稱ふ、堂の側にて加持せし時、湧出せし水は閻伽の水といひ晝猶明星の影を映せばとて明星水と改めしといふ。

寺記に依れば、其後仁明天皇の御宇承和三年、慈覺大師此地に留りて、露地を築き、中興の教を垂れ、聖僧日蓮も此所に剃髮の式をあげしと聞えし名山、今は避暑の客の稀に詣づるのみなれば、寂々寥々として見る影も無く、荒れ果てぬ、堂は石階を登りて、櫻樹の青葉茂りし邊を過ぎし所、嘉保三年雷火の災に罹りて、再建せしより幾百年の星霜を経にけん、丹碧を用ひざる鎌倉初期の建築壯麗にして、堂の中央には群青の地を、金色にて描ける梵字の額、昇降の龍は水火の形を現はして、めぐれる形面白く正面扉の背後に安置されたる大黒天は、巨匠飛彈の匠が名作として聞え、十二方位を形れる蓮の葉は、尊像の脚下に敷きて北方に面して置かれしは、心ある人のなせし所爲かと思はるゝに、堂の後



飛彈の匠作大黒天

方には、又左甚五郎作の牛像ありて、竈の邊に繋がれたり。堂を下りて星の井を尋ねんと、露地山の麓に至る、老杉轟々として天を靡し、風も音無く吹わたる浮世に疎き深山路の、夕露うるほる草より草を踏み分ければ、折しも西の空明り紅く射して、美はしき事かぎり無し。女人禁制の蹟と稱ふる古き門柱、草に埋もるゝ邊を過ぎて、道なき山に分け入れれば、杉の木立年古りたる崖に接して、倒れかゝりし茅舎あり。屋根には草茂り壁落ちて、雑草人の丈よりも高く掩ひたる所、青苔一面に生じたる古井戸有りて、住む人も無き物淋しさ、折しも年老ひし白衣の僧の、我等の後より來りしが、問はず語りに依れば、日蓮上人寒行の蹟として、今猶其の儘に残せるなりと、行は三七二十一日、或は七七四十九日、關伽の水を汲みて之に浴し、粥を作りて日に二碗を喫するのみ、此所に上人專念法華妙典の功德を感じて、背後の露地山に登り、天日を拜し、初めて題目唱讚の蹟を止めしなりと、案内する老僧の厚意に従ひて、濕氣立ち登る暗き溪の、道なき所を這ひ上りて、

木の根に絶り岩を攀ち、落葉腐りて土ともわかず、露しとゞなる森をくゞり、谷を降り谷を昇り、四五町許りも進みしが、僧は忽ち立止りて、稍平らかなる地を指しつゝ、之ぞ實の朝日の森と我等に語りぬ。

地は老樹鬱蒼として晝猶暗く、僅かに覗かるゝ空を仰ぎて、微けき光を望むのみ、地上に數個の小礫あり、之は昔時上人が河原の石を拾ひ集めて、一卷の經を誦する毎に、題目を記して收めし所、今猶土を穿てば、累々として小礫の出づる事、萬を以て數ふ可しと、石は山地の石に非ず、僧が説くが如く、小さく圓く、河原の石に異らず、殊に地は前に溪谷をひかえて、東に太平洋の蒼波を望む所、題目唱讚朝日の森の舊蹟として、恰好の地なる可しと思ひつゝ、元來さし道を引き返して、老僧に別れ、女人堂跡より右に阪を下れば、青臭き濕氣の匂ひ鼻を襲ひ、老樹蔭暗き谷の奥、木の葉の雫風に亂れて、雨を呼ぶ蛙の聲頻りなる懸崖に接し、横二間縦三間有余の板圍あり、其の傍に立つ小さき堂は、落葉朽葉降り積りて、屋根の色赭く、絶えず雲霧に侵さる

扉、苔深く蒸して、人聲も無き溪底の、寂しき事言ふ可からず、明星水は即ち之れと、簡單に寫生し終りし頃、茜さす日は森の頂にのみ少し残りて、木蔭草蔭にそこはかと無き夕闇の、おぼつかなくも擴がり行く。

一行は懸て本堂を右に、清澄の驛を過ぐれば、朝日の森として、古くより傳へられし、朱の御堂を脚下に見る、山高く松秀で、風自ら千古の古昔を語るが如き所、遙かに西南の方、波濤の如く起伏する山々の頂に、一線深藍色を描くものは太平洋、然れども此の地、東に面して、朝暾を拜せんとするに海を見ず、後年何人が假に遺跡と名けし所と思はるゝも、見るからに名所圖會めきし風景の、捨て難き趣あるに、暫時紀念の寫生をなす。之よりは中腹の一軒茶屋迄、風に駕するが如く走せ下りて、老婆と語りつゝ數碗の茗を喫す、前は見る眼危き絶壁、老杉暗く谷を蔽ひて、秋近くなれば野猪などの、此山を越す事珍らしからずといふを聞きつゝ、次第に暗くなり行く空を仰げば、夕つゞの光はのめきて、麓の方より這ひ登る狭霧烟の如く、暗き山路に

行き暮れて、燈火無き身の心細ければ、再び此所を立出で、前になり後に
なり、相呼び相應じつゝ、飛ぶか如くに走せ降る。

斯くて舊道を直降りに
走りて、麓の茶屋も近
からんと思ふ頃、提灯
提げたる若き男の、頻
りに此方を窺ひ居る様
不審きに、近づくまゝ
に傍に寄りて、小湊の
清海樓の御客様かと聞
かれしかば、疲れし足
踏み止めて、何故かと
問ひ返す。天津の油屋の店の男にて、馬車屋の知らせに御歸りを御迎に來た



りしといふも嬉しくて、之れより其の男に案内され、麓の茶屋に荷物を受取
り、暗き凹凸道を急ぐ事一里許り、街道に出で、左に星明りの海を望みつゝ、
波の音淋しき磯を辿り行く、宿は小川に接し、海に面したる瀟洒なる家にて、
往昔里見氏の臣某が籠りしといふ、二つ山の城趾を背後にし、遙かに小湊を
望む可し、部屋に入りて浴衣着替し時は午後八時、海も山も一つに沈む夜の
色深く、幽かに白き波を残して、靜かに更る漁村の空、草を出たる螢火か、
筑紫の沖の不知火かと眺めらるゝ、海に浮べる漁火は、消えては光り、光り
ては消え、風無くして明滅する地上の星の美はしさよ。

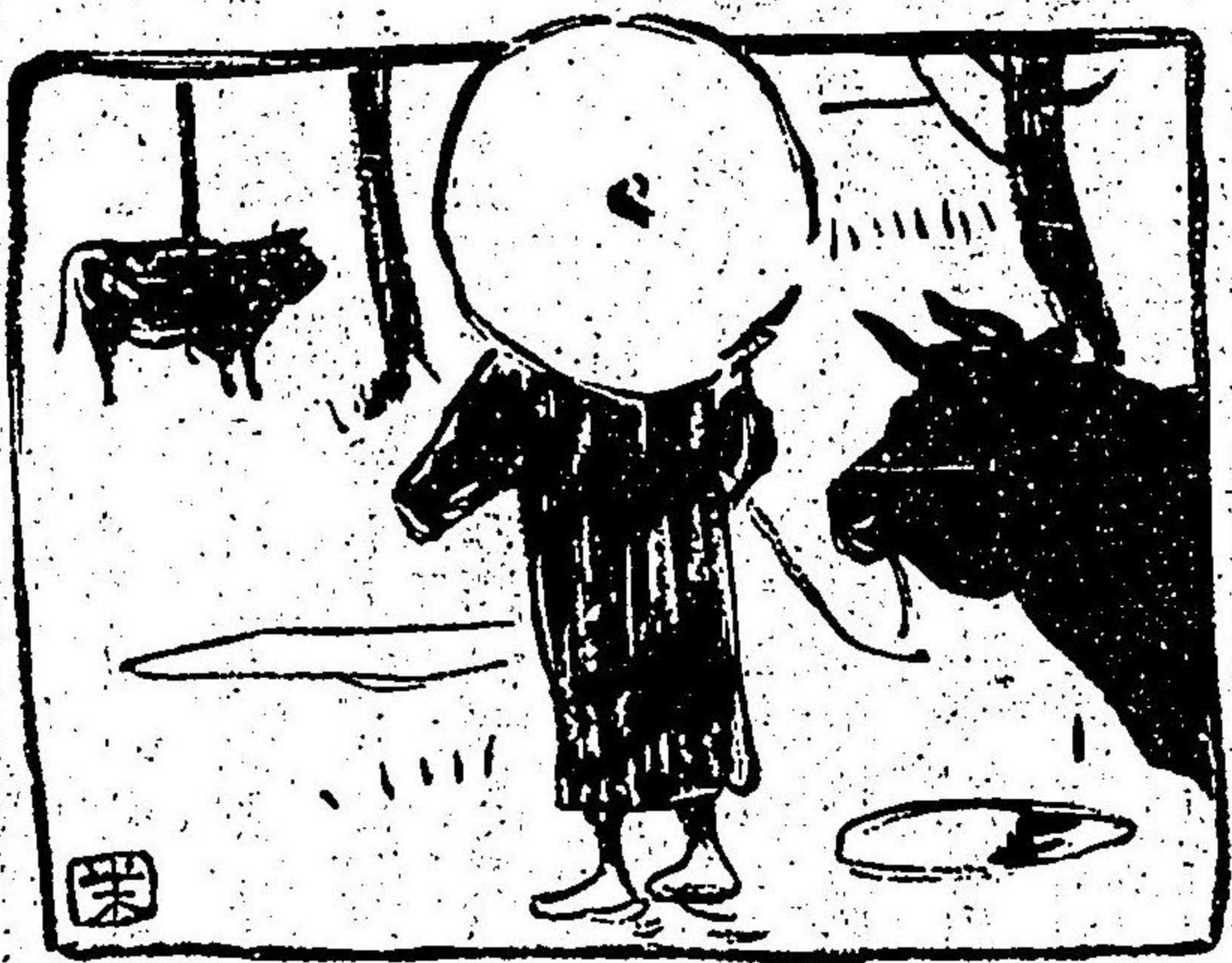
三

灰色の空、灰色の海、誰か之の神祕なる色調を描くものぞ、暗愁なる一色の、
空より山、山より海へと吹き流し行く烟雨の跡は、茫々漠々として見れども

見えす、遙かに南眞砂路を、鞭策の音高く疾驅して小松原に至る。小やかな
 る驛路うきみちの、半漁半農の家八九軒、並べるを、馬車の上より眺めつゝ、枳穀の
 實黄に熟したる垣に沿ふて二三間進めば、御料理酒肴と記せし軒行燈の陰
 に、白地の單衣着たる十八許の女、かゝる所に思ひもかけぬ美はしき容色に、
 微笑たる淋しさ畫の如くなるに驚き、今少時と思ふ間も無く、馬車は忽ち其
 を後にして、桑畑の間に至る。掛松寺は即ち之より左したる所、車を下りて
 松原に入れば、一町計りにして仁王門に達す、文永の昔日蓮上人、東條左衛
 門の襲ふ所となりて、小松原にかゝりし時、袈裟を路傍の松に掛けて、僅か
 に難を脱れしといふ、夫の松昔は繁茂して、周圍六尺に及しといへど、今は
 枯れたる幹を残すのみ、此所にて額に傷を負ひしを洗ひし蹟、大和田田甫の
 中に有りて、巖光山は其が静養の地なりと、路すがら馭者より聞きし物語を、
 思ひ浮べつゝ本堂に至れば、古りたる茅葺の屋根高く、雨の音、松風の響、
 いふばかり無く淋しきに、折しも境内の廣き草原には牧牛の市ありて、黄な

る番傘さしたる男七八人、彼方此方にて語らふ傍には、草に伏したると、樹
 に繁がれしと、白と黒と斑なると、飴色
 なると、物憂げに鳴く聲いと哀れなる
 に、二三葉の寫生を終りて、再び馬車に
 歸り來る。

房州東海岸の勝は、小湊を出で、天津鴨
 川を過ぎ、波太の仁右衛門島と、太夫岬
 との間にあると聞きしが、今日は其の地
 に臨む嬉しさに、物憂き雨も辛からず、
 左に遙か田甫を隔て、ひよろ／＼松二
 三本立つ彼方は、一面に曇れる海の色、鼠
 色なる中に變化ありて、水平線近く緑を
 含み、岸に寄る波稍白けて、雨に濡れたる青き草との調色は、悉く半調ハーフトーンな

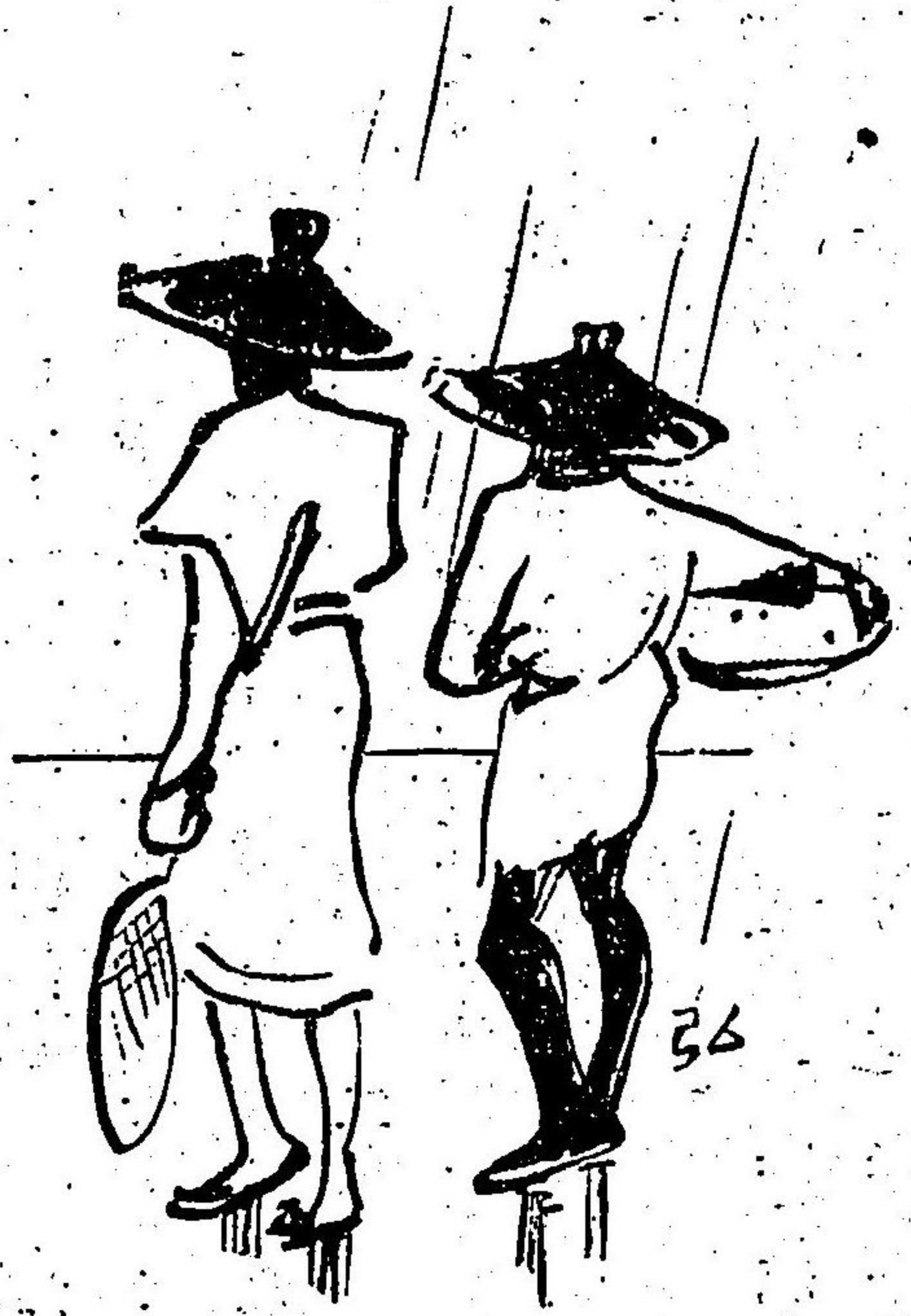


悉く半調ハーフトーンな

る面白さ。之より一里許の間、雨を犯して飛ぶが如くに走り鴨川に至る、馬車を吉田屋といへるに止めて、先づ階上の廣間に座すれば、若き主人は茶菓を薦めつゝ、頻りに東海岸の不便を語りぬ、海よりすれば、房州の鼻を廻らざる可からず、北條、保田よりするも、猶一日の日子を費し、大原よりすれば、優に二日路に餘りぬれば、鮮魚多く、避暑避寒の地として宜きに關はず、客の來る事稀なりと言ふ。此所に早ければ晝食の、準備頼み置きて、折から今初めしといふ地曳網眺めんと、婢に案内さして濱に出づ。

二里に餘る砂濱は細雨に烟りて、遠き山々薄く濃く、白波寄する渚に、四五十人の漁夫一團となりて、網を曳くもの船を漕ぐもの、曳々ひくこま聲して働く傍には漁師の妻子早くも籠を提げ來りて、魚の分配を待ちつゝ立てり。船を出すものは白く碎くる波に入りて、多くは裸躰の姿勇ましく、船に背を當て、揺り降せば、中に赭黒き男の群に交り、肌白く肥えたる乳房の女、二布一つになりて、男勝りに働く様凄まじき許なるに、暫時眺め入れば、網曳く網は既

に短くなりて、立ち騒ぐ人狂する如く、漸くにして曳き上げし網は、砂上に置かれ、所々に柱を建て、二三人の男厚さ二尺餘に積りし魚の上を、縦横に歩みて、一荷いっかくに分け入るゝ様勇ましく、之を圍める男女の一團は、いづれも裸躰の儘雨の中に立ち、或ものは桶を持ち、或ものは籠を提げ、今日の大漁を、口々に罵り騒ぐさま



しさ。我等は此所に雨中の寫生を終りて、吉田屋に歸り、心盡しの晝食を済して、價を問へば更に言はず、是非なく相當の茶代を置きて、馬車に昇る。

荒島辨天島は烟雨の中に淡く浮かびて、一つ離れたる窟島は、遙けき沖に打ち霞みぬ。之より波太に至るの間、暫時は海に遠ざかりて、百合の花高く薫する山峽の、青葉の風に吹かれつゝ、いつしか左に高き崖を見て、坦々たる道を走り去れば、行けどもく島は見えず遙か後方を顧れば、波太の岬と思ひしは、所謂島の仁右衛門にして、青き草一面に生へたる頂に、朱き華表小さく見え、此の儘過ぎんも口惜しく、馬車を残して中澤、山本二氏と共に後に戻り、高き丘一つ越して破れし柴朶垣に沿ふて、哀れなる漁師の家を過ぐれば、蒼き海近く迫りて、波に浮かべる漁船二三、更に漁村の三角を繞れば、前は即ち仁右衛門島にして、呼べば答えん許りに、近く浮かびし島の緑美はしく、陸を離るゝ事二町許り、嘗て頼朝石橋山の一戦に破れ、海に航して房州に脱れし時、公を助けし功にて、此の地を領せしより、子々孫々今に至りて絶えずと、我等は右に波太神社の石階を登り、此所に二三のスケッチをなし、撫子の花薄紅に咲く小山を下りて、馬車に歸れば、海を蔽へる暗さ

雲低く靡きて、風少しく強く、雨は愈々降りまさりぬ。
 雨の山、雨の海、四顧茫々たる五月雨の中を衝いて、高く低く動揺する馬車は霧地に駛り、次第に高くなり行く山坡を登りて、人無く、家無く、死せるが如き四邊の光景を、後にくゞと目送しつゝ、深く垂れたる桐油かゞげて、時に窓より顔を出せば、熱き頬吹く雨と風と、心地よき事いふ可からず、名馬太夫黒を出せし太夫岬を、烟雨の中に望みつゝ、疾驅する事三時間、時に暗雲少しく展けて、ほのめき出づる日の光に、降る雨紅く霞みて、美はしかりき。和田に着て、此所より千倉行の馬車に乗り替え、麥畑つゞく松並木の間を過ぎ、七浦傳ひに、降りみ降らすみ、定め無き空を仰ぎつゝ、日毎の馬車に乗り疲勞れし身軀を斜めにして、揺られくゞて進む程に、道は全く海を離れ、畑より畑、丘より丘、時に小川の畔を駛れば、小料理屋の窓より、怪しき女の手招きするなど、昔時の小歌に似たる風俗と、をかしく思ひつゝ、駛り去りて、早や暮れなんとする夕の風に、濡れたる袖を吹かせながら千倉に

入るに淋しき町の温泉らしきものも見えざるを、怪しく思ひて取者に問へば、直ぐ其所を指しつゝ、細き道二町許り進みて、石橋を渡りし川の畔にて馬車を止む。

家は古き社を前にして、汚き小川に臨みたる古き二階家、白粉粧けし二十許りの女の、肥りたるが案内して、此方へといふに、いづれも暫時顔見合はしつゝ、二階に登れば、歩む毎にゆらくと揺らめく家の氣味悪く、欄に倚りて下を見れば、庇の瓦半ば落ちて、木組を露はせる家根荒れに荒れたる凄まじさ。斯くては温泉も如何あらんと案じつゝ、暫時憩ひて後風呂に降れば腐れし板敷、湯の香異様に香りて、硫黄に似たる臭き湯の、淺きこと肩に及ばぬ心細さにつくぐ今宵の哀をかこちぬ。

夜に入りて燈火點けし頃、夕餉の膳に向へば、鱒の鹽焼冷へたるに箸上るも辛く、酒に酔を發するもの無く、三味線でも弾きませうかといふ女の言葉斥けて、蚊帳吊らせて床に入れば、聽て二階の別室に、爪弾の音聞え、滯留客

の唄ふ聲、耳につきて、眠られぬ夜の軒の雨、小川の水の堰かるゝ音、うつらうつらと寢覺して聞くや更け行く鐘の聲。

四

雨晴れたれど曇れる空の、外洋より送る朝風夾やかに渡りて、濡れにぬれたる砂路を歩む快さ、右は斷續する草山青く、桑畑高き間を経て、幾つかの漁村を過ぎ、白子を後に乙濱に至りし頃は午前十時、一灣の穩波を湛えたる海水、雲を出づる日に映じて鮮やかなるに、白き砂を掩へる青き藻芝、一面に擴がれる彼方には、赭黒色の砂岩長く海に突出して、海水に映する美はしさ、街道は波打際に近く接して、紅色玻璃の高燈籠、引き上げし舟の傍に有り。此所より白濱迄は一里許り、左に絶えず海を望み、右に水田に沿ふて進み行けば、赤き牛に農具つけたるを曳きて、若き女二人、膝を没する水田の泥濘

に入り、鞭を上げて牛を追ひつゝ、ほうら大儀だく、ほうら廻つてほうら廻つてと、^{いたは}導く様面白く、暫時立止り寫生し終れば、一行は既に三四町先なる草原に立ちて、我を待つ事久しかりき。之より右に望みし草山遠く退きて、山畑低く連りたる裾に、田家の烟淡く立ち昇る彼方は、里見義實の墳墓、弘法大師の芋井戸と、嘗て遊びし山本子の語るを聞きつゝ、興無ければ立寄らず、いつしか白濱の漁村に着きぬ。某旅店に晝食を認め、野島の燈臺眺めんと、苔蒸したる石垣に沿ふて、漁家の背後を繞り、廣き芝原に出づれば、前は即ち太平洋。風に吹き撓られし松の傍を過ぎ、大なる魚籠轉がれる間より、舟と舟との間を抜けて、更に廣き芝原に立てば、黒き岩海蛇の如く起伏する彼方、裾に緑濃やかなる一帯の松林を纏へる純白の八角燈臺は。柔かき日光に輝きつゝ、屹然として聳えたり。

青き芝を踏み黒き岩を傳ひ行きくゞて波打際に至れば海の中より忽ち起る鋭き口笛響き渡るに、聲する方を顧れば、碧き海波を蹴る白き脛のみ見えて、姿は水に隠れたれど、岸に燃ぐ篝火を圍みて、肌露なる女二三人、炎々たる火に冷えたる肌を温むるを見て、海草採の海女と悟りぬ。斯くて芝の上を行く事二町許り、山本子のモク採りの話を聞きつゝ、白濱明神の畔に至れば、青き芝原に放し飼せる牛幾匹と無く遊びて、英國風の繪畫に、屢見る如き長閑なる光景面白く、呆然として眺め入る。

燈臺は白濱明神の松原を繞りし所、青黒き岩の上に立ちて、壯嚴なる姿は、犬吠岬の其れに劣らざれど、眠るが如き穩やかなる四邊の風光に圍まれしかば、我等の情を惹く事尠なかりき。岩を傳ふて明神の社頭より、華表前に出づれば、遙かに岩又岩の磯つゞき、^{めら}布良根本一帯の海岸日に照らされて打霞み、赭黒き岩に打ち込む波、白く崩れて遠く退く潮烟り、浦々に飛ぶ白き鳥の、砂地を走る後を追ふて、漁村に入れば、晴れたる空又も曇りて、細雨はらくと降り來る。